厚沢部町教育委員会発掘調査報告書　第９集

史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡

館 城 跡 Ⅶ

－平成 22 年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書－

平成23年３月

北海道厚沢部町教育委員会

序　文

北海道南西部に位置する厚沢部町は、人口５千人に満たない小さな町ではありますが、川と森に囲まれた自然豊かな町であります。まちの８割以上を森林が占め、ヒノキアスナロやゴヨウマツの北限であり、トドマツの南限でもあります。多様な樹種で構成される森林は、多様な野生生物を育み、厚沢部町独特の豊かな自然景観を創りあげました。私たちの先人も、厚沢部の豊かな森とともに暮らし、その伝統や文化を築き上げてきました。このたび発掘調査を実施いたしました館城跡も、そのような町の貴重な文化財の一つであります。

館城跡は、明治元年、松前藩によって蝦夷地経営の新たな拠点として築かれましたが、築城開始からわずか２ヶ月半という短期間で、旧幕府軍の攻撃を受け落城し、その後、再建されることなく現在に至っております。今では、わずかに土塁や堀、礎石、井戸跡が、当時の面影をとどめるのみとなっています。

現在の館城跡は、「館城跡公園」として町民に親しまれており、毎年５月上旬には「館城跡まつり」が開催され、多くの町民が心待ちにする恒例の行事となっています。また、幕末から維新期にかけての北海道の大きな変革期を象徴する遺跡として、学術的にも高く評価されており、観光客や歴史学習のツアーなどに利用され、注目を高めています。

昭和41年に北海道の指定史跡となり、さらに平成14年に国の史跡に指定されました。

平成17年から史跡の概要を把握するために発掘調査を継続して実施しており、また、平成18年度には保存管理計画を策定し、史跡の保存管理に努めているところであります。

今後は、館城跡のより積極的な公開・活用を図っていくために、本格的な保存整備事業を実施する予定です。

今年度の発掘調査では、館城跡北西部の堀・柵列の所在を確認するために、史跡外を含めた範囲内容確認調査を行いました。史跡外西側の町道上館城ノ岱線敷地内で、これまでどうしても見つからなかった堀・柵列を確認することができ、館城跡の内容確認について大きな進展がありました。これらの成果が館城跡の保存整備に活用されるのみならず、調査研究における基礎資料となることを期待いたします。

最後になりますが、本事業の実施に際しまして、文化庁、北海道教育委員会をはじめとする諸機関・各氏から、多くのご指導・ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成23年３月

厚沢部町教育委員会

教育長　中　井　文　夫

例言

1．本書は、厚沢部町が国庫補助（埋蔵文化財緊急調査費）を受けて、平成22年度に実施した「町内遺跡発掘調査等」事業における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2．遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほかである。
3．本書の編集は石井淳平（厚沢部町教育委員会事務局社会教育係主事・学芸員）が担当した。
4．文責者は、特に記した者以外は石井淳平である。
5．現場及び遺物の写真撮影は石井淳平が担当した。
6．陶磁器の鑑定は、石井淳平が行った。
7．陶磁器の実測・トレースの一部を株式会社トラスト技研に委託したほか、石井淳平が行った。
8．遺構図面等のトレースは石井淳平と佐々木真弓が行った。
9．花粉分析はパレオ・ラボ株式会社に委託した。
10．出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
11．調査にあたっては、「館城跡調査検討委員会」を組織し、指導を受けながら調査を実施した。

委　員　長	藤沼　邦彦（元弘前大学人文学部教授）
副 委 員 長	後藤　元一（後藤環境デザイン研究室）
委　　員	久保　　泰（松前町郷土資料館館長）
	佐藤　永吉（館観光促進会会長）
	千田　嘉博（奈良大学文学部教授）
指導・助言	水ノ江和同（文化庁文化財部記念物課）
	西脇対名夫（北海道教育庁文化・スポーツ課文化財調査グループ）
	田中　哲郎（北海道教育庁文化・スポーツ課文化財調査グループ）
	中田　裕香（北海道教育庁文化・スポーツ課文化財調査グループ）

12．調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。
伊勢谷久夫(故人)、大森忠行、木村秀喜、只野みさほ、只野久美子、塚田直哉(上ノ国町教育員会)、山崎香

記号等の説明

1．実測図等の縮尺は原則として以下の通りとし、全てスケールを付して図中に標示する。
　遺構図　　40分の１、陶磁器・金属製品　　３分の１
2．実測図中の方位は真北を示す。
3．土層等の色調、含有物の混在状況（面積比率）については、『新版　標準土色帖』(1996年版）に基づき表記した。

目次（本文・目次・表・図版）

序文
例言
記号等の説明

＜本文目次＞

Ⅰ章　調査の概要 …… 1
1．調査要項 …… 1
2．調査体制 …… 1
3．調査にいたる経緯 …… 1
4．調査結果の概要 …… 3
5．調査の経過 …… 4
（1）第1調査区調査準備等 …… 4
（2）第1調査区現地調査 …… 4
（3）第1調査区整理作業等 …… 4
（4）第2調査区調査準備等 …… 5
（5）第2調査区現地調査 …… 5
（6）第2調査区整理作業・報告書編集 …… 5

Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7
1．地理的環境 …… 7
（1）位置と地形 …… 7
（2）地質 …… 7
（3）館城跡関連遺跡 …… 7
2．館城築城とその経緯 …… 8
（1）13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任 …… 8
（2）正義隊のクーデター …… 8
（3）館城の築城 …… 8
3．館城築城以前の館地域と松前藩との関わり …… 9
Ⅲ章　調査の方法 …… 15
1．発掘調査基線 …… 15
2．調査の方法 …… 15
（1）掘削 …… 15
（2）現地測量 …… 16
（3）写真記録 …… 16
（4）1次整理 …… 16
（5）2次整理 …… 16
（6）保管 …… 16
3．基本層序 …… 17

Ⅳ章　遺構と出土遺物 …… 19
1．第1調査区 …… 19
（1）調査の概要 …… 19
（2）調査の手順 …… 19
（3）1－1調査区 …… 19
（4）1－2調査区 …… 19
（5）1－3調査区 …… 20
（6）1－4調査区 …… 20
（7）1－5調査区 …… 20
（8）1－6調査区 …… 21
（9）1－7調査区 …… 21
2．第2調査区 …… 21
（1）調査の概要 …… 21
（2）調査の手順 …… 22
（3）2－1調査区 …… 22
（4）2－2調査区 …… 22
（5）2－3調査区 …… 22
3．調査区出土遺物 …… 23

Ⅴ章　自然科学的分析 …… 55
1．館城跡の花粉分析 …… 55
はじめに …… 55
（1）試料と分析方法 …… 55
（2）分析結果 …… 55
（3）遺跡周辺の古植生 …… 56

Ⅵ章　調査のまとめ …… 61
1. 館城北側の状況―第1調査区の成果― …… 61
2. 史跡外西側の堀・柵列―第2調査区の成果― …… 62
3. 館城跡北側及び西側の堀・柵列 …… 62

参考文献 …… 67

＜挿図目次＞

Ⅰ章
図１　調査区遺構配置図 …… 6
Ⅱ章
図２　厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡 …… 11
図３　館城跡の位置と周辺の地形 …… 12
図４　指定地周辺の地形と指定範囲 …… 13
Ⅲ章
図５　発掘調査グリッド模式図 …… 15
図６　基本層序模式図 …… 17
Ⅳ章
図７　第１調査区調査区配置及び遺物出土状況 …… 25
図８　１－１調査区平面図 …… 26
図９　１－１調査区東壁断面図 …… 27
図10　１－２調査区平面図 …… 28
図11　１－２調査区北壁断面図 …… 29
図12　１－２調査区東壁断面図 …… 30
図13　１－３調査区平面図 …… 31
図14　１－３調査区北壁断面図 …… 32
図15　１－３調査区東壁断面図 …… 33
図16　１－４調査区平面図 …… 34
図17　１－５調査区平面図 …… 35
図18　１－６調査区平面図 …… 36
図19　１－６調査区東壁断面図 …… 37
図20　１－７調査区平面図 …… 38
図21　１－７調査区西壁断面図 …… 39
図22　第２調査区調査区配置図 …… 40
図23　２－１調査区平面図 …… 41
図24　２－１調査区南壁断面図 …… 42
図25　２－２調査区平面図 …… 43
図26　２－２調査区北壁断面図 …… 44
図27　２－３調査区平面図 …… 45
図28　２－３調査区北壁及び堀縦断面図 …… 46
図29　調査区出土遺物（１） …… 47
図30　調査区出土遺物（２） …… 48
図31　調査区出土遺物（３） …… 49
Ⅵ章
図32　第２調査区堀・柵列の位置推定図 …… 64
図33　昭和23年撮影航空写真と調査区の比較 …… 66
図34昭和51年撮影航空写真と調査区の比較 …… 66

＜表目次＞

表１　館城跡発掘調査の経過 …… 2
表２　平成22年度調査の概要 …… 3
表３　平成22年度館城跡発掘調査基準杭と座標 …… 15
表４　掲載遺物一覧（陶磁器・ガラス製品） …… 50
表５　掲載遺物一覧（金属製品・石製品） …… 52
表６　平成22年度出土遺物集計表 …… 53

＜写真図版目次＞

写真図版１ …… 71
　写真１　1－1～1－6調査区全景（南から）
写真図版２ …… 72
　写真２　1－1調査区沢状地形検出状況（南から）
　写真３　1－2調査区沢状地形検出状況（南西から）
写真図版３ …… 73
　写真４　1－3調査区沢状地形検出状況（南から）
　写真５　1－1調査区東壁断面（南西から）
写真図版４ …… 74
　写真６　1－2調査区東壁断面（南西から）
　写真７　1－3調査区北壁断面（南西から）
写真図版５ …… 75
　写真８　1－3調査区東壁断面（南西から）
　写真９　1－4調査区全景（南から）
写真図版６ …… 76
　写真10　1－4調査区北端沢状地形検出状況（南東から）
　写真11　1－5調査区全景（南から）
写真図版７ …… 77
　写真12　1－6調査区全景（南から）
写真図版８ …… 78
　写真13　1－6調査区沢状地形掘削状況（南から）
　写真14　1－6調査区沢状地形検出状況（南から）

写真図版９ …… 79
写真15　1－6調査区東壁断面（南西から）
写真16　1－7調査区全景（西から）
写真図版10 …… 80
写真17　2－1調査区南壁断面（北から）
写真18　2－1調査区南壁サブトレンチ（東から）
写真図版11 …… 81
写真19　2－2調査区全景及び北壁断面（南から）
写真図版12 …… 82
写真20　2－2調査区柵列検出状況（南から）
写真図版13 …… 83
写真21　2－2調査区柵列断面（南から）
写真図版14 …… 84
写真22　2－3調査区全景及び北壁断面（南から）
写真図版15 …… 85
写真23　2－3調査区堀断面（南から）
写真24　2－3調査区堀縦断面（東から）
写真図版16 …… 86
写真25　調査区出土遺物（１）
写真図版17 …… 87
写真26　調査区出土遺物（２）
写真図版18 …… 88
写真27　調査区出土遺物（３）
写真28　調査区出土遺物（４）
写真29　調査区出土遺物（５）
写真30　調査区出土遺物（６）
写真31　調査区出土遺物（７）
写真32　調査区出土遺物（８）
写真図版19 …… 89
写真33　調査区出土遺物（９）
写真34　調査区出土遺物（10）
写真35　調査区出土遺物（11）
写真36　調査区出土遺物（12）
写真37　調査区出土遺物（13）
写真38　調査区出土遺物（14）
写真図版20 …… 90
写真39　調査区出土遺物（15）
写真40　堀出土遺物

Ⅰ章　調査の概要

１．調査要項

事 業 名：町内遺跡発掘調査事業
調査主体：厚沢部町教育委員会
調 査 地：北海道檜山郡厚沢部町字城丘179－1、179－2、182－1、182－2、182－1地先、182－2地先
調査面積：掘　削　1,398㎡（うち史跡内1,138㎡、史跡外260㎡）
調査期間：現地調査：平成22年５月11日～平成22年８月30日
　　平成22年11月４日～平成22年12月10日
　　整理作業：平成22年９月１日～平成23年３月31日

２．調査体制

厚沢部町教育委員会事務局
　教　育　長　中井文夫
　事 務 局 長　斎藤洋子
　主　　幹　笹森浩明
　社会教育係　石井淳平（発掘担当者）
　社会教育係　三戸康彰
　社会教育係　船瀬祥太
　社会教育係　笠原　健
発掘調査作業員　大川順子、佐々木真弓、沢野みどり、武田睦子、長尾数利、山岸富三郎、和田利憲
整 理 作 業 員　佐々木真弓

３．調査にいたる経緯

館城跡は、昭和41年７月７日付北海道教育委員会広報第2945号の告示（北海道教育委員会告示第65号）により、道指定史跡となった。

昭和63年頃から、町では国の史跡指定へ向けての取り組みを進め、昭和63年９月29日～10月13日、平成元年10月２日～11月４日、平成２年10月２日～16日の３ヵ年にかけて、遺構確認調査を行った。この３カ年の調査では、館城跡東部の溝や柵の所在が明らかとなった。これらの成果を受け、平成13年６月25日、史跡松前氏城跡福山城跡の追加指定の申請をし、平成14年９月20日付官報号外第208号で、「史跡松前氏城跡福山城跡館城跡」として国指定の告示（文部科学省告示第183号）がなされた。

平成15年７月に担当職員を配置し、平成17年から２カ年で保存管理計画を策定した。また、平成17年度から、保存管理計画策定に必要な堀・土塁など館城跡の外郭線を構成する遺構及び、「散兵壕跡」の内容確認調査を実施した（厚沢部町教育委員会2007）。平成18年度の調査により、館城跡西辺の堀・柵列の所在を明らかにすることができたが、西辺の堀の北側延長は史跡指定地外の町道（上館城ノ岱線）下へと延びているため、追跡調査が不可能な状況となった。

このことから、外郭線確認のための発掘調査を継続して実施することとし、平成19年度から21年度までの３カ年の調査を実施した。

平成19年度は、地籍図及び航空写真の分析により、現在確認している西辺の堀のさらに西側に、より大きな区画が存在する可能性が浮上したことから、これまで部分的にしか発掘調査が実施されていなか

った館城跡南西部において、堀・柵列の所在確認調査を実施した。当初の予想に反し、西辺の堀の西側により大きな区画が存在する可能性は否定された。

平成20年度は南辺の堀・土塁・柵列の構造及び残存状況の確認（第１調査区113㎡）と北東部の堀・柵列の所在確認（第２調査区1,329㎡）を目的として調査区を設定し、第２調査区では堀・柵列の延長を確認するとともに「伝米倉跡」と呼称した地点では、表土直下から多量の炭化米と広範囲の焼土層、厚さ約50cm の整地層を検出した。

平成21年度は館城跡西辺及び北辺の外郭線確認、北東部の整地層範囲及び外郭線確認、南西部の堀・土塁・柵列の構造確認を行った。また、礎石の地表面検出を行い、測量調査を実施した。３棟の礎石建物が検出され、そのうち１棟は、江差町増田家文書『館築城圖』に描かれる建物と非常によく似ることが明らかになった。

平成22年度は、平成21年度第３調査区に隣接する西側に第１調査区を、平成18年度調査区に隣接する史跡外西側町道上館城ノ岱線道路敷地内に第２調査区を設定した。館城跡北辺にあたる第１調査区では、堀・柵列は検出できなかった。第２調査区では、町道敷地内で堀・柵列が検出され、これらが、町道敷地内で約90°屈曲し、北へ延びることが確認された。

表１　館城跡発掘調査の経過

年　度	調査地区	面積（㎡）	調査の目的	調査結果
昭和63～平成2年	南辺土塁地区	2,400	南辺土塁構造確認	
	東辺地区		東辺の堀・柵列の所在確認	堀・柵列の所在を確認
	西辺地区南部		西辺の堀・柵列の所在確認	堀・柵列の所在及びそれらが、さらに北方に延びることを確認
	郭内地区		郭内の建物の所在確認	柱穴列、建物跡を確認
平成17年度	南辺土塁地区	386	南辺土塁構造確認	
	「散兵壕跡」地区		「散兵壕跡」の構造確認	風倒木痕であることを確認
	北辺地区		北辺の堀・柵列の所在確認	所在を確認できず
平成18年度	西辺地区	1,798	西辺の堀・柵列の所在確認	調査区西側へ延びることを確認
平成19年度	南西部地区	397	南辺の堀西側の範囲を確認	当該地区の堀及び柵列の所在が明らかになるとともに、近代の水路等の攪乱との関係が問題となった
平成20年度	南西部地区（第1調査区）	113	南辺の堀・土塁・柵列の構造及び残存状況確認	堀と近代の水路が別の時期に構築されたことが明らかとなった 柵列の柱痕が良好に検出
	北東部地区（第２調査区）	1,329	北辺の堀・柵列の所在確認	館城跡北東部の堀及び柵列の所在を確認 「伝米倉跡」周辺の整地層を確認

平成21年度	史跡外西側地区（第1調査区）	1,090	平成18年度に検出した堀・柵列の延長の確認するため、史跡外西側に調査区を設定	町道東側までは堀が所在することを確認したが、町道西側では堀・柵列を確認できなかった。町道道路敷地盛土下で道路拡幅以前の用水路を検出した。堀を踏襲・再利用した可能性もある。
	北辺地区（第2調査区）	788	北辺の堀・柵列の所在確認を目的として町道東側と「伝米倉跡」北西の二カ所に調査区を設定	いずれの調査区でも堀・柵列は確認できなかったが、自然の流路が検出され、これが館城北辺の区画として機能した可能性が高まった。
	北東部地区（第３調査区）	292	「伝米倉跡」西側の整地層及び区画施設の所在確認	平成20年度調査で検出した柵列の延長上で「溝状遺構」を検出した。柱痕を確認することはできなかったが、区画施設の可能性が高い。
	南西部地区（第４調査区）	147	南西部の屈曲部分における堀・土塁・柵列の位置関係の確認	堀・土塁・柵列が良好に残存することを確認した。柵列は堀・土塁と並行して屈曲する。
	郭内地区（第５調査区）	4,550	礎石の残存状況及び建物配置の確認	247基の礎石を検出した。『増田家文書』に記載のある『館城平面図』の建物に類似する5.5間×27間の配列が確認された。「奥御殿」に相当する建物である可能性が想定される。また、「伝米倉跡」南側では5間×13間の礎石配列を確認した。

４．調査結果の概要（図 1）

平成17年から再開された館城跡の発掘調査は、館城跡の外郭線を構成する堀・土塁・柵列の所在確認を目的として実施され、現在、東南二面の堀・柵列についてはほぼその所在が確認されている。しかし、西辺の堀・柵列についてはその北半が、北辺については北東部を除いて、その所在が確認されていない。今年度の調査では、西辺及び北辺の堀・柵列を確認することを主たる目的として調査区を設定した。併せて、館城跡の中心部分（旧町有地　字城丘160、168－1、168－3）において礎石が良好に残存することから、これらの配置状況についてピンポールを用いた地表面確認を行った。

表２　平成 22 年度調査の概要

５．調査の経過

年　度	調査地区	面積（㎡）	調査の目的	調査結果
平成22年度	北辺地区（第1調査区）	1,138	北辺の堀・柵列の検出を目的として、平成21年度第３調査区西側に調査区を設定	堀・柵列を検出できなかった。沢状地形を検出
	町道地区（第2調査区）	260	西側の堀・柵列の検出を目的として、平成18年度調査区に隣接する町道上館城ノ岱線道路敷地内に調査区を設定	堀・柵列を検出した。堀は約90°屈曲し、北へ延びる。

（1）第１調査区調査準備等

２月18日　平成22年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

２月19日　史跡名勝天然記念物現状変更許可申請書提出

４月１日　21庁財第424号により国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定

４月16日　21受庁財第４の1169号により現状変更許可

（2）第１調査区現地調査

５月11日　借上げ車両・借上げ仮設ハウス納品、調査区設定及び測量用基準杭設置

５月13日　発掘作業員雇用契約の締結、調査機材搬入、環境整理

５月14日　1－1～1－3調査区表土掘削開始

５月14日　トータルステーションシステム使用開始

６月４日　1－1～1－3調査区の表土掘削作業完了
遺構検出できなかったため、さらに西側に５ｍ拡幅する。

６月22日　1－1～1－3調査区表土掘削作業完了
堀・柵列を確認できない。

６月25日　1－4調査区表土掘削開始

７月２日　1－4調査区表土掘削作業完了
北端で沢状地形を検出

７月５日　1－5調査区表土掘削作業開始

７月８日　1－5調査区表土掘削作業完了
堀・柵列を確認できない。

７月14日　館中学校１～２年生８名社会科現地学習のため訪問

７月15日　1－6調査区表土掘削作業開始

７月20日　第１回館城跡調査検討委員会現地視察

７月21日　第１回館城跡調査検討委員会会議

８月２日　1－7調査区表土掘削作業開始

８月６日　1－6調査区表土掘削作業完了
発掘作業員解雇

（3）第１調査区整理作業等

８月10日　1－6調査区断面図等作成

８月12日　第１調査区埋戻し業務着手

８月30日　第１調査区埋戻し業務完了

９月１日　整理作業員１名雇用
遺物水洗作業開始

９月２日　遺物水洗作業終了
注記作業開始

９月10日　遺物注記完了
遺物接合作業開始

９月14日　遺物接合作業完了

９月15日　調査区断面図作成作業開始

９月21日　遺物写真撮影開始（56点）

９月23日　遺物写真撮影完了
９月27日　調査区断面図作成作業完了
　　遺構平面図編集作業開始
９月30日　作業員解雇
10月12日　陶磁器実測作業開始
10月14日　陶磁器実測作業完了

（４）第２調査区調査準備等

10月22日　道路工事等施行承認申請書
10月25日　道路工事承認書
10月26日　陶磁器実測業務見積合せ及び契約
　　発掘作業にともなう町道上館城ノ岱線撤去復旧工事入札及び契約
　　道路法第46条第１項第２号による交通規制通知

（５）第２調査区現地調査

11月４日　町道上館城ノ岱線撤去工事着手
11月８日　作業員雇用
　　環境整備、調査区周辺草刈り、２－3調査区残土除去作業開始
11月11日　第２回館城跡調査検討委員会現地視察
11月12日　第２回館城跡調査検討委員会会議
11月17日　２－2調査区柵列堀方検出
11月19日　堀一部完掘
　　調査区埋め戻し、ブルーシートにて養生
　　作業員解雇

（６）第２調査区整理作業・報告書編集

11月22日　平成23年度文化財関係補助事業ヒヤリング（札幌市）
12月10日　町道復旧工事着手
12月13日　町道撤去普及工事完了検査
12月24日　補助事業に係る事務連絡用務（札幌市）
１月７日　遺構・遺物図版作成作業開始
１月14日　陶磁器実測業務完了、成果品納入
１月20日　第２調査区出土遺物写真撮影
１月24日　遺構図版、遺物図版編集作業完了
１月26日　遺構原稿執筆開始
２月10日　遺構原稿完了
　　報告書印刷製本業務見積合せ、契約
３月13日　平成22年度館城跡発掘調査成果報告会開催
３月31日　発掘調査報告書刊行

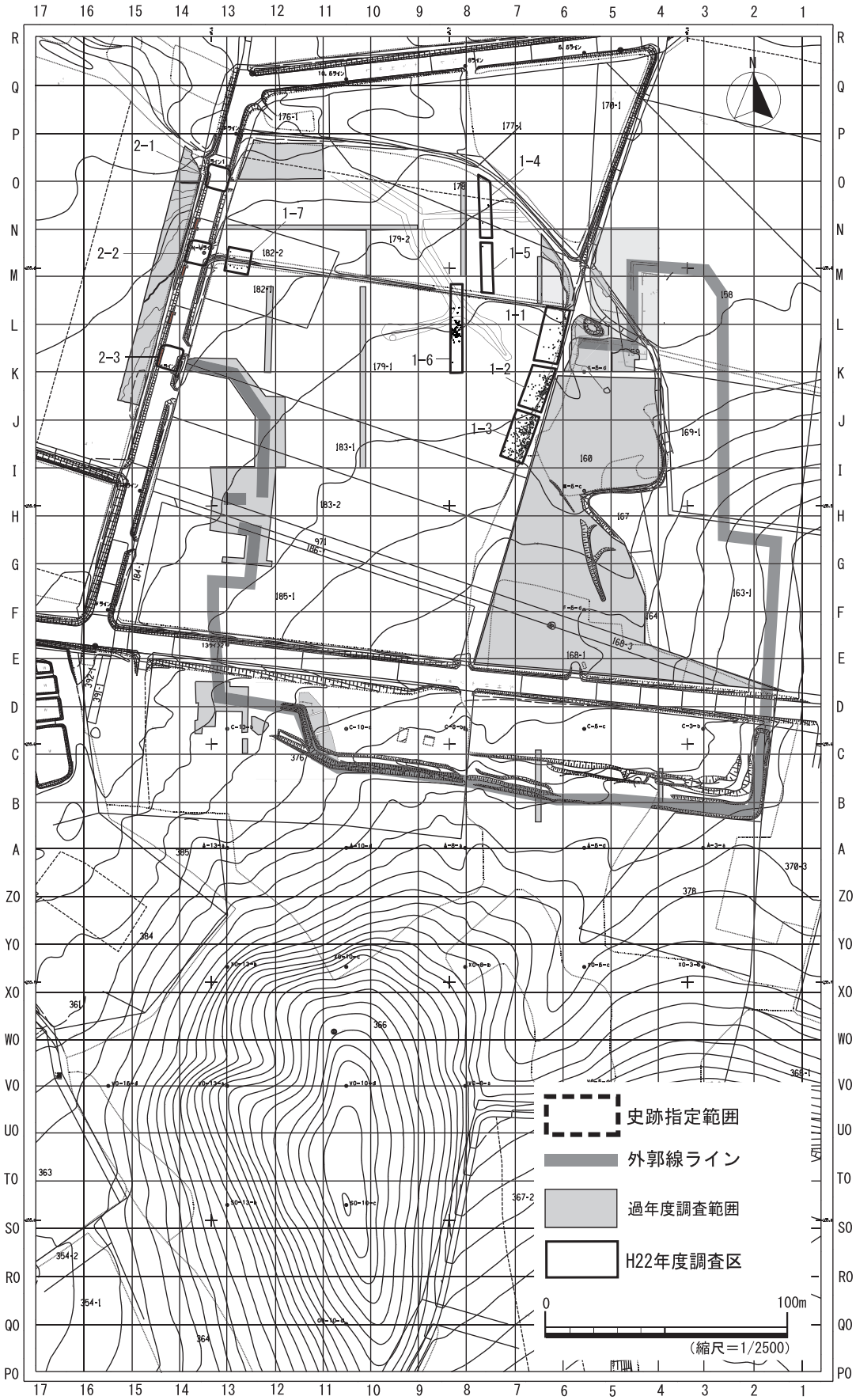

史跡指定範囲
外郭線ライン
過年度調査範囲
H22年度調査区
0
100m
（縮尺＝1/2500）
N
1-1
1-2
1-3
1-4
1-5
1-6
1-7
2-1
2-2
2-3

図１　調査区遺構配置図

Ⅱ章　遺跡の位置と環境

１．地理的環境

（１）位置と地形（図２～４）

厚沢部町は、北海道南西部渡島半島に所在し、北緯41°47′～42°03′、東経140°09′～140°28′に位置する。江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町と界を接し、町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶉川の三河川の流域にまたがり、総面積は460.42㎢、東西約29㎞、南北約27㎞の広がりをもつ。

館城の所在する館地区（厚沢部町字新栄、字当路、字中館、館町、南館町、字城丘、字富里の総称で旧大字館村にほぼ一致する地域）は、東側を日本海と太平洋との分水嶺を形成する山塊、南側及び西側を梯子山、幌内岳、五郎助岳などの標高500ｍ級の山々、北側を字中館のなだらかな丘陵地帯に囲まれた盆地である(図３)。盆地の規模は、古佐内川と厚沢部川の合流点付近の地峡から佐助沢、泉沢の合流地点までの東西約９㎞、南館の市街地から館町市街地までは南北約1.5㎞である。

館城跡は、厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約１㎞に位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50ｍで、糠野川に面した平坦面からの比高差は約20ｍである。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約30ｍの小丘陵（通称「丸山」）となっている。

（２）地質

館地区の地質は、新第三紀に形成された厚沢部層、館層、鶉層などのシルト岩や砂岩によって形成され、さらに、これらの基盤として、古生代の松前層群と中生代の上磯層群がある。新第三紀中新世前期には、グリーン・タフ変動に伴う火山活動により福山層の堆積があり、中新世中期の大規模な海進により、檜山層群が堆積する。厚沢部層の時期に現在の向斜軸（館城跡、鶉町市街地の東側をとおり、南北方向に延びるライン）より東側の沈降に伴って、多量の堆積物が形成された。

館盆地の中央部分では軟質の館層が広く分布することから、河川の浸食の影響を強く受け、広く開析された低平地が形成されている。字新栄から館町市街地にかけては、１段の河成段丘が形成され、現河床から約45～55ｍの比高差をもつ。段丘堆積物は、松前層群からの供給によるチャート・砂岩・粘板岩などの礫で構成される。館町、字当路、字新栄では沖積平地が発達し、厚沢部川の氾濫原を構成する（参考文献：北海道開発庁1970、工業技術院地質調査所1975)。

（３）館城跡関連遺跡（図２）

館城跡及び箱館戦争関連遺跡として、①官軍の沢、②稲倉石古戦場、③鶉村古戦場、④丸山古戦場、⑤ロクロ場、⑥開墾役所跡、⑦米揚岱などがある。①は、明治２(1869)年に新政府軍の進撃路となった沢、②～③は館城攻防戦にともなう古戦場、⑤～⑥は安政年間に設置されたとされる開墾役所跡とそこへ荷揚げした伝えられる地域である。⑦は館城跡に物資を荷揚げしたと伝えられる地域である。

②稲倉石古戦場は、明治元(1868)年11月10日、館城攻略のため箱館五稜郭を出陣した旧幕府軍一聯隊と松前藩兵との戦闘が行われた古戦場である。古戦場は、現在の鶉ダム築堤付近と推測され、ダム建設地に選定されたことから明らかなように、急峻な岩山からなる地峡である。この地点を旧幕府軍に突破された場合、その背後は鶉川が開析した平野が広がり、館城までの進撃を許すこととなる。松前藩としては館城防衛上、稲倉石の守備は必須であった。そのため、松前藩は谷底の道路を封鎖し、小口径砲数門を装備した陣地を構築していた。旧幕府軍による陣地の攻略は困難とみられたが、左右の岩山から狙

撃されたため、支えきれずに陣地を捨てて敗走した。

③鶉村古戦場は、鶉村に宿陣した旧幕府軍の本陣を松前藩軍が強襲したことから起こった戦闘である。稲倉石で松前藩軍を敗走させた旧幕府軍は、11月13日鶉村（現字鶉）へ進軍し、ここに宿陣する。翌14日、２小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、俄虫村（現本町・新町ほか）方面から進んできた松前藩兵が鶉村本陣を襲撃した。旧幕府軍は暫時の戦闘の後これを撃退している。

④丸山古戦場は、旧幕府軍の偵察隊と館城から進出した松前藩側の偵察隊との小競り合いである。11月14日、旧幕府軍が２小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、鶉村から館盆地へと越える小丘陵において、松前藩兵と遭遇し、戦闘となった。この戦闘では、旧幕府軍のラッパの音に驚き、松前藩兵が敗走したことが「麦叢録」（菊地1998）などに記されているほか、松前藩側の証言からも確認されている(『櫻鳥－厚沢部町の歩み－』p448)。

⑤開墾役所跡は、館城築城以前に松前藩が設置したとされる役所の跡である。次節５項で詳述する。

２．館城築城とその経緯

（１）13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任

松前藩13代藩主松前崇広は、慶応２年四月に病死する（『北門史綱』巻六　永田1991)。

崇広の死後、12代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、藩政の中枢は、松前勘解由など崇広時代の重臣らが掌握したままであった。こうした状況に反発する反勘解由派の藩士達が、『建言書』(『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』江差町史編集室1979）を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞すこととなるが、反勘解由派の蠣崎民部らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

（２）正議隊のクーデター

明治元(1868)年７月28日、反勘解由派の藩士達は、『正議隊建白書』（江差町史編集室1979）を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか４名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なったという（『奉命日誌』江差町史編集室1979)。

７月29日、江差奉行尾見雄三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、８月１日に福山城下へ到着した（『慶応四年四月より行事見聞録』江差町史編集室1983)。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人団を反勘解由派に引き込んでおり、江差商人団が反勘解由派の資金源となったとの見解がある（『江差町史』第六巻通説二ｐ５)。

尾見の到着により勢力を増した正議隊は、８月１日から勘解由派の粛清を開始した。一連の粛清は、９月24日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となった。

（３）館城の築城

勘解由派に対する大量粛清により藩政の実権を手にした正議隊首脳部は、館村への築城を計画した。『奉命日誌』９月11日の項に「館村へ御築城願書壱通ハ下国東七郎ヲ以テ　太政官へ進達　壱通ハ雄三裁判所へ進達」とあり、館城築城に係る願書が、下国東七郎によって太政官及び箱館裁判所へ提出された。この築城願書に対する新政府築城許可書は11月11日付で交付されている（『江差町史』巻六通説二 p36)。『報功心血』（函館市中央図書館蔵）では、「館村移城を決すると雖ども、未だ朝廷の裁可を得ざるの間は、公然たる経営を唱ふる能はず。故に勧農の名に籍りて、これが準備に従はしむるの内儀となり」とあり、鈴木文五郎、牧村可也、今井愚一、鈴木次郎蔵、三浦巽、石塚和平が「準備委員」として「専任」された。『奉命日誌』８月28日の項には、氏家丹宮、鈴木又五郎、牧村可也、今井晦輔、鈴木次郎蔵、石塚知平、三浦巽らが勧農方として江差表へ出張を命じられ、関川平四郎が御先手組へ取り立てられ、勘定奉

行・作事方を命じられたことが記されている。すなわち、館城築城について、８月末の段階では新政府の許可が得られていないため、勧農の名目によって現地作業が開始されたと考えられる。

館城築城工事の経過は、勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、関川重孝（平四郎）が残した日記によって、うかがい知ることが出来る（江差町史編集室1981）。以下、関川平四郎日記により、館城築城工事の様子を考える。

９月２日に館村の鈴木文五郎に宛てて遠眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。９月14日には、大工四十人・木挽十人が館へ向けて出立している。９月21日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ、下職28名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。

また、９月12日頃から土木作業が開始されており、９月23日現在の延べ人工数は、1,525人工に達している。９月28日現在の館城普請に係る人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭五人、木挽２人、平大工92人、下木挽21人、土方小頭７人、土方243人、人足183人となっている。

10月14日には、建具師３人が木材と供に館へ向かっており、また、10月16日には、間似合、唐紙、玉子などの襖材料が館へ送られており、館城普請は、内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10月24日には、棟上げの儀式が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10月26日には、七飯峠下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて木間内まで出張している。館城普請の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの10月26日をもって終わっており、この前後に、館城の普請もほぼ終了していたと考えられる。

３．館城築城以前の館地域と松前藩との関わり

安政２(1855)年の第二次蝦夷地幕領化により、松前藩領は、現在の知内町付近から熊石町付近に至る西海岸一帯に限られることとなる。さらに安政６(1859)年の「蝦夷地六藩分知」により蝦夷地産物が松前藩を通さず直接本州へ流通する「直艙」がさかんになった。松前藩領内では、この状況に強い危機感が抱かれ、松前藩士や松前藩領西在の住民による幕府や箱館奉行所、東北諸大名への嘆願へと発展した（『松前町史』通説編第一巻下 p1160～1187）。

松前藩は、松前藩領内における開墾事業に着手したと考えられ、万延元年(1860)には、「江差在々並厚沢部・館・宇津良」では「相応之田地相成」、「東在知内村曠野之義も御取ひらき被成候旨被仰出」(江差周辺並びに厚沢部・館・鶉では相応の田地と相成り、東在の知内村の広野でもお取り開きになられる旨、仰せられた）（『御触書扣書』松前町史編集室1974）とあるように、安政年間以降、厚沢部川流域において農業開発が行われていたことがうかがえる。館村には、安政年間頃に「開墾役所」設置されたともいわれている（『櫻鳥－厚沢部町の歩み－』２巻 p54）。

『工藤丹下長善履歴書』（永田1966）によると、文久３(1863)年に御名代下国弾正、町奉行山下雄城などにつきしたがい、「館曠野」を検分した際に内密の話として聞かされたことには、「千間（ママ）麓ヨリ館村曠野ニ至ルノ間道開鑿」の目的は、「非常外国軍艦ト砲台ト戦端ヲ開ク場合ニハ、福山ハ海岸ニシテ要害ヨロシカラス」であることから、「館曠野」に建設予定の「営柵」へ、「山手通密行」するためであるという。館城築城以前に、館地域が緊急の際の避難場所として検討されていたことがうかがえる。館城築城直前の慶応４(1868)年４月に、「当所の義は非常の節、老幼の者共、為立退候険要の場所近間に無之候間、手廻り候もの共組合、館村開墾御役所最寄りへ、立退の場所補致し、米穀、塩、味噌等も取運置候様可致候。就ては願出次第地所相渡可申候。」との触れ出しが町年寄から出されたという（『桜鳥

－厚沢部町の歩み』２巻 p53)。松前で出された触書とみられ、戊辰戦争の勃発により城下が戦乱に巻き込まれることを想定し、城下住民に対して、手近な者と組んで館村開墾役所付近に立ち退き場所を定め、そこに米穀や塩、味噌などを搬入しておくように指示し、立ち退き場所は出願次第引き渡すとしている。この触れ出しにより、どの程度、城下住民の避難準備が行われたのかは明らかではないが、館城築城の５ヶ月前に、非常時の避難先として館地域が指定されていたことは、松前藩首脳部の館地域に関する認識を知る上で興味深い。

図２　厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡（国土地理院発行数値地図200000（地図画像）6240、6340を合成して加筆）

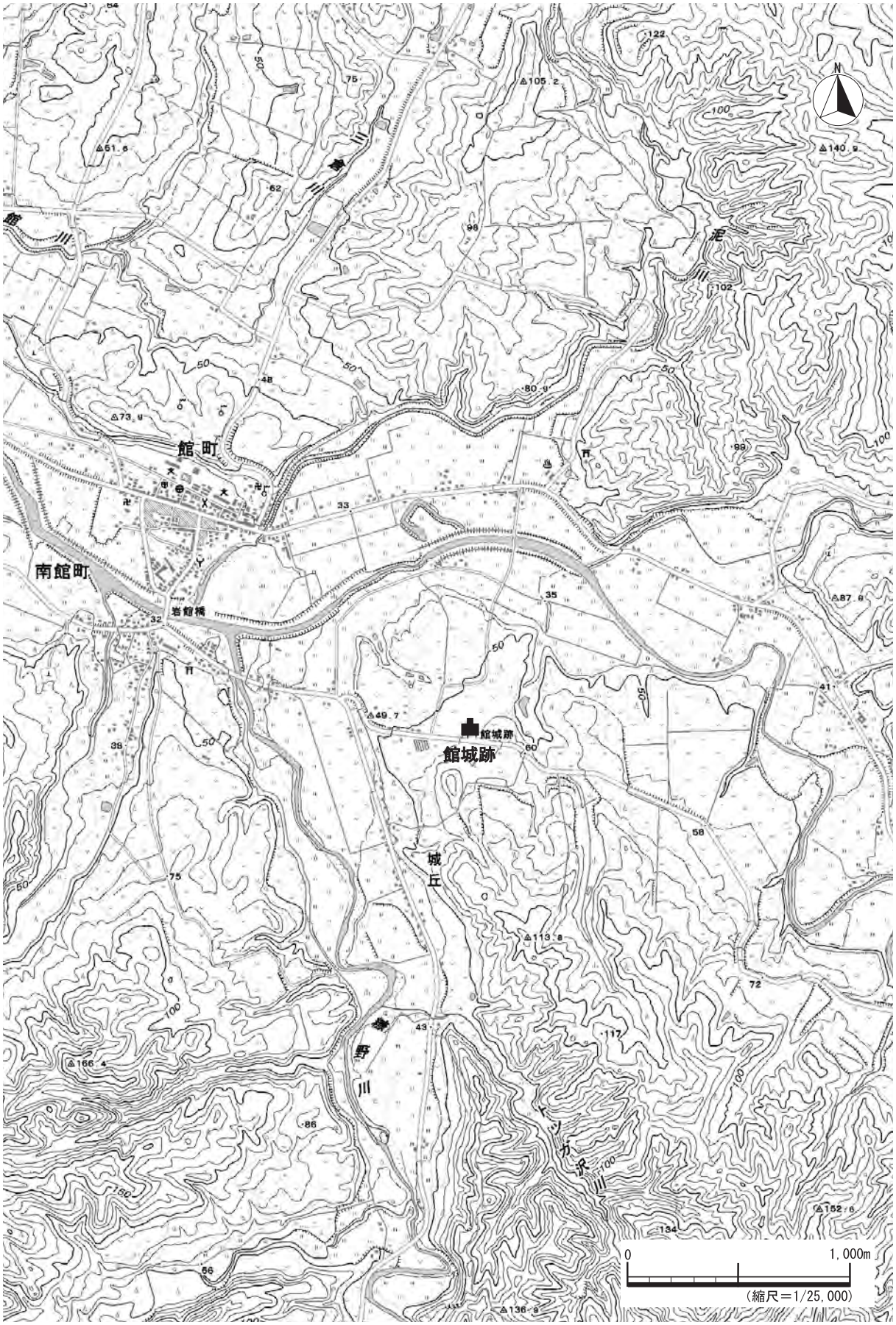


図３　館城跡の位置と周辺の地形（国土地理院発行数値地図25000（地図画像）624062に加筆）

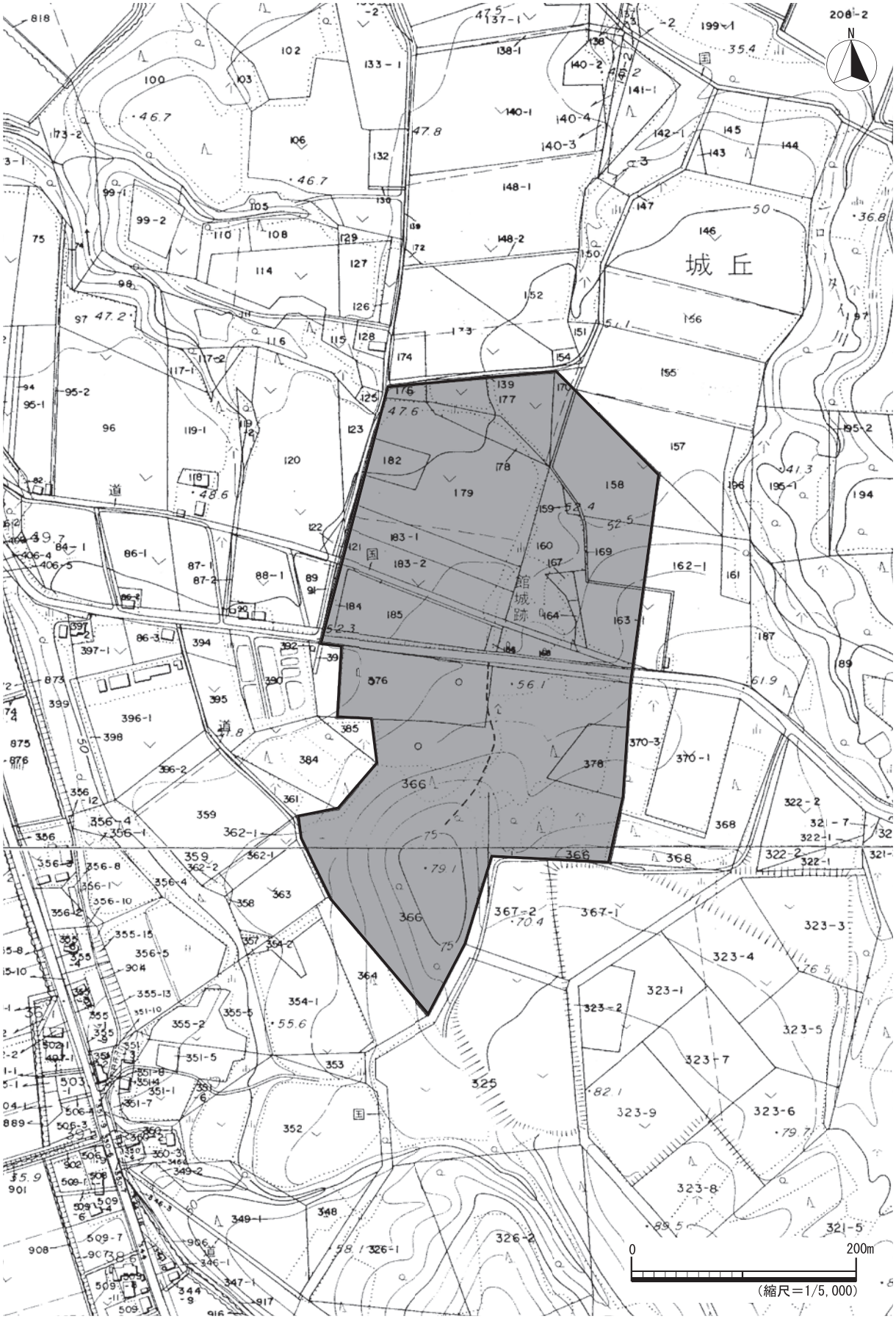


図４　指定地周辺の地形と指定範囲

Ⅲ章　調査の方法

1. 発掘調査基線（図５）

館城跡の発掘調査基線は、平成17年度調査以来、1988年～1990年の発掘調査グリッドを踏襲することとしている。このグリッドは、平成14年の測量法改正以前の旧日本測地系（平面直角座標系ＸＩ系）に沿って設定された20m 方眼を基本とし、南から北へ向かってＡ、Ｂ、Ｃ、・・・、東から西へ向かって０、１、２・・・としている。なお、Ａラインより南側については、北から南へ向かって、Ｚ０、Ｙ０、Ｘ０・・・と表記する。

この方眼は、直交するラインの交点から北西の20m 平方を、その交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称し（例：B-2）、さらに10m 方眼の小グリッドに分割した。小グリッドは、グリッドの基点となる交点（杭の打設位置）から反時計まわりにａ、b、c、ｄとした（例：B-2-c）。

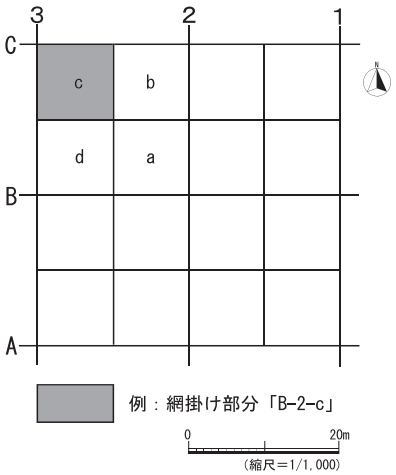


図５　グリッドの呼称方法

今年度の発掘調査では、光波式トランシットを使用して現地測量を実施したことから、現地に包含を示す杭は打設せず、それぞれの調査区の基線杭にトランシットを設置するか、基線杭から任意の位置に設置した基準杭にトランシットを設置して測量を行った。

各調査区で使用した基線杭は、平成17年に(有)安藤測量設計事務所に委託し、指定地内町有地及び指定地周辺の町道におよそ50m 間隔で設置した基線杭を基準に格調査区域へ打設した基準点のうち、下表の基準点を使用した。各調査区へ打設したグリッド杭の基準点は下表のとおりである。

表３　平成 22 年度館城跡発掘調査基準杭と座標（世界測地系平面直角座標ＸＩ系）

調査区名	基線杭名称	X 座標	Y 座標	標高
第1調査区	H-5-c	-235493.584	7756.681	52.743
	K-5-d	-235443.584	7756.680	52.194
第2調査区	13 ライン 1	-235357.380	7606.677	49.146
	K ライン	-235443.582	7583.438	50.397

２．調査の方法

（１）掘削

第１調査区はすべて人力により表土掘削を行った。第１調査区の表土掘削及び沢状地形の掘削にはスコップ・ジョレンを用い、遺物密度の高い場所では、部分的に移植ごて等を使用した。沢状地形においても、近代の埋戻し土のみを掘削の対象とした。

第２調査区は町道敷地に調査区を設定したことから、町道撤去及び復旧を請負工事により実施した。

町道撤去工完了後、残土約10㎝をスコップ・ジョレンで除去した。残土除去には部分的にツルハシを使用した。

２－１調査区では、湧水のため調査区全体で遺構面を検出できず、調査区南壁に幅1.5mのサブトレンチを設定し、遺構確認を行った。

堀・柵列は調査区壁１ｍの長さのみ完掘し、断面観察等を行った。

（２）現地測量

全ての現地測量を、光波式トランシットを用いて行った。光波式トランシットは、TOPCON CS-102、データコレクタは TOPCON FC-7 を使用した。取得データは、CAD をベースとした遺跡管理システム上で管理・図面作成を行い、DXF 形式で出力し、ai 形式（Adobe Illastrator 形式）に変換し入稿用図面の編集を行った。

（３）写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Mamiya RB67 PROFESSIONAL SD（中判フィルムカメラ）＋ Mamiya KL65mmF4L と Mamiya KL127mmF3.5L 及び Nikon D70S（デジタル一眼レフカメラ）＋ Nikkor AiAF20mmF2.8D ＋ Nikkor AiAF50mmF1.4D で、中判カメラでは、120サイズのリバーサルフィルム（フジクローム　プロビア100F（RDP Ⅲ120））を使用した。デジタルカメラは、2240×1488ピクセルの JPEG 形式で撮影・保存した。

遺物撮影も同様のシステムを使用し、中判カメラではリバーサルフィルム（フジクローム T64（RTP 120））を使用した。第２調査区の遺物撮影時には、フジクローム　T64が製造中止となっていたため、フジクローム　プロビア100F を使用した。

写真記録は、原則として、中判カメラ、デジタルカメラともに同一カットを撮影し、デジタルカメラでは、この他に、調査状況写真や途中経過写真等を撮影し、調査記録の一助として活用した。

（４）１次整理

出土遺物は、調査終了後に水洗し、分類、一覧表作成、注記等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名（TJ10）、層位、取上げ No. の順に、白色のポスターカラーで記入し、その上にラッカーを塗布して保護した。

（５）２次整理

光波式トランシットで作成した現地測量図面及び出土遺物の位置情報は、遺跡管理システムで管理した。遺跡管理システム上のデータには修正等は一切加えず、ai 形式（Adobe Illastrator 形式）に変換後、必要な訂正や変更を加え、報告書用印刷用図版とした。

遺物実測は、染付類38点を外部委託した。外部委託した実測遺物は、Adobe Illastrator（CS4）互換の ai 形式で納品を受け、ほかに、図化用に使用した写真のjpeg画像、断面手書き実測素図を成果品として納品を受けた。外部委託以外の遺物は、手書き実測し、素図をスキャナーで読み込み Adobe Illastrator (CS4) でトレースした。

写真記録のうち、リバーサルフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、撮影時の記録（日付、撮影方向、撮影対象）をシールに記入し、ネガシートの上からそれぞれのフィルムに貼付けした。デジタルカメラ撮影分は、リバーサルフィルムと同一カット及び重要なものについてＬ判（12.5㎝×8.7㎝）に出力し、アルバムに収納した。オリジナルデータは、DVD-R に保存した。

（６）保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、出土グリッドなどの基準で分別して収納し、さらに、厚沢部町郷土資料館収蔵品として、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。

原図・素図等の図面類、写真記録は厚沢部町教育委員会で保管する。

３．基本層序（図６）

基本層序の分類は、『館城趾　遺構確認調査報告書』（厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所1989年）のそれ（以下旧層序）を踏襲した。なお、基本層序の土色、土性は、平成17年調査の南側盛土西部（第１調査区）における断面観察の結果を基準としている（厚沢部町教育委員会2007－図８参照）。

遺物包含層はⅠ層及びⅡ層で、Ⅲ層以下は腐植土の発達しない旧石器時代以前の堆積層の可能性が高い。

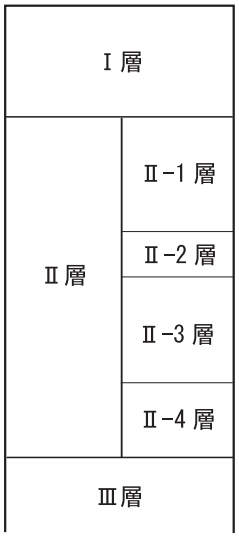


図６　基本層序模式図

Ⅰ層：表土・耕作土　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅

草の根の混じる地表面下約10cm の自然堆積層及び耕作土を総称した。旧層序Ⅰ層に相当。

Ⅱ－１層：黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅

旧層序Ⅱ層に相当。

Ⅱ－２層：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂壌土　粘性弱　堅密度軟

降下火山灰と考えられる砂質の堆積層である。遺跡周辺では、平坦地で約５㎝の層厚が一般的のようである。旧層序Ⅲ層に相当。

Ⅱ－３層：黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅

土性はⅡ－１層に似る。黄色味を帯びるのはⅡ－２層の影響と推測する。旧層序Ⅳ層に相当。

Ⅱ－４層：黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅

土性、土色ともにⅡ－１層によく似るが、土質の粒状性がやや緻密で、土色はやや明るいように感じる。旧層序Ⅴ層に相当。

Ⅲ層：褐色（10YR4/6）埴壌土　粘性中　堅密度堅　旧層序Ⅶ層に相当

Ⅳ章　遺構と出土遺物

1. 第１調査区（図７～21、写真１～16）

（１）調査の概要

平成20年度、21年度調査区で検出された堀・柵列の西側延長を検出することを目的として、平成21年度第３調査区西側に1－1～1－3調査区を、平成21年度2－2調査区西側に1－4～1－6調査区を、史跡西側境界付近に1－7調査区を設置した。

いずれの調査区からも堀・柵列は検出できなかった。

1－1～1－3調査区西側を流れる用水路は、現況で幅約３ｍとなっているが、自然の沢状地形を埋め立てて利用しているもので、かつては、幅約７～８ｍの沢状地形であったことを確認した。また、1－6調査区では、昭和39年作成の地形測量図に描かれた沢状地形を検出した。

遺物は沢状地形から多く出土し、1－2調査区、1－3調査区、1－6調査区などで特に高密度で出土した。南東にいくにしたがい、密度が高まる傾向にある。

（２）調査の手順

平成21年度第３調査区と用水路を挟んで隣接する西側に幅５ｍ、延長約20ｍの調査区を３箇所設置した（1－1～1－3調査区）。調査区に並行して沢状地形が検出され、当初設定した幅５ｍの範囲はほぼ沢状地形の範囲と重なったことから、調査区を西側に５ｍ拡張した。

1－1～1－3調査区で堀・柵列を検出できなかったことから、堀・柵列がより北側に位置する可能性を想定し、平成21年度2－2調査区西側約20ｍのところに幅５ｍ、延長約20ｍの調査区を２箇所設置した（1－4～1－5調査区）。1－4調査区北側で沢状地形が検出されたが、堀・柵列は確認できなかった。

昭和39年に作成された地形測量図では、史跡北側を南東－北西方向に沢状地形が描かれており、この沢状地形が外郭線の一部を形成する可能性を想定し、幅５ｍ、延長約40ｍの調査区を設定した（1－6調査区）。

字城丘179－1・182－1と179－2・182－2地番境界に堀・柵列が所在した可能性を検証するため、史跡西端に10ｍ四方の調査区を設定した（1－7調査区）。

（３）１－１調査区（図８～９、写真２、５）

北側へ約２％の下り勾配となる。旧耕作土の耕作深度は約40㎝で、耕作土をスコップ・ジョレン除去した後、遺構検出を行った。調査区東側では、調査区に並行して、南北方向に沢状地形が延びる。湧水の恐れがあるため、沢状地形については、検出面から約20㎝の掘削にとどめ、平面形状及び遺物出土状況の確認を行った。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

土層：図９Ａ－Ａ′土層１は黄褐色ローム粒を少量含む。土層２～26褐色土粒、黄褐色粘土粒、黄褐色ローム粒を多く含む。

遺物：沢状地形の低湿地部分を中心に遺物が出土している。2－2・2－3調査区に比較して密度は低い。

考察：図９Ａ－Ａ′土層１は旧耕作土である。土層２～26は混入物を多く含みむことから、沢状地形を埋め戻した際の人為堆積層である。

（４）１－２調査区（図10～12、写真３、６）

北西へ約３％の下り勾配となる。旧耕作土の耕作深度は約40㎝で、耕作土をスコップ・ジョレン除去した後、遺構検出を行った。調査区東側では、調査区に並行して、南北方向に沢状地形が延びる。湧水の恐れがあるため、沢状地形については、検出面から約20㎝の掘削にとどめ、平面形状及び遺物出土状

況の確認を行った。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

土層：図11A － A′土層１～３は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土である。土層４～６は褐色ローム粒を少量含む。土層７は混入物の少ない黒褐色土である。図12B － B′土層１～２は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土である。土層３～７は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色土である。土坑状の断面で、壁は垂直に立ち上がる。土層８～33は黄褐色、褐色ローム粒など混入物が多い。土層34は混入物の少ない黒褐色土である。

遺物：沢状地形の低湿地部分を中心に遺物が出土している。2－2・2－3調査区に比較して密度は低い。

考察：図11A － A′土層１～３、図12B － B′土層１～２は黄褐色ローム粒を含むこと、西側の旧耕作地に広く広がることから、旧耕作土である。図11A － A′土層４～６、図12B － B′土層８～33は黄褐色、褐色、明黄褐色ローム粒などの混入物が多いことから、沢状地形を埋め戻した際の人為堆積層である。図11A － A′土層７、図12B － B′土層34は混入物が少なく、最下層にあたることから、沢状地形に流入した土砂による自然堆積である。沢状地形出土遺物は図12B － B′土層８～33中のほぼ全層位にわたっている。沢状地形を近代に埋め戻した際にこれらの陶磁器が混入したものと考えられ、原位置は保たれていないと推測する。

（５）１－３調査区（図13～15、写真４、7，8）

北西へ約４％の下り勾配となる。旧耕作土の耕作深度は約40㎝で、耕作土をスコップ・ジョレン除去した後、遺構検出を行った。調査区東側では、調査区に並行して、南北方向に沢状地形が延びる。湧水の恐れがあるため、沢状地形については、検出面から約20㎝の掘削にとどめ、平面形状及び遺物出土状況の確認を行った。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

土層：図14A－A′土層１～４は草根、炭化物粒、黄褐色ローム粒を含む黒褐色土である。土層５～７は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、暗褐色土である。土層８は混入物の少ない黒色土である。図15B － B′土層１～７は黄褐色ローム粒、炭化物粒を含む黒褐色土主体である。土層８～21は黄褐色ローム粒、褐色ローム粒などの混入物を多く含む。土層22は褐色ローム粒を少量含む。

遺物：沢状地形の低湿地部分を中心に遺物が出土している。平成22年度調査区全体を通して最も高密度で遺物が出土した。

考察：図14A － A′土層１～４、図15B － B′土層１～７は黄褐色ローム粒をはじめとした混入物を含むこと、西側の旧耕作地に広く広がることから、旧耕作土である。図14A － A′土層５～７、図15B － B′土層８～21は黄褐色、褐色、明黄褐色ローム粒などの混入物が多いことから、沢状地形を埋め戻した際の人為堆積層である。図14A － A′土層８、図15B － B′土層22は混入物が少ないことから、沢状地形の自然堆積層の可能性が高い。沢状地形出土遺物は図15B － B′土層８～21層中のほぼ全層位にわたっている。１－２調査区同様、沢状地形を近代に埋め戻した際にこれらの遺物が混入したものと考えられ、原位置は保たれていないと推測する。

（６）１－４調査区（図16、写真９、10）

北側は東西方向に用水路が走る。北へ2.7％の下り勾配となる。調査区北端から４ｍ南側までは埋め戻された沢状地形が広がる。旧耕作土の耕作深度は約30㎝で、耕作土をスコップ・ジョレン除去した後、遺構検出を行った。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

遺物：２点出土した。1－1～1－3調査区、1－6調査区と比較して明らかに遺物の密度が低い。

（７）１－５調査区（図17、写真11）

北へ２％の下り勾配となる。旧耕作土の耕作深度は約30㎝で、耕作土をスコップ・ジョレン除去した後、遺構検出を行った。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

遺物：１－４調査区同様、遺物の密度は低い。

（８）１－６調査区（図18～19、写真12～15）

北へ2.2％の下り勾配となる。旧耕作土の耕作深度は約40㎝で、耕作土をスコップ・ジョレンで除去した後、遺構検出を行った。調査区中央から北側では、南東～北西方向に延びる沢状地形を検出した。湧水の恐れがあるため、沢状地形については、検出面から約20㎝の掘削にとどめ、平面形状及び遺物出土状況の確認を行った。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

土層：図19A－A′土層１は黄褐色粘土粒を多く含む黒褐色土である。土層２は粘性の強い黒色土、土層３～５は黄褐色ローム粒を含む黒色～黒褐色土である。土層６は黒色土、土層７はにぶい黄褐色土である。

遺物：沢状地形南端で集中的に遺物が出土した。特に図18の32、33、図７の35、36のような中～大型の皿・鉢類が多く出土している。

考察：図19A－A′土層１は旧耕作土である。土層２は耕作にともなう溝状の掘込み。土層３～５は状地形を埋め戻した際の人為堆積層である。ビニール紐などが出土していることから、埋め戻された時期は、戦後と推測する。昭和39年作成の地形測量図では、本調査区で検出された沢状地形が描かれていること、昭和51年国土地理院撮影航空写真では確認できないことから、昭和39年から昭和51年の間に農地造成にともなって埋め戻されたと考えられる。土層６は基本層序Ⅱ－１層相当の自然堆積層である。花粉分析資料No.2を採取した。土層７は基本層序Ⅲ層相当の自然堆積層である。出土遺物は、集中的に出土すること、ビニール紐やガラス製品などをともなって出土することから、近代に沢状地形を埋め戻した際に、周辺に散布していた陶磁器類を一括して投棄したものと判断する。32と33のような中型の皿、36のような大型の皿については、図柄が非常に似通った個体が多く、ひと揃いの食器として館城に搬入されたものである可能性が高い。

（９）１－７調査区（図20～21、写真16）

字城丘179－1・182－1と179－2・182－2地番境界に沿って東西に延びる排水溝を中心に10ｍ四方の調査区を設定した。旧耕作土の耕作深度は30～40㎝で、耕作土をスコップ・ジョレンで除去した後、遺構検出を行った。堀・柵列をはじめ、遺構は検出できなかった。

土層：図21土層１～２はローム、粘土粒を含む黒褐色土である。

遺物：少量出土している。

2. 第２調査区（図22～28、写真17～24）

（１）調査の概要

平成18年度調査区と平成21年度調査区に挟まれた町道上館城ノ岱線道路敷地におよそ10ｍ四方の調査区を３箇所設定した。

平成18年度調査区では、西側へ屈曲した堀・柵列が史跡指定地西側へ延びていることを確認しており、この延長を検出するため、平成21年度には町道西側、指定地外の農地に幅10ｍの調査区を設定して堀・柵列の検出作業を行った。平成21年度調査区では堀・柵列が検出できなかったことから、堀・柵列は町道上館城ノ岱線道路敷地内で屈曲し、道路と並行している可能性が高まったことから、平成18年度調査区隣接地域を南端として、30～40ｍ間隔で３箇所の調査区を設定した。

最南端の2－3調査区で堀が90°屈曲し北へ延びることを確認した。堀の方位はほぼ真北方向で、道路に対しては約14°西偏する。

2－2調査区では堀が検出できず、柵列堀方と考えられる溝を検出した。

2－1調査区では、堀・柵列ともに検出できなかった。

（２）調査の手順

町道上館城ノ岱線の道路舗装及び路盤材をバックホウにて撤去後、残土除去、遺構検出を行った。

2－1調査区では遺構面が予定深度より深く、湧水の恐れがあったため、調査区全面での遺構検出は行わず、南壁のみ幅1.5mのサブトレンチを設定し、遺構面まで掘削し、遺構検出を行った。

2－2調査区北半は重機オペレーターとの連絡がうまくいかず、約20m掘りすぎている。柵列堀方と考えられる溝は北端の１ｍを完掘し、断面及び坑底面の形状を確認した。

2－3調査区で検出された堀は、北端の１ｍを完掘し、断面及び形状の確認を行った。また、路床排水溝が堀を切って掘り込まれていたことから、溝の壁面を利用して土層堆積状況の確認を行った。

（３）２－１調査区（図23～24、写真17、18）

北西へ3.6％の下り勾配となる。北西側は「与惣吉沢」へとつながる低湿地となっている。遺構面は全面で検出しておらず、調査区南側1.5m 幅のサブトレンチで遺構面の検出と遺構確認を行った。

遺構面の残存状況は良好で、基本層序Ⅱ－１層以下の自然堆積層が残存する。堀・柵列は検出できなかった。

土層：図24A －A′土層１は堅くしまった礫層、土層２はオリーブ黒色の粘質土である。土層４は堅くしまった砂質土、土層５は明黄褐色ローム粒を多く含む黒褐色土である。土層７～11は自然堆積層で、土層９は火山灰層である。

考察：図24A －A′土層１は舗装直下の砂利層、土層２は路盤材である。土層３は暗渠排水堀方埋土、土層４～５は礫を含み非常に堅くしまっていることから、舗装化以前の道路路盤と推測する。土層６は土坑状の掘込みと考えられる。土層７～11は基本層序Ⅱ－１～４に相当する自然堆積層である。基本層序Ⅱ－３は火山灰である。過年度調査では、B-tm、Ta-c2 が検出されている。

（４）２－２調査区（図25～26、写真19～21）

遺構検出面は、北へ5.4％の下り勾配となる。ただし、北半部を掘りすぎているため、実際の勾配は４.5％程度である。

調査区内では、旧道側溝、路床排水、柵列堀方と考えられる溝を検出した。柵列堀方と考えられる溝は、旧道側溝と路床排水に切られる。

柵列：検出面での幅は20㎝、坑底はほぼ平らで、堀具の痕跡が確認できる。柱痕は検出できない。

土層：図26A －A′土層１は堅くしまった礫層。土層２は明黄褐色ロームをブロック状に含む褐色土、土層３は黄褐色ロームをブロック状に含む黒褐色土、土層４は軟質の黒褐色土である。土層５～９は黄褐色土と黒褐色土が混在しているが、いずれも混入物が多い。土層10は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、土層11は堅くしまった黒色土である。土層12は黄褐色ローム粒を含む黒褐色土である。土層13～14は混入物が少ない。

考察：図26A －A′土層１は舗装直下の砂利層。土層２は旧耕作土、土層３は路肩の崩落土、土層４は現況道路側溝の堀方、土層５～９は旧道側溝、土層10～11は旧道の路盤材の可能性がある。土層12は柵列堀方と考えられる溝の埋土である。土層13は基本層序Ⅱ－３層、土層14は基本層序Ⅲ層に相当する自然堆積層である。柵列堀方と考えられる溝では柱痕が検出できなかったことから、現時点では柵列と断定することができないが、暗渠の可能性がないこと、人力で掘削された堀具の痕跡が確認できることから、館城跡にともなう柵列の可能性が高い。

（５）２－３調査区（図27～28、写真22～24）

北へ1.8％の下り勾配となる。平成18年度調査区に隣接する。平成21年度調査では、本調査区東端に

沿ってサブトレンチを設定しており（平成21年度第１調査区サブトレンチ１）、道路法面断面において、堀を確認していた。堀は、調査区東端から約２ｍ西でほぼ90°方位を変え、北へ延びる。調査区北端から長さ１ｍのみ完掘し、形状及び断面観察を行った。

土層：図28A－A′土層１は軟質の黒褐色土、土層２はきわめて堅くしまった礫層である。土層３～４は粘性が強く堅くしまった褐色～黄褐色土である。土層５～８は混入物の多い黒褐色土である。土層９は黒褐色土、土層10は堅くしまった黒色土である。土層11～15は黄褐色ローム粒を多く含む黒褐色土、土層16～17は混入物の少ない黒褐色～暗褐色土である。土層18～19は混入物の少ない黒色土と褐色土である。図28B－B′土層１は鉄錆を含む黒褐色土、土層２は黒褐色土、土層３は混入物の少ない自然堆積層である。

堀　：坑底は平らで壁は開き気味に立ち上がる。検出面から坑底までの深さは約60㎝である。

考察：図28A－A‘土層１は路肩の表土、土層２は歩道直下の礫層である。土層３～４は東側旧農地への取り付け道路路盤材である。土層５～８は旧道側溝の埋土、土層９は旧耕作土、土層10は堅くしまっており、旧道の路盤材の可能性が高い。土層11～17は堀の埋土で、土層11～15は埋め戻しによる人為堆積、土層16～17は自然堆積である。土層14で「DAINIPPON BREWERY Co.LTD」の陽刻のあるビール瓶が出土している。「大日本麦酒」銘柄は、明治39年（1906）から昭和24年（1949）まで製造販売されており、土層11～15の埋め戻しはこの間になされた可能性が高い。館城廃絶後、明治後半から昭和初期までは、館城の堀は埋め戻されず放置され、その間に土層16～17が堆積し、その後、農地造成などにともない埋め立てられたものと判断する。土層18は基本層序Ⅱ－４層相当の自然堆積層、土層19は基本層序Ⅲ層相当の自然堆積層である。

３．調査区出土遺物（図29～31、写真25～40）

１～41は磁器である。

１～８は碗蓋である。１は見込みに「成化年造」字が書かれる。２は外面に花文と窓、口縁部内面には檜垣文がめぐる。３、４は外面に草花文、見込み丸文の中に松竹梅が描かれる。５、６は外面草花文で口縁部内面に鋸歯状文がめぐる。７は外面草花文、口縁部内面に連続する山形文がめぐる。８は外面草花文を描き、口縁部内面には鋸歯状文がめぐる。見込みに圏線を引く。

９～31は碗で、24のみ丸碗で、残りは端反碗である。９～10は口径が８㎝前後の小ぶりの碗である。９は外面に源氏香文を描く。10は外面に竪杵をもつウサギの図柄が描かれる。11～21は口径が10㎝前後の中サイズの碗である。11は外面に花文と波を描き、口縁部内面には雷文がめぐる。12は外面花文で口縁部内面に雷文がめぐる。13は口縁部内面に円弧状の連続文がめぐる。14は外面に花文を描き、口縁部内面に檜垣文がめぐる。15は外面に草花文を描き、口縁部内面に雷文がめぐる。16、17は外面草花文を描き、内面に鋸歯状文がめぐる。18は外面草花文で、口縁部内面に圏線と雷文がめぐる。19、20は外面草花文で、口縁部内面に雷文がめぐる。21は外面に草花文を描き、口縁部内面に雷文がめぐる。22～23は口径が12㎝前後の大ぶりの碗である。22は外面に草花文、口縁部内面に鋸歯状文がめぐる。23は外面縦縞と唐草文、口縁部内面には連弧文がめぐる。24は丸碗で、外面微塵唐草文、口縁部内面に連続する菱形文がめぐる。25は外面花蔓草、高台内に落款風の文様。26は外面松葉と亀甲内に花弁、内面に圏線２条引き、圏線内に松竹梅文。27は外面草花文、見込みに丸文と松竹梅文。28は外面草花文、見込み圏線内に「大〇年製」字。29は無文の碗底部で焼接痕あり。30、31は無文の端反碗。

32～34は輪花皿で32、33は見込みに山水を描き、高台内は蛇目上に釉はぎ。34の見込みに描かれるのは花文であろうか。

35～37は角形の型押し皿。見込みに桜花を陽刻し、内面は沙綾形文。

38は丸鉢で、外面は丸窓を描き、窓内に七宝文、高台に櫛歯、内面と見込みは放射状に区画され、花弁と松葉、波、草花文が描かれる。

39は平面八角形となる角皿で、外面に花文、高台内に落款風の文様、内面と見込みに山水を描く。40は瓶で外面下位に２本の圏線を引きその間に棒状の連続文を描く。41は段重の中段で、外面区査問を描く。

42～48は関西系陶器である。

42は土瓶蓋、43は灯明皿の受け皿である。44は油注蓋である。45は鉄釉の肩付茶入である。46は土瓶である。47は瓶の口縁部で徳利であろう。48は瓦質の壺で、肩部に菊花文が押捺される。

49～51は陶器で、49、50はすり鉢、51は甕である。いずれも内外面ともに鉄釉が施される。

52は用途不明の鉛製品。53は銅製の刀装具で、柄縁金具である。表面の陽刻の図柄は不明。54は粘板岩製の硯である。

55、56はビール瓶で、55は「「DAINIPPON BREWERY」」の陽刻の一部が確認できる。56は「DAINIPPON BREWERY Co LTD」が陽刻される。

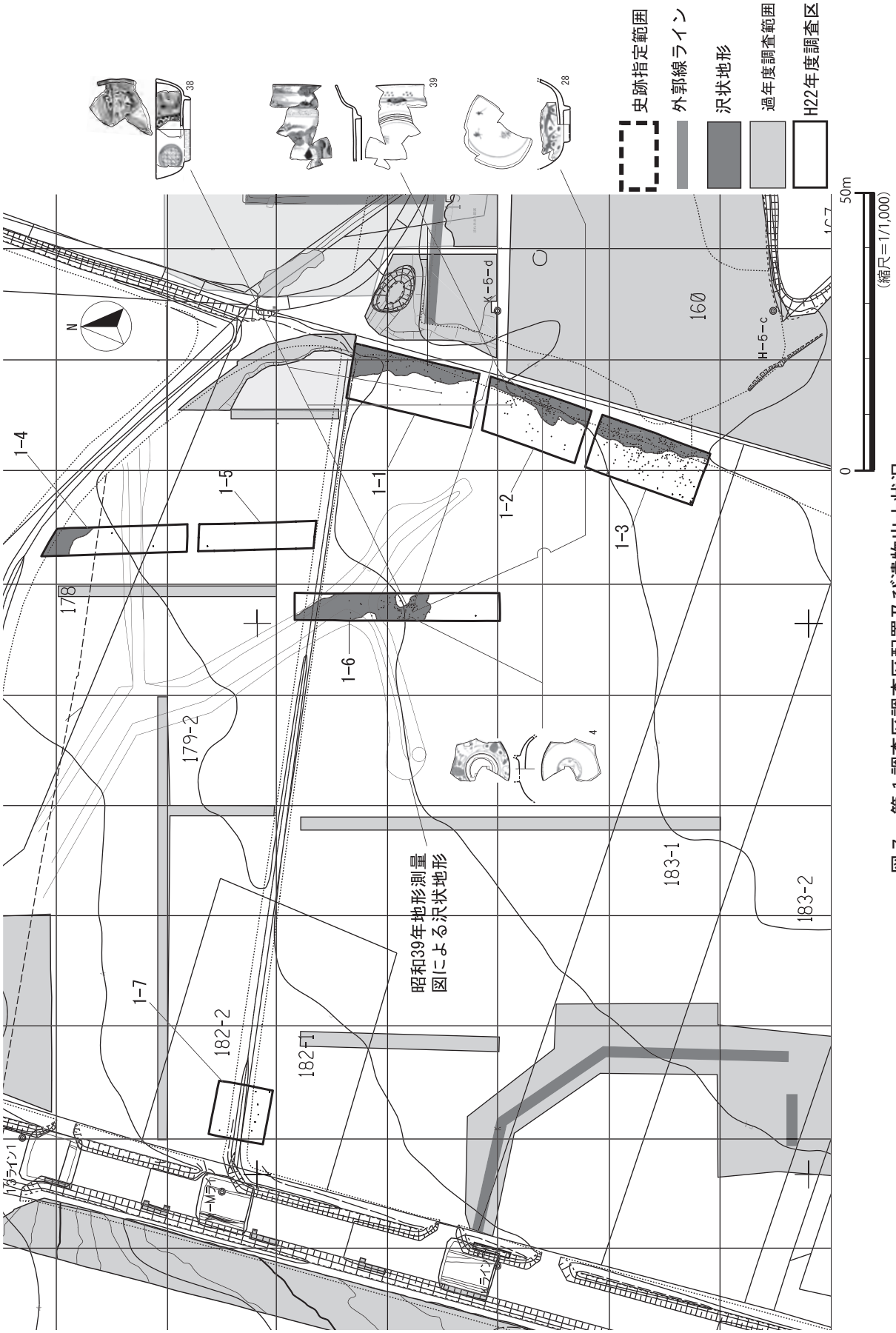


図７　第１調査区調査区配置及び遺物出土状況

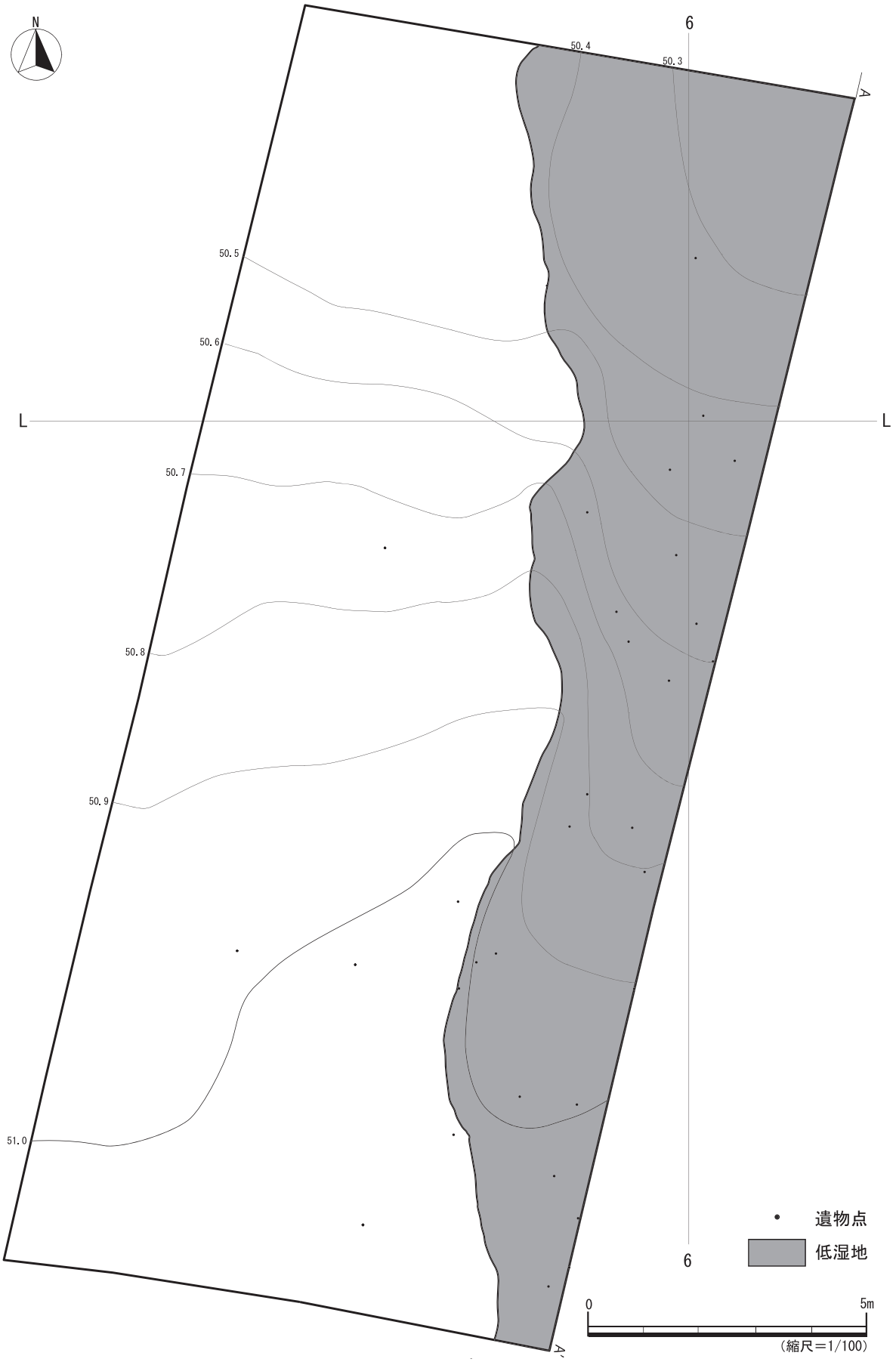
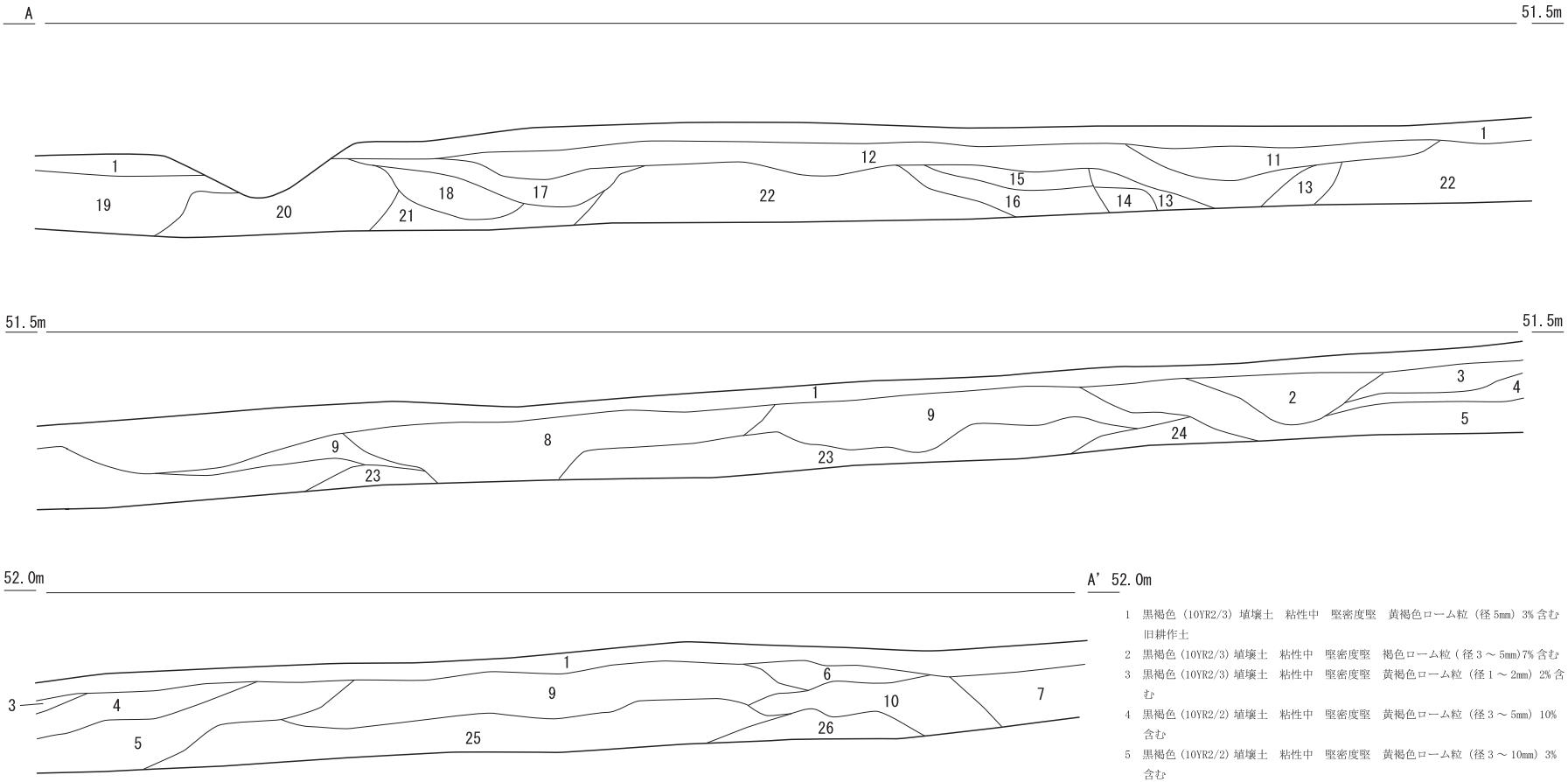


図８　１－１調査区平面図



1　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 5mm）3% 含む旧耕作土
2　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）7% 含む
3　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 1 ～ 2mm）2% 含む
4　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）10% 含む
5　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3 ～ 10mm）3% 含む
6　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色粘土粒（径 5mm）1% 含む
7　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色粘土粒（径 3mm）3% 含む
8　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　にぶい黄褐色土粒（径 2 ～ 5mm）7% 含む
9　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色土粒（径 10 ～ 15mm）15%、明褐色粘土粒（径 2mm）2% 含む
10　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色土粒（径 1mm）19% 含む
11　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色粘土粒（径 3 ～ 5mm）15% 含む
12　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 10 ～ 15mm）5% 含む
13　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　明黄褐色粘土粒（径 3 ～ 7mm）3% 含む
14　明黄褐色（10YR6/6）埴土　粘性強　堅密度すこぶる堅　黒褐色土を網目状 15% 含む
15　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色粘土粒ブロック状に 40% 含む
16　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 10 ～ 20mm）7% 含む
17　黒褐色（7.5YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）19% 含む
18　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性強　堅密度堅　暗褐色シルト質壌土ブロック状に 20% 含む
19　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 1mm）1% 含む
20　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色粘土粒（径 1 ～ 3mm）3%，黒色土粒（径 10mm）5% 含む
21　褐色（10YR4/4）壌土　粘性中　堅密度堅　黒褐色土粒（径 10 ～ 15mm）15% 含む
22　黒（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ロームをブロック状に 15% 黒色土をブロック状に 10% 含む
23　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　シルト質壌土をブロック状に 30% 含む
24　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 2mm）2% 含む
25　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 1 ～ 2mm）1% 含む
26　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅

0　2m
（縮尺＝1/40）

図９　１－１調査区東壁断面図

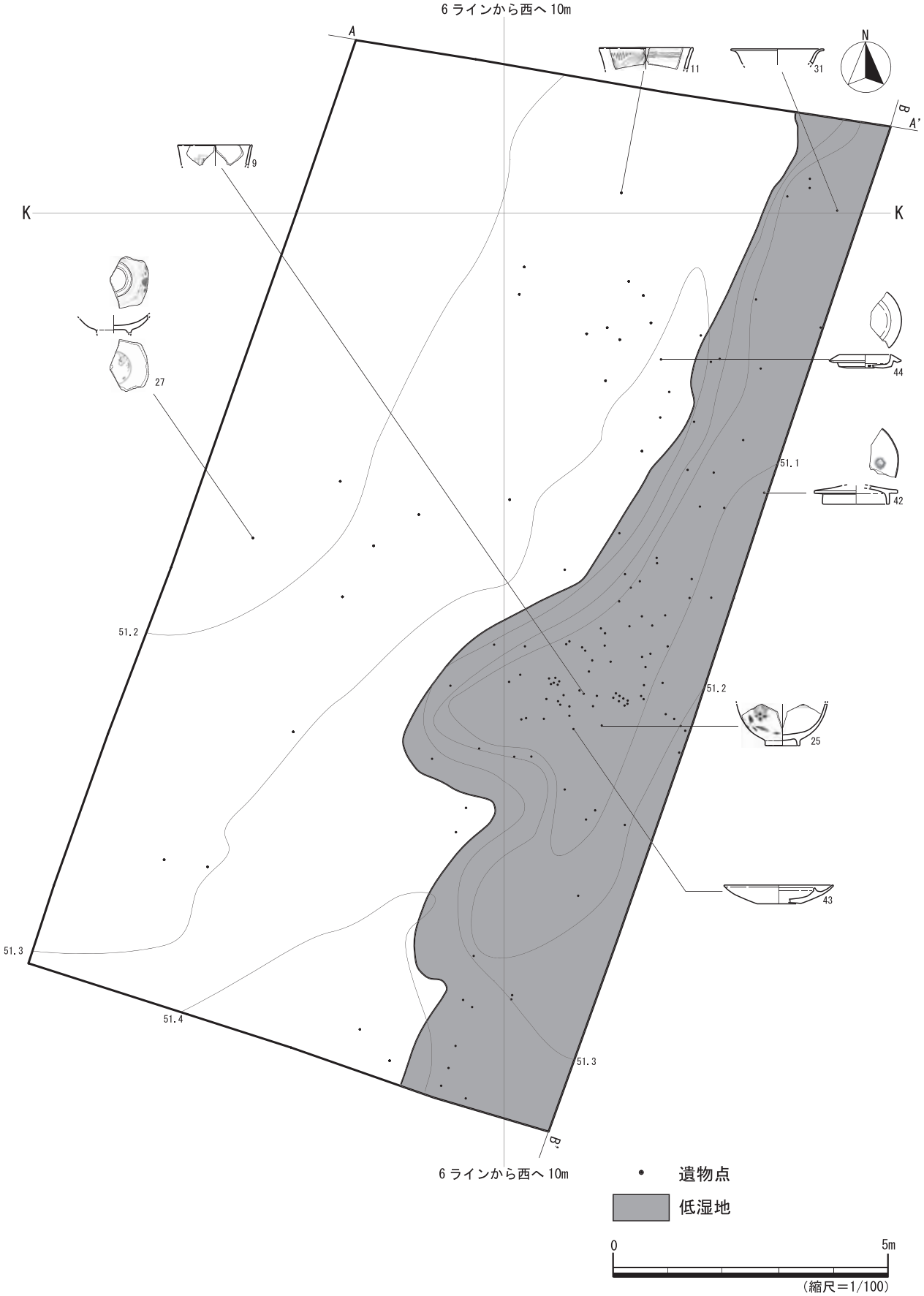
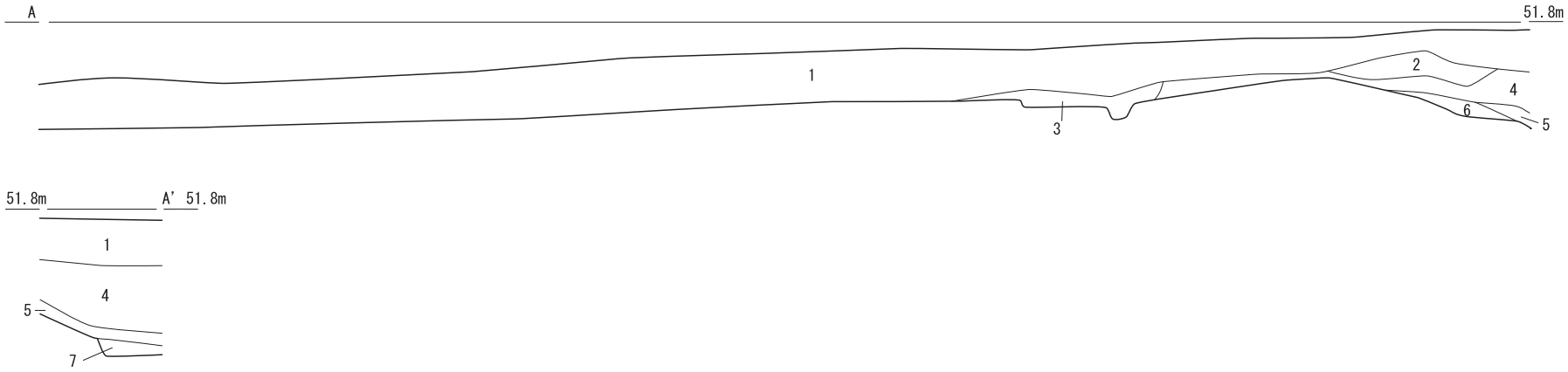
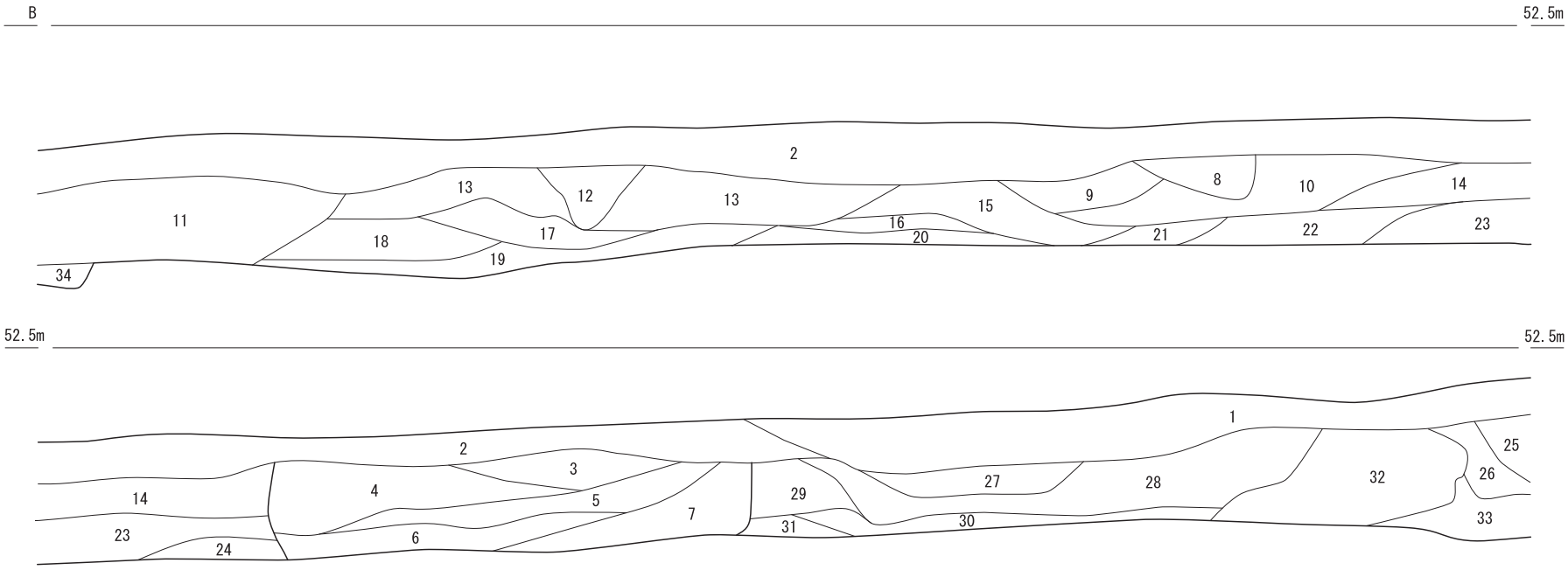


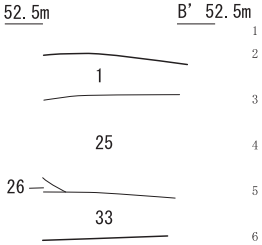
図10　1－2調査区平面図



1　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗褐色土ブロック状に 5% 含む
2　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　にぶい黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）7% 含む
3　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 2mm）10% 含む
4　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 5mm）1% 含む
5　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 2 ～ 3mm）1%含む
6　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色土粒（径 5mm）2%，炭化物 7% 含む
7　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅（花粉分析試料 No.1 採取）

図11　１－２調査区北壁断面図





1　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗褐色土ブロック状に 5% 含む
2　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色土粒（径 5 ～ 7mm）2% 含む
3　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3mm）1% 含む
4　黒褐色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 10mm）2% 含む
5　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）3% 含む
6　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　植物遺体を多く含む
7　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 1mm）1% 含む
8　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 5 ～ 15mm）3% 含む
9　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度軟　明黄褐色ローム粒（径 15 ～ 20mm）5% 含む
10　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）2% 含む
11　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 5mm）1% 含む
12　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 5 ～ 7mm）5% 含む
13　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 5 ～ 10mm）3% 含む
14　黒褐色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3mm）1% 含む
15　黒褐色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 7 ～ 10mm）3% 含む
16　黒褐色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）2% 含む
17　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 3mm）2% 含む
18　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅
19　黒褐色（10YR2/1）埴壌土　粘性強　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 1mm）1% 含む
20　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗褐色土をブロック状に 10% 含む
21　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 2mm）1% 含む
22　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 2 ～ 5mm）2% 含む
23　灰黄褐色（10YR4/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3mm）3% 含む
24　暗褐色（10YR3/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 2mm）10% 含む
25　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 7 ～ 10mm）5% 含む 26　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗褐色土粒（径 5mm）2% 含む
27　黒褐色（10YR2/2）　埴壌土　粘性中　堅密度軟　灰黄褐色土ブロック状に 20% 含む
28　黒褐色（10YR2/2）　埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 5 ～ 10mm）5% 含む
29　黒色（10YR2/1）　埴壌土　粘性中　堅密度軟　暗褐色土をブロック状に 30% 含む
30　黒褐色（10YR2/2）　埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗褐色土粒（径 5 ～ 10mm）7% 含む
31　黒褐色（10YR2/3）　埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3mm）3% 含む
32　暗褐色（10YR3/3）　埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ロームをブロック状に 10 パーセント含む
33　黒褐色（10YR2/2）　埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）3% 含む
34　黒褐色（10YR3/2）　埴壌土　粘性中　堅密度堅

0　2m
（縮尺＝1/40）

図12　１－２調査区東壁断面図

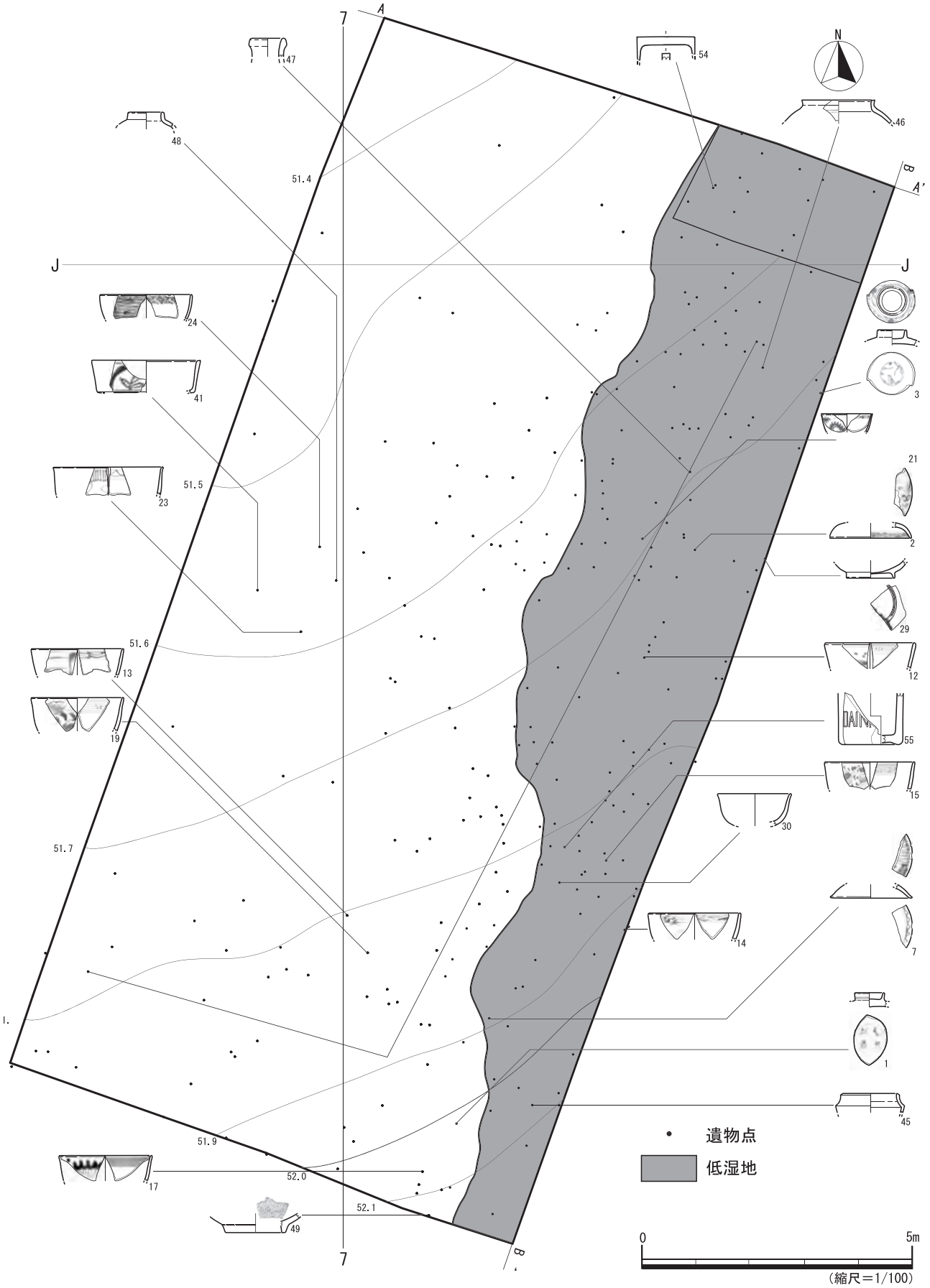
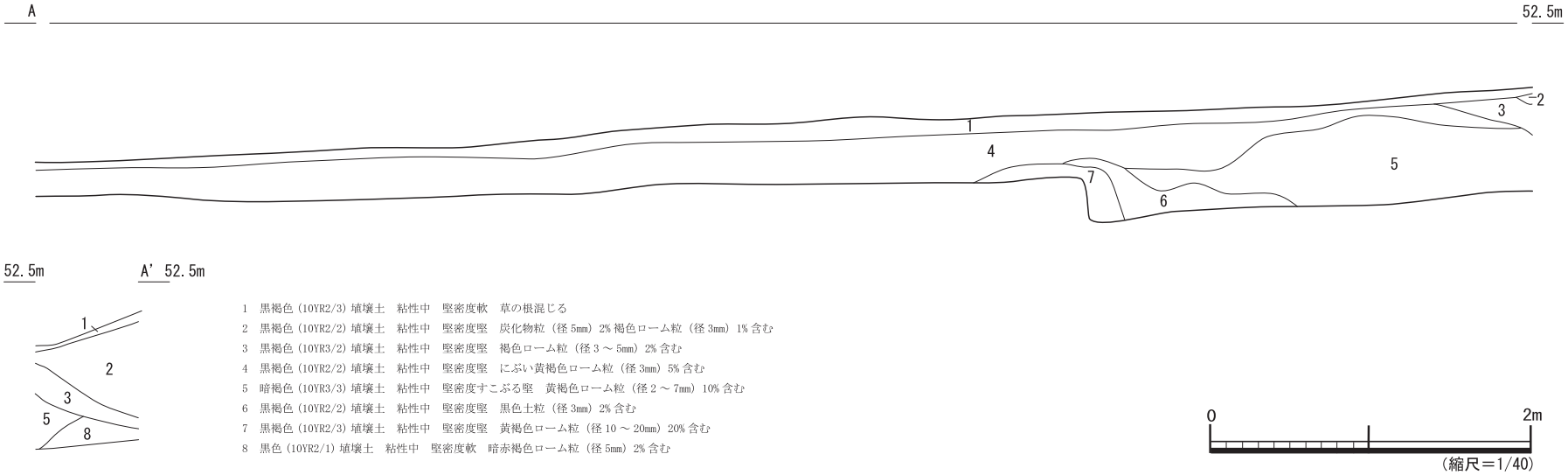
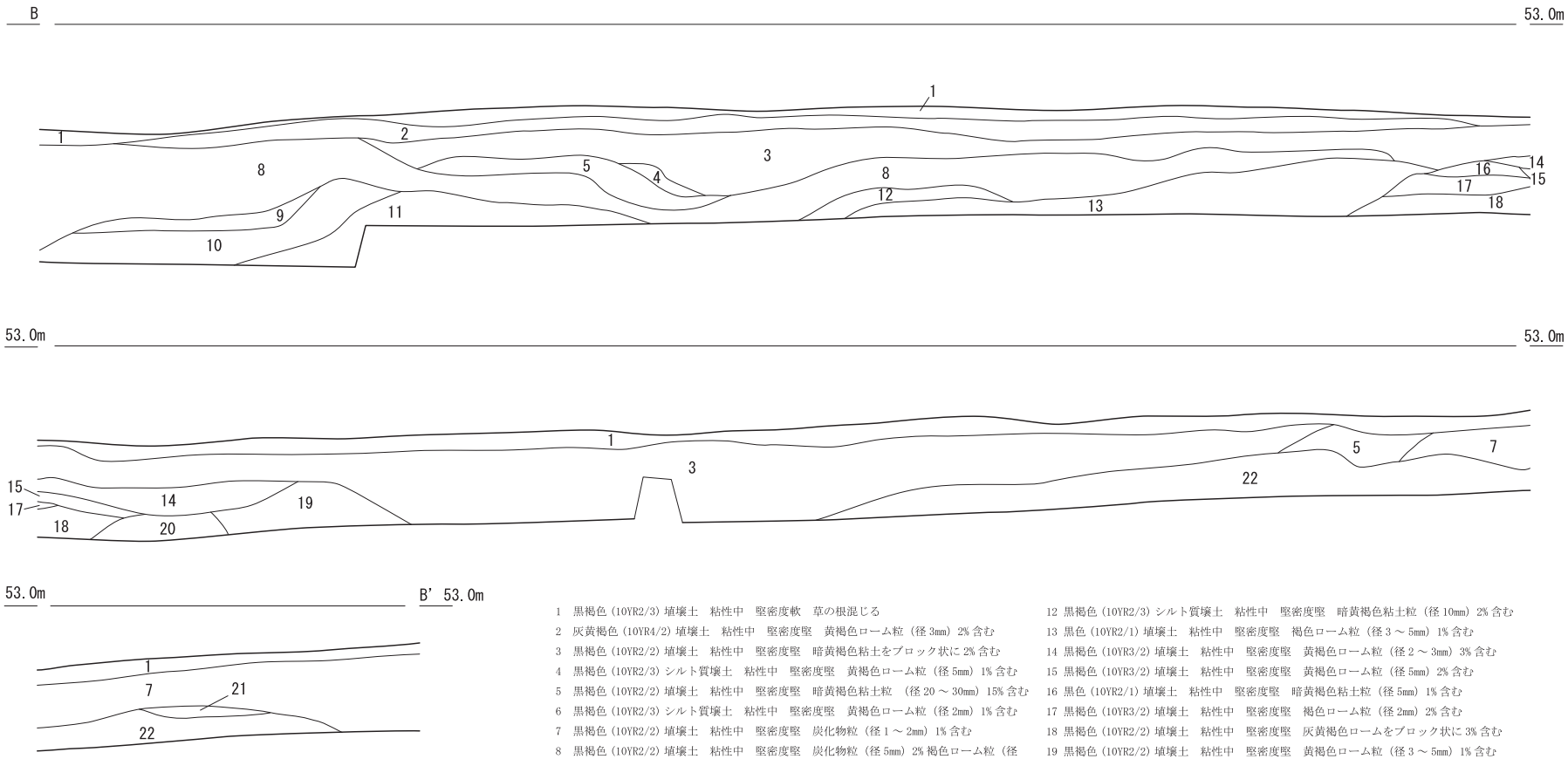


図13　１－３調査区平面図



1　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　草の根混じる
2　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　炭化物粒（径 5mm）2% 褐色ローム粒（径 3mm）1% 含む
3　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）2% 含む
4　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　にぶい黄褐色ローム粒（径 3mm）5% 含む
5　暗褐色（10YR3/3）埴壌土　粘性中　堅密度すこぶる堅　黄褐色ローム粒（径 2 ～ 7mm）10% 含む
6　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黒色土粒（径 3mm）2% 含む
7　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 10 ～ 20mm）20% 含む
8　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度軟　暗赤褐色ローム粒（径 5mm）2% 含む

図14　１－３調査区北壁断面図



1　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　草の根混じる
2　灰黄褐色（10YR4/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3mm）2% 含む
3　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗黄褐色粘土をブロック状に 2% 含む
4　黒褐色（10YR2/3）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 5mm）1% 含む
5　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗黄褐色粘土粒　（径 20 ～ 30mm）15% 含む
6　黒褐色（10YR2/3）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 2mm）1% 含む
7　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　炭化物粒（径 1 ～ 2mm）1% 含む
8　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　炭化物粒（径 5mm）2% 褐色ローム粒（径 3mm）1% 含む
9　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度軟　褐色ローム粒（径 3mm）1% 含む
10　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度軟　暗赤褐色ローム粒（径 5mm）2% 含む
11　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 5 ～ 7mm）1% 含む
12　黒褐色（10YR2/3）シルト質壌土　粘性中　堅密度堅　暗黄褐色粘土粒（径 10mm）2% 含む
13　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）1% 含む
14　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 2 ～ 3mm）3% 含む
15　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 5mm）2% 含む
16　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗黄褐色粘土粒（径 5mm）1% 含む
17　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 2mm）2% 含む
18　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　灰黄褐色ロームをブロック状に 3% 含む
19　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）1% 含む
20　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度しょう　葦などの植物根を多く含む
21　暗褐色（10YR3/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黒褐色土をブロック状に 15%、黄褐色ローム粒（径 2mm）3% 含む
22　黒褐色（10YR2/2）　埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）2% 含む

0　2m
（縮尺＝1/40）

図15　１－３調査区東壁断面図

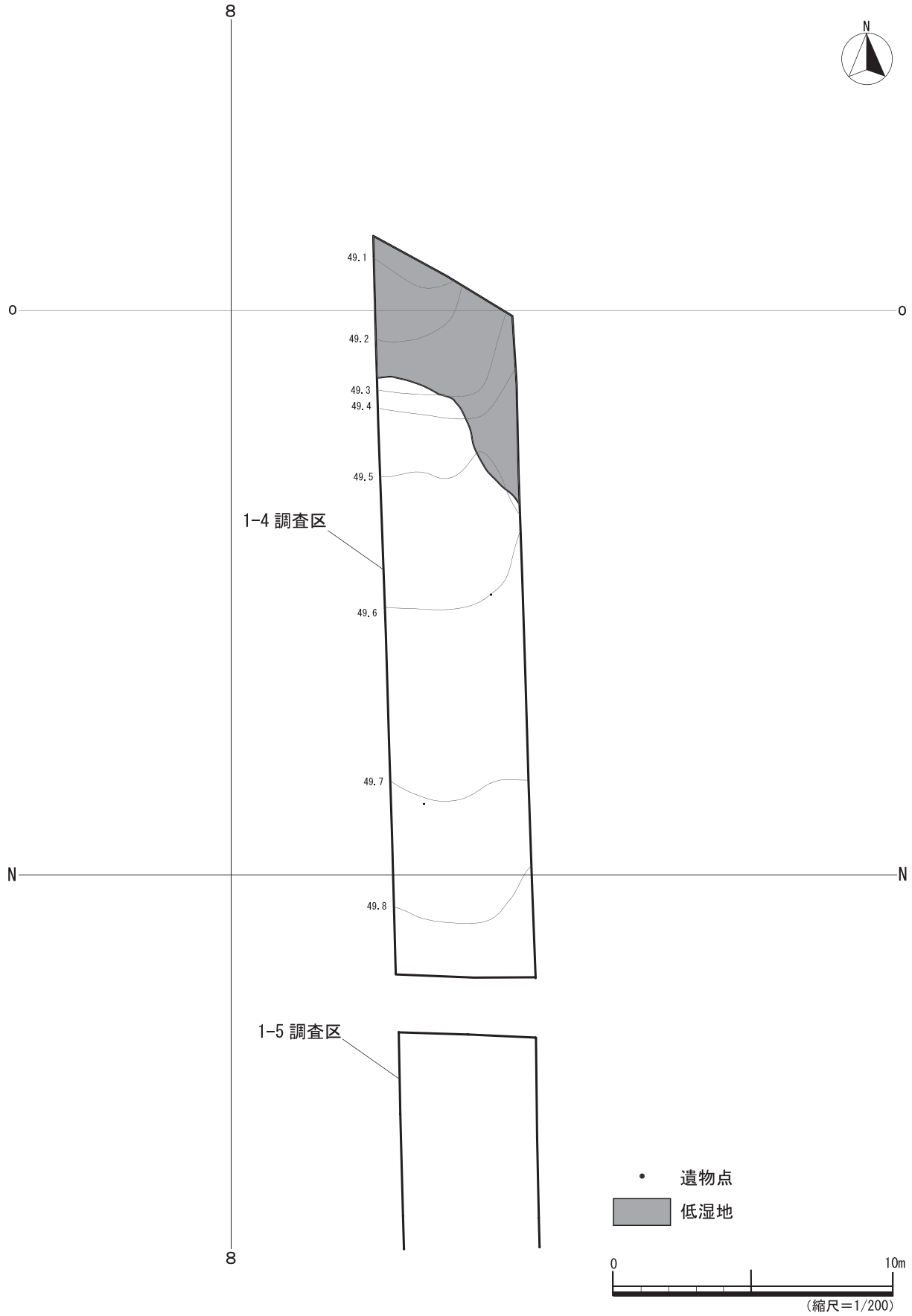


図16　１－４調査区平面図

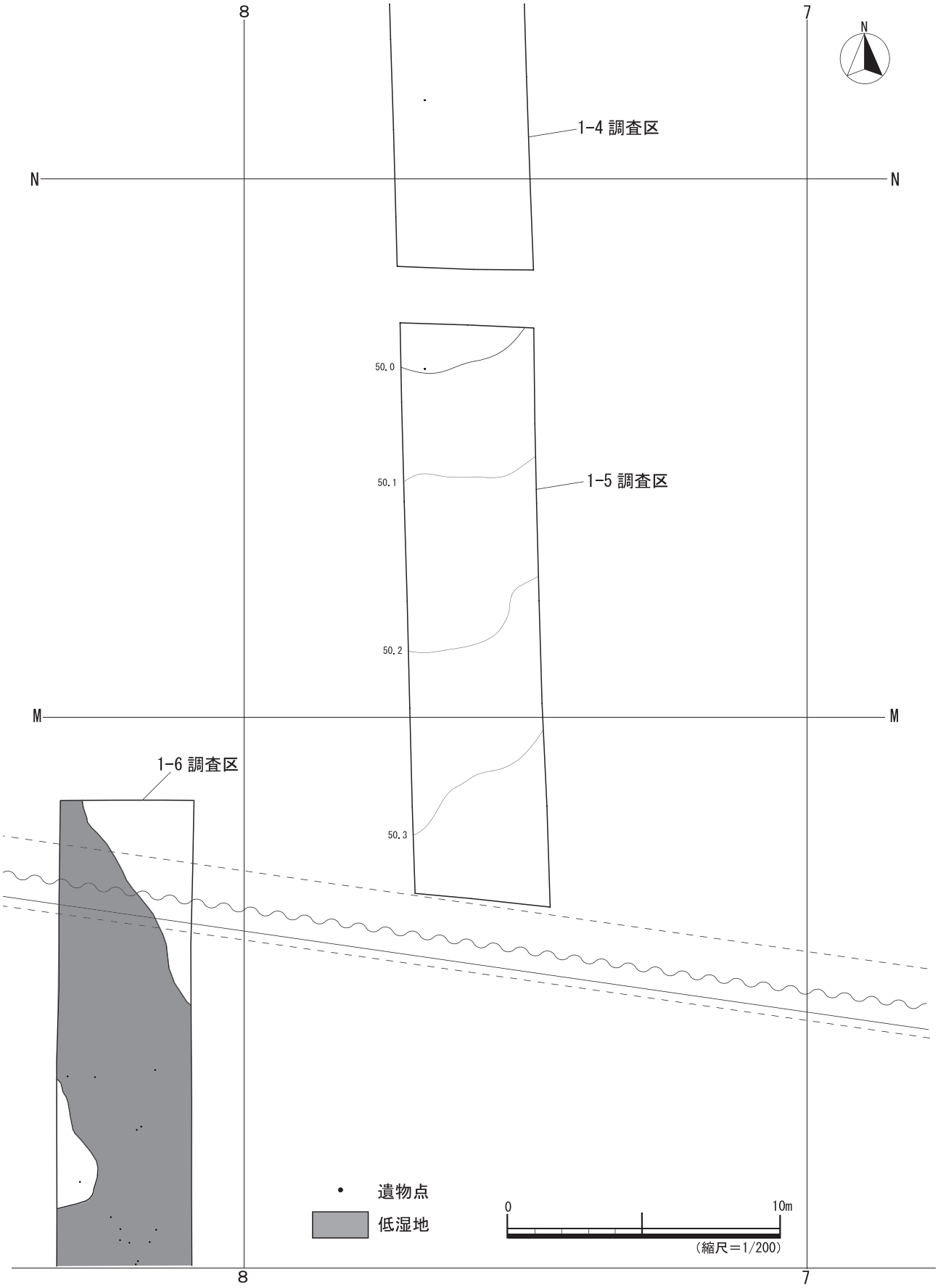


図17　１－５調査区平面図

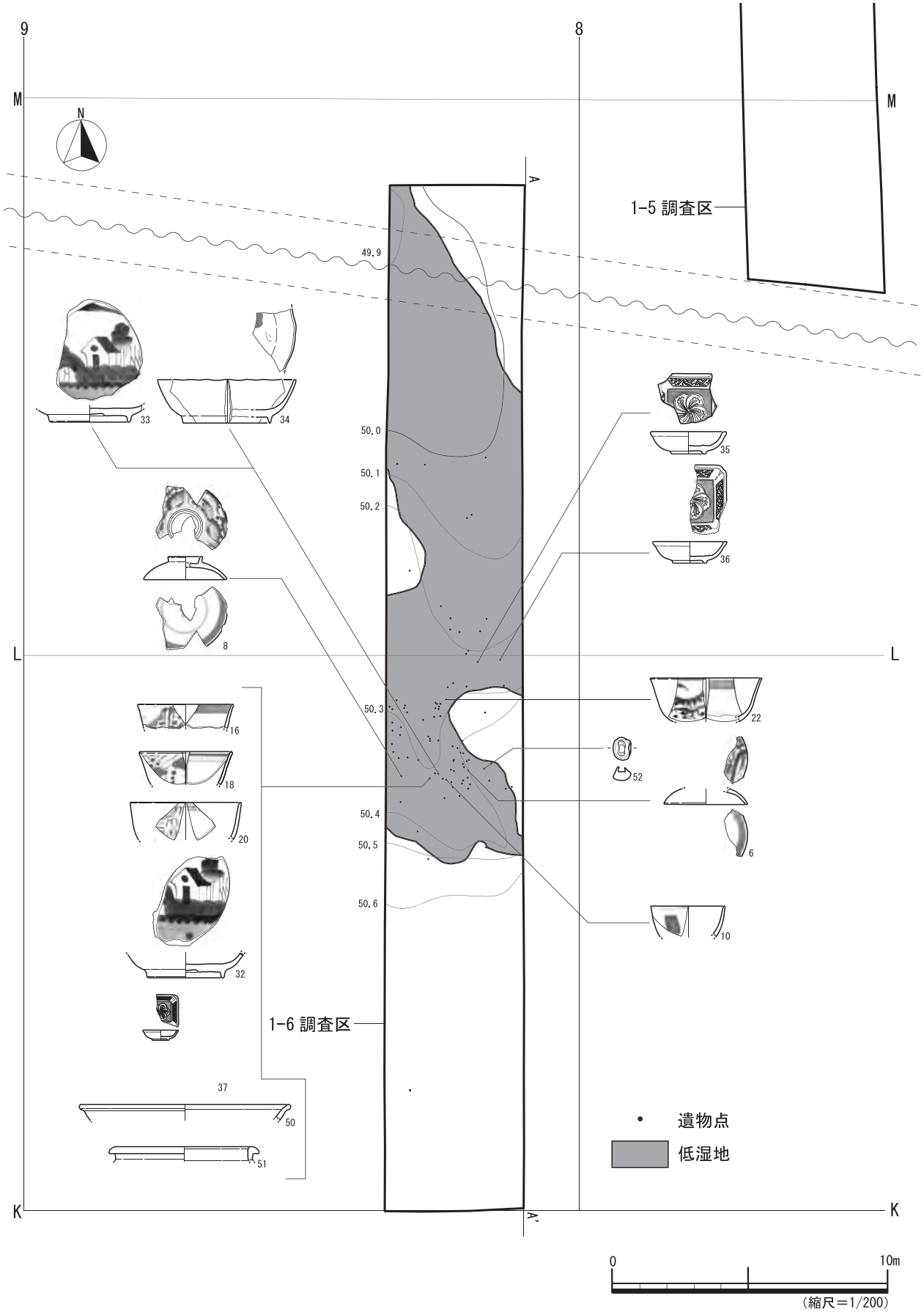
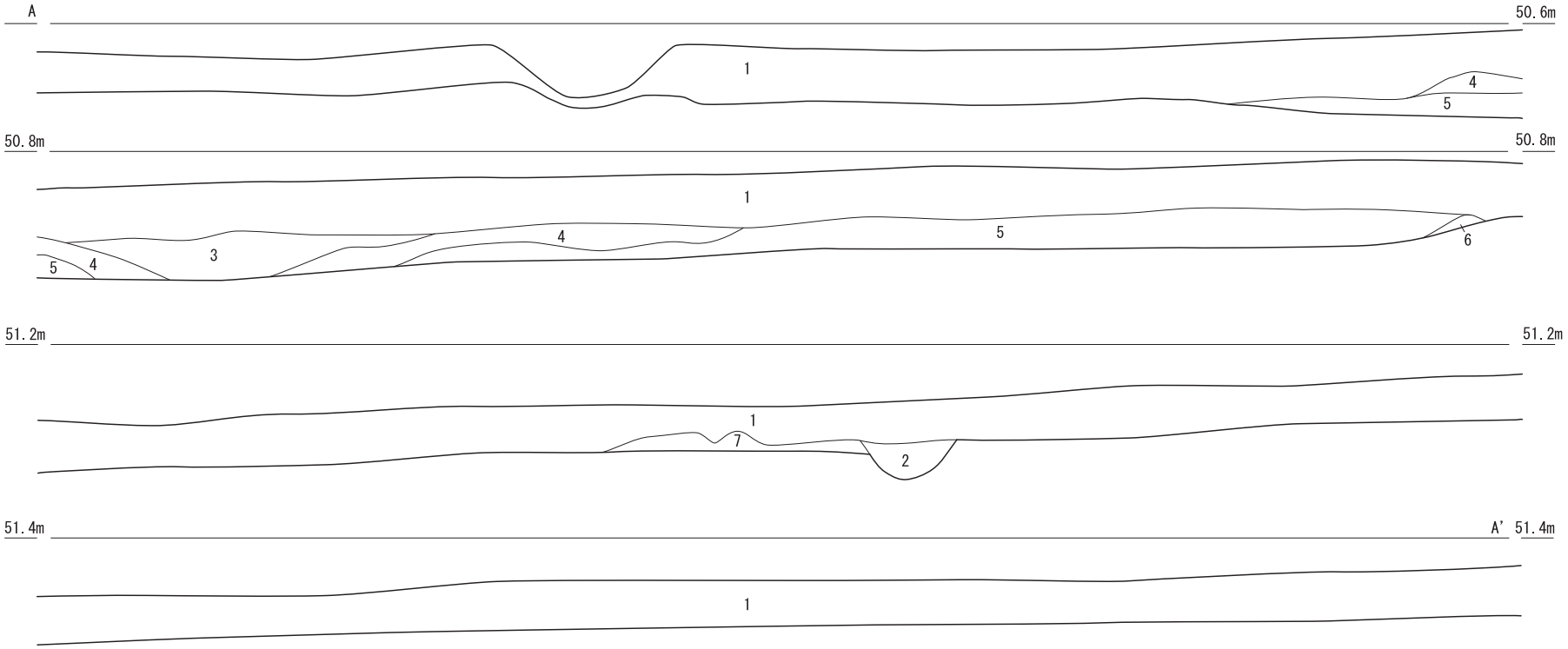


図18　1－6調査区平面図



1　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色粘土粒（径７～15mm）15%含む
2　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性強　堅密度堅　暗赤褐色土粒（径2mm）3%含む
3　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径7mm）3%含む
4　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径３～5mm）1%含む
5　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ロームをブロック状に15%含む
6　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗褐色土粒（径10mm）5%含む　基本層序Ⅱ-1層（花粉分析試料No.２採取）
7　にぶい黄褐色（10YR5/4）壌土　粘性強　堅密度すこぶる堅　基本層序Ⅲ層

図19　１－６調査区東壁断面図

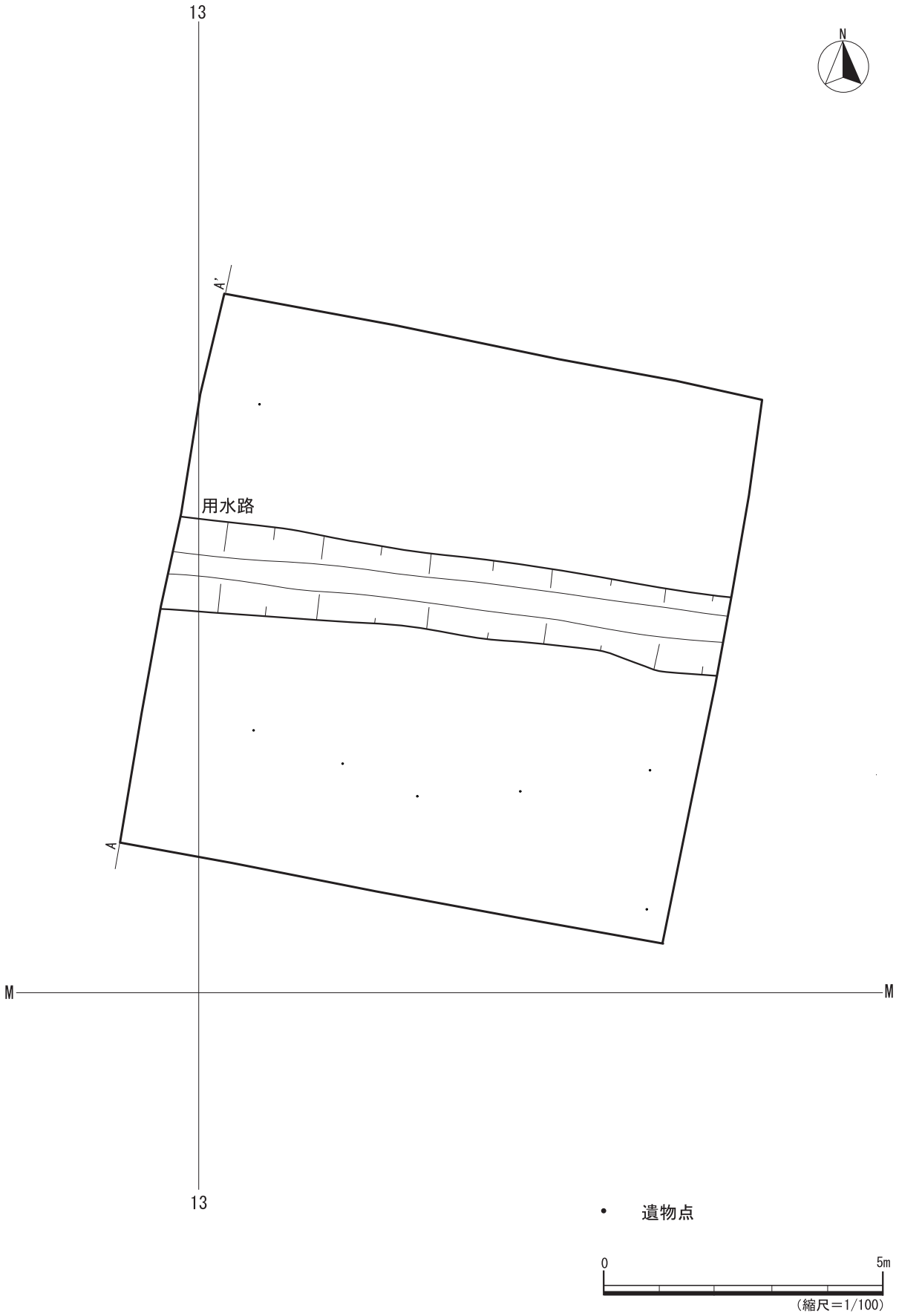
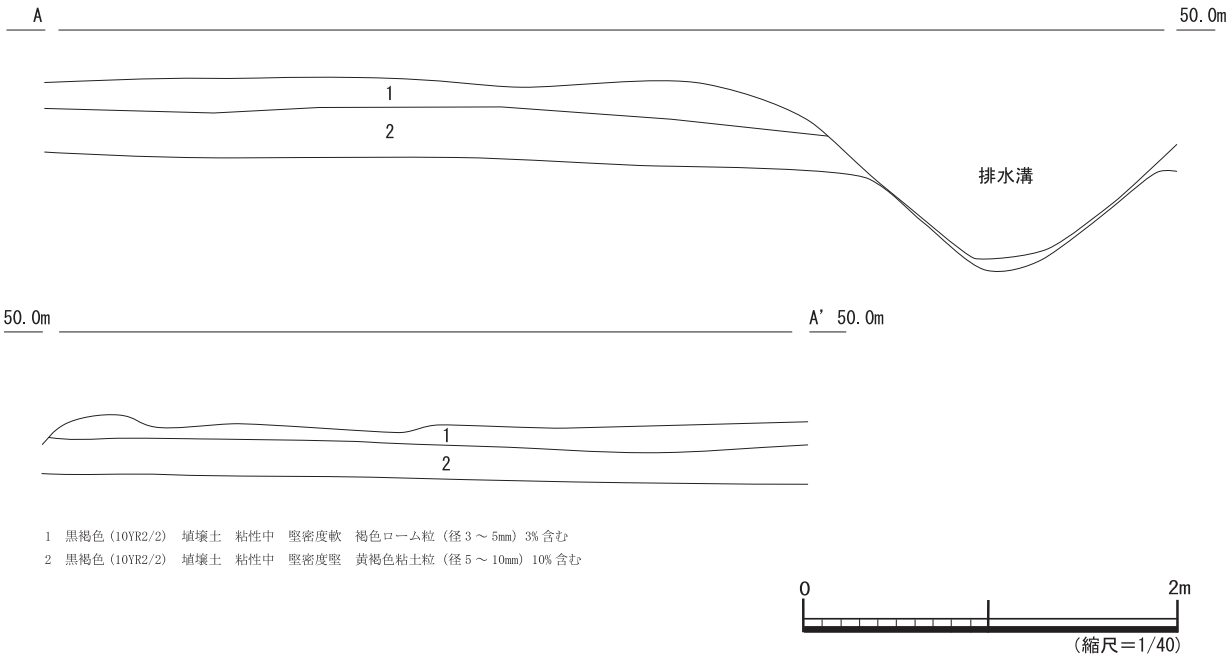


図20　１－７調査区平面図



1　黒褐色（10YR2/2）　埴壌土　粘性中　堅密度軟　褐色ローム粒（径３～５mm）3%含む
2　黒褐色（10YR2/2）　埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色粘土粒（径５～10mm）10%含む

図21　１－７調査区西壁断面図

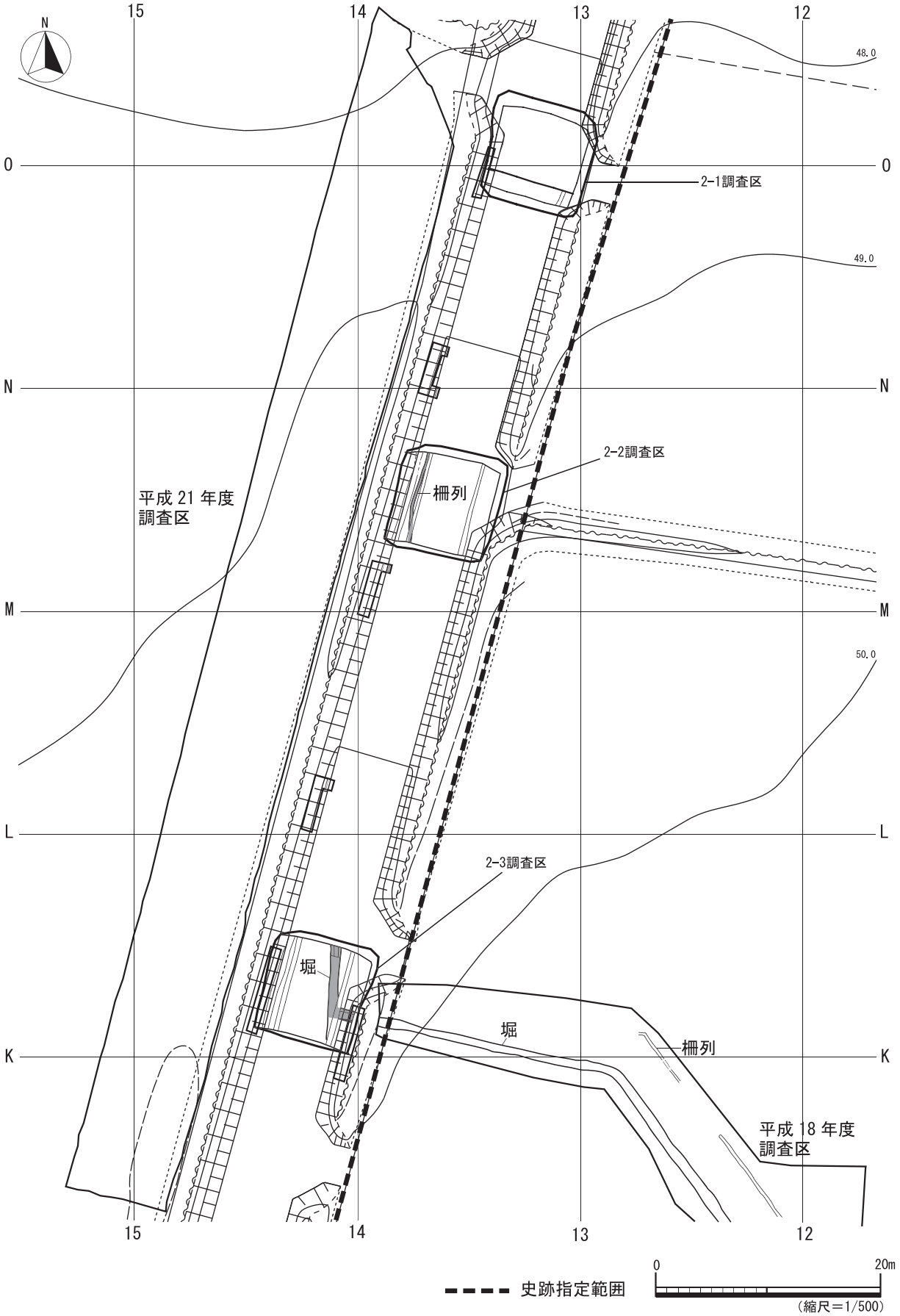


図22　第 2 調査区調査区配置図

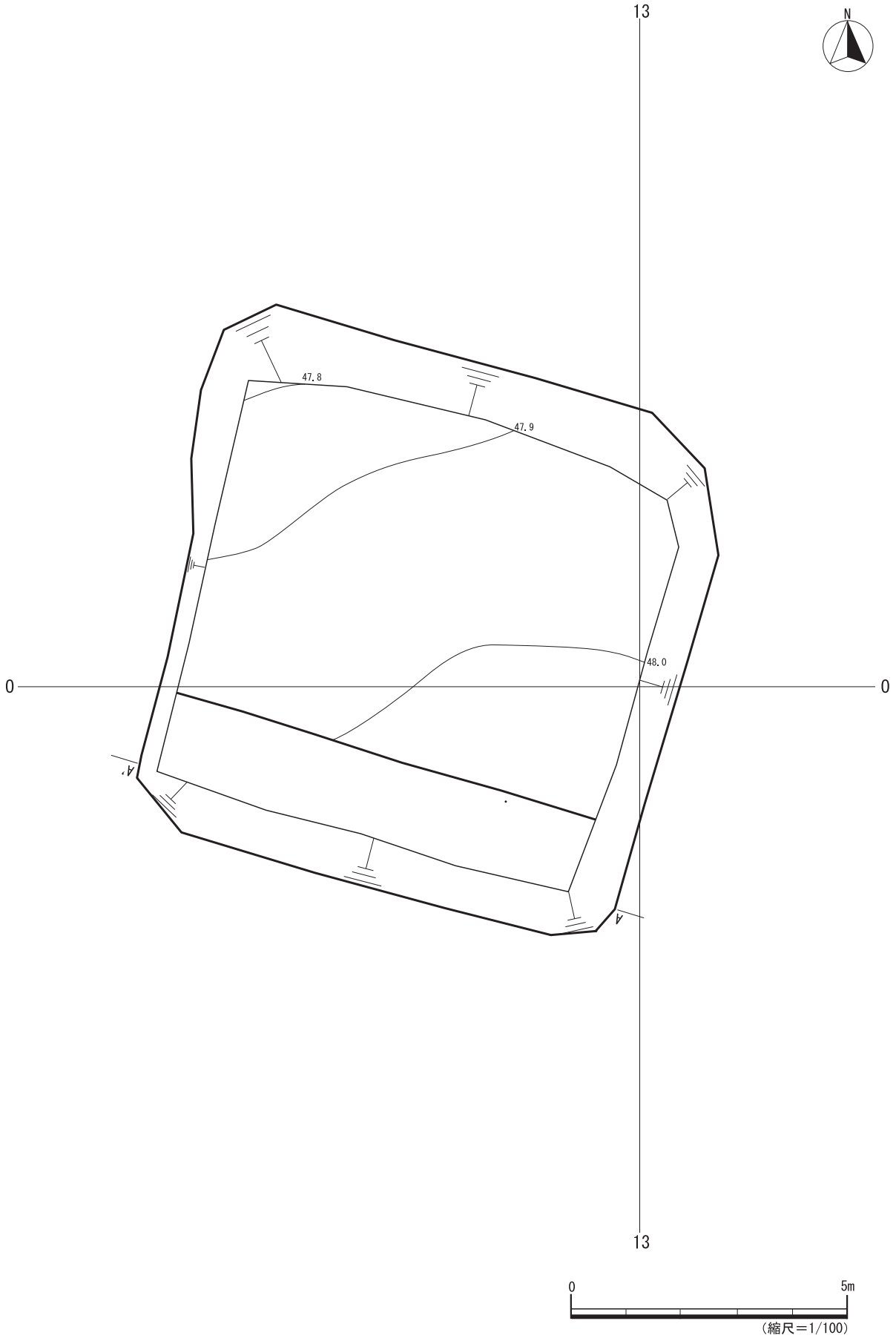
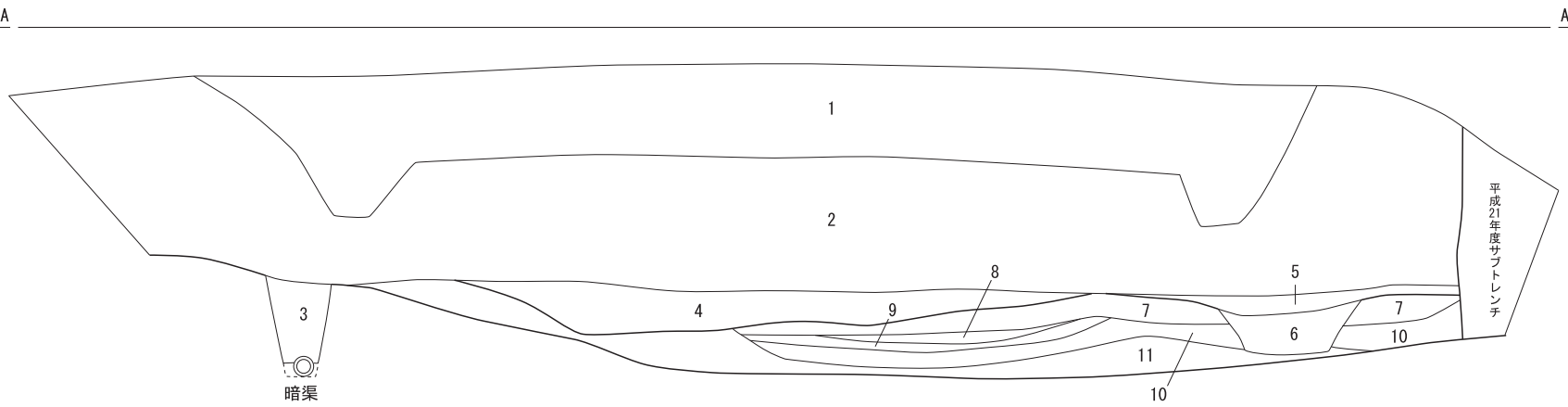


図23　２－１調査区平面図



1　灰オリーブ色（5Y4/2）砂土　粘性弱　堅密度固結　礫（径 30 ～ 50mm）50％含む（舗装下砂利層）
2　オリーブ黒色（5Y2/2）埴土　粘性強　堅密度すこぶる堅　黄褐色ロームをブロック状に 15％含む（路盤材）
3　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性強　堅密度堅　暗褐色ロームをブロック状に 15％含む
4　オリーブ色（5Y5/4）砂土　粘性強　堅密度固結　礫（径 20mm）20％含む
5　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 3 ～ 5mm）30％含む
6　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 10 ～ 20mm）3％含む
7　黒褐色（10YR2/3）壌土　粘性中　堅密度すこぶる堅　礫（径 3mm）2％含む　基本層序Ⅱ-1
8　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色シルト質土粒（径 3mm）2％含む
9　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質壌土　粘性弱　堅密度堅　火山灰の自然堆積層　基本層序Ⅱ-2
10　暗褐色（10YR3/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　灰白色シルト質土粒（径 5mm）2％含む　基本層序Ⅱ-3
11　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅱ-4

図24　２－１調査区南壁断面図

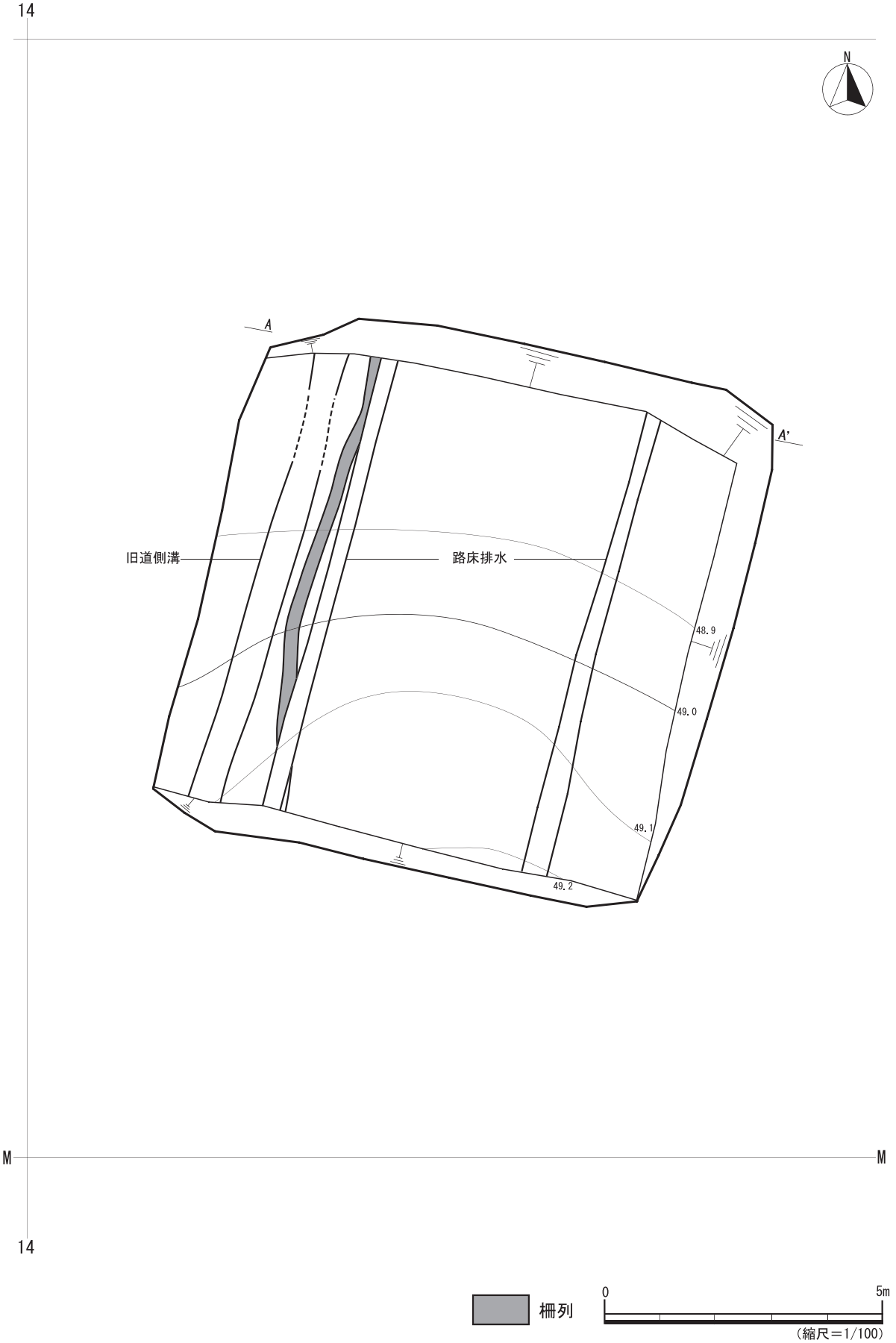
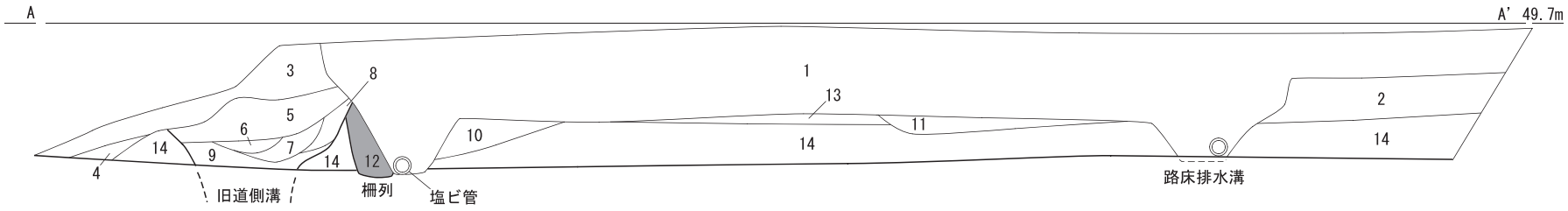


図25　２－２調査区平面図



1　灰色（5Y4/1）砂土　粘性中　堅密度堅　礫（径 20 ～ 30㎜）
2　褐色（10YR4/4）埴壌土　粘性強　堅密度堅　明黄褐色ロームをブロック状に 30％含む
3　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ロームをブロック状に 10％、明黄褐色ロームをブロック状に 7％含む
4　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　黄褐色ローム粒（径 5㎜）10％含む　路床排水溝の堀方
5　黄褐色（10YR5/6）埴壌土　粘性中　堅密度堅　暗褐色土粒（径 10 ～ 30㎜）20％含む
6　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色土粒（径 20㎜）10％含む
7　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 20 ～ 40㎜）15％含む
8　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　明黄褐色ローム粒（径 5㎜）10％含む
9　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　明黄褐色ロームをブロック状に 10％含む
10 黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 7㎜）10％含む
11 黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度すこぶる堅
12 黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径 5 ～ 10㎜）7％含む　柵列堀方
13 黒色（10YR1.7/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅱ－3 層
14 黄褐色（10YR5/6）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅲ層

図26　２－２調査区北壁断面図

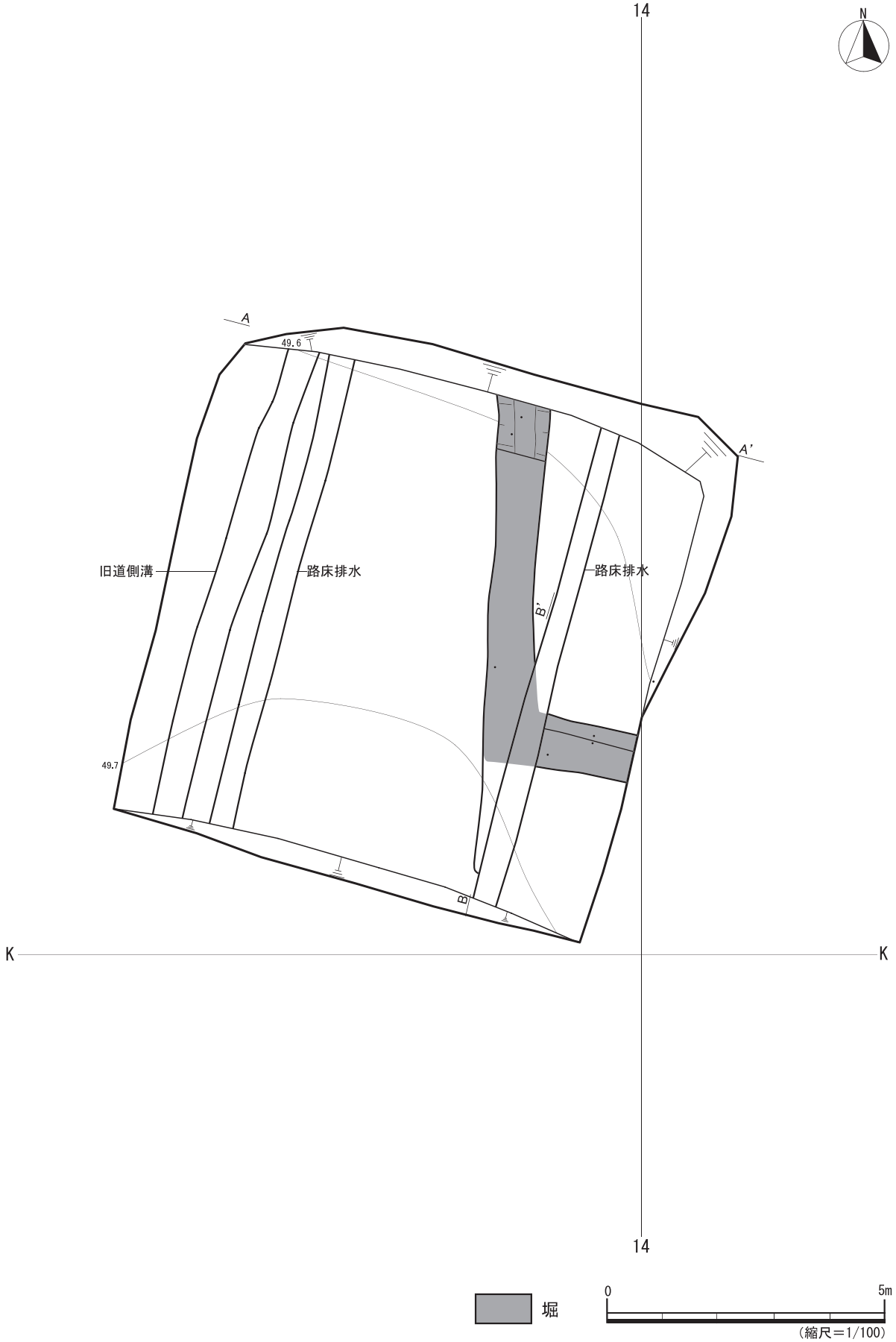
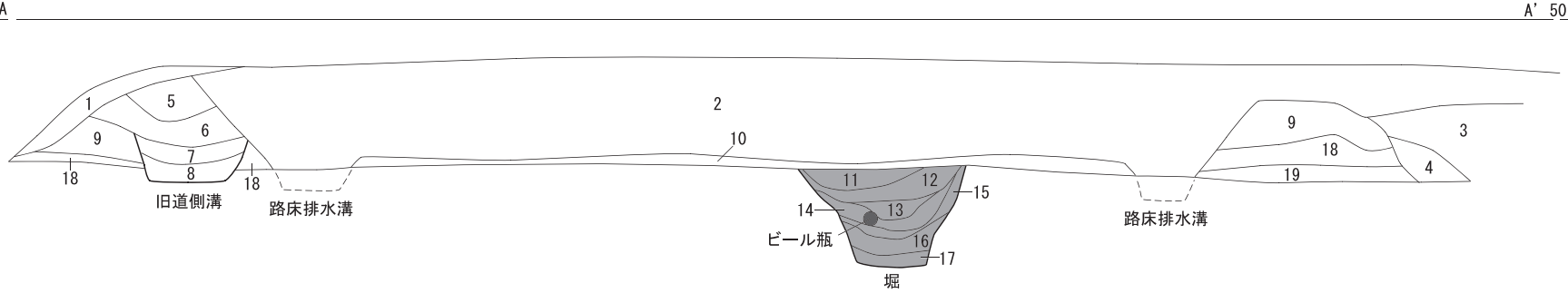
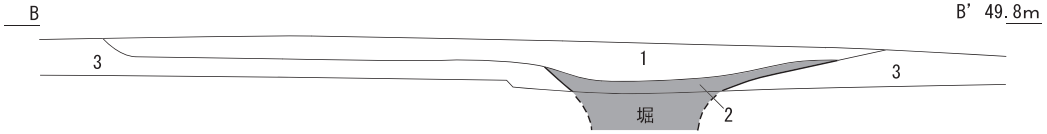


図27　２－３調査区平面図



1　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度軟　黄褐色ローム粒（径10mm）2％含む
2　褐色（10YR4/4）砂土　粘性弱　堅密度固結　礫（径20～30mm）40％含む
3　明黄褐色（10YR7/6）重埴土　粘性強　堅密度すこぶる堅　黄褐色ロームをブロック状に30％、暗褐色土を網目状に15％含む
4　黒褐色（7.5YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径10～20mm）10％含む
5　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径5～10mm）5％含む
6　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ロームをブロック状に25％含む
7　明黄褐色（10YR6/6）重埴土　粘性強　堅密度すこぶる堅　暗褐色土を網目状に15％含む
8　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径5mm）2％含む
9　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径5mm）1％含む
10　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度すこぶる堅　褐色ローム粒（径2～3mm）3％含む
11　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径3～4mm）7％含む
12　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径2～3mm）10％含む
13　黒褐色（10YR3/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径2～3mm）15％含む
14　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径2～3mm）3％含む
15　黒褐色（10YR2/3）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径5mm）3％含む
16　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径2～3mm）2％含む
17　暗褐色（10YR3/3）砂壌土　粘性中　堅密度軟
18　黒色（10YR2/1）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅱ－4層
19　褐色（10YR4/4）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅲ層



1　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　褐色ローム粒（径5～7mm）3％、鉄錆5％含む
2　黒褐色（10YR2/2）埴壌土　粘性中　堅密度堅　黄褐色ローム粒（径5mm）1％含む
3　褐色（10YR4/4）埴壌土　粘性中　堅密度堅　基本層序Ⅲ層

図28　２－３調査区北壁及び堀縦断面図

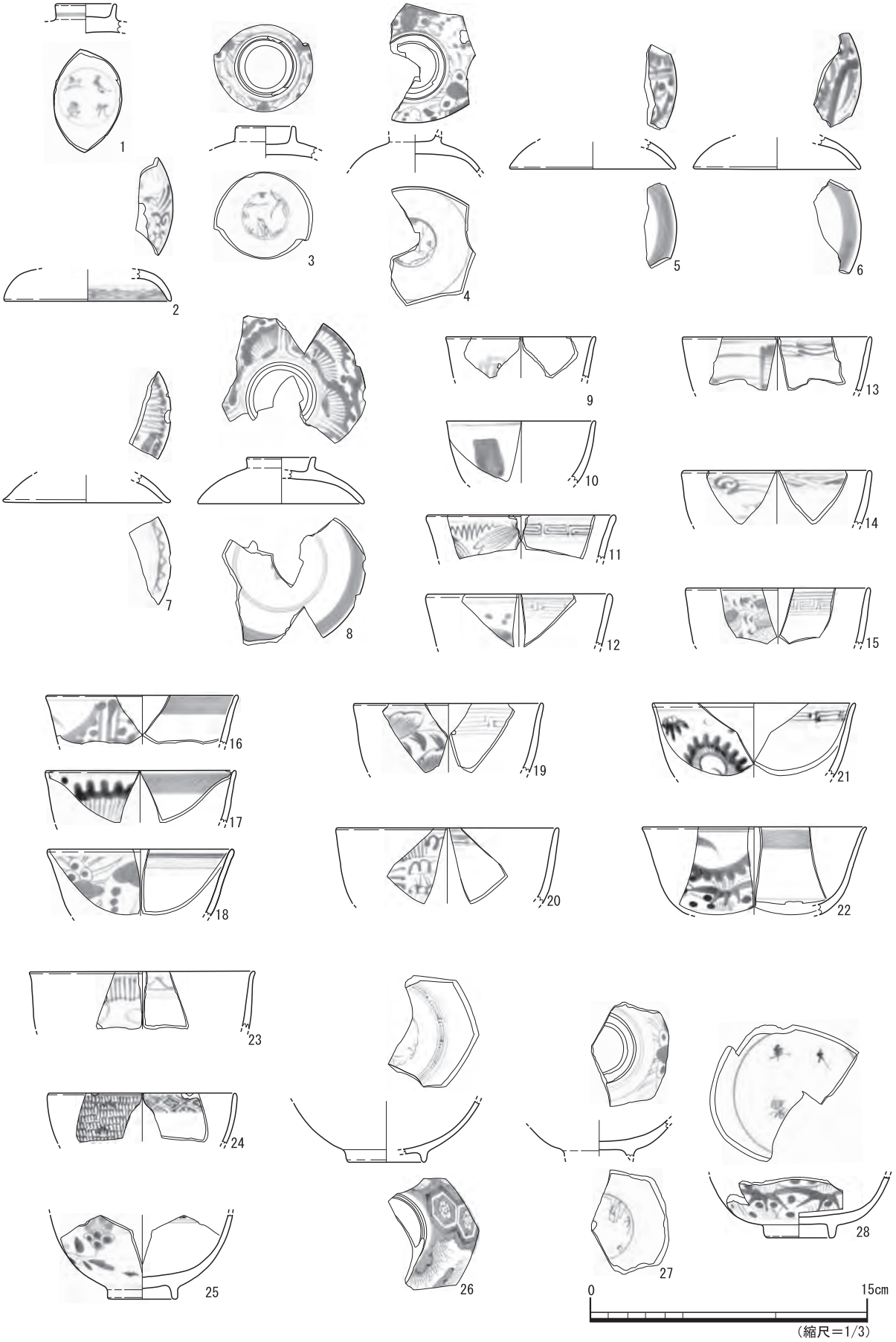


図29　調査区出土遺物（１）

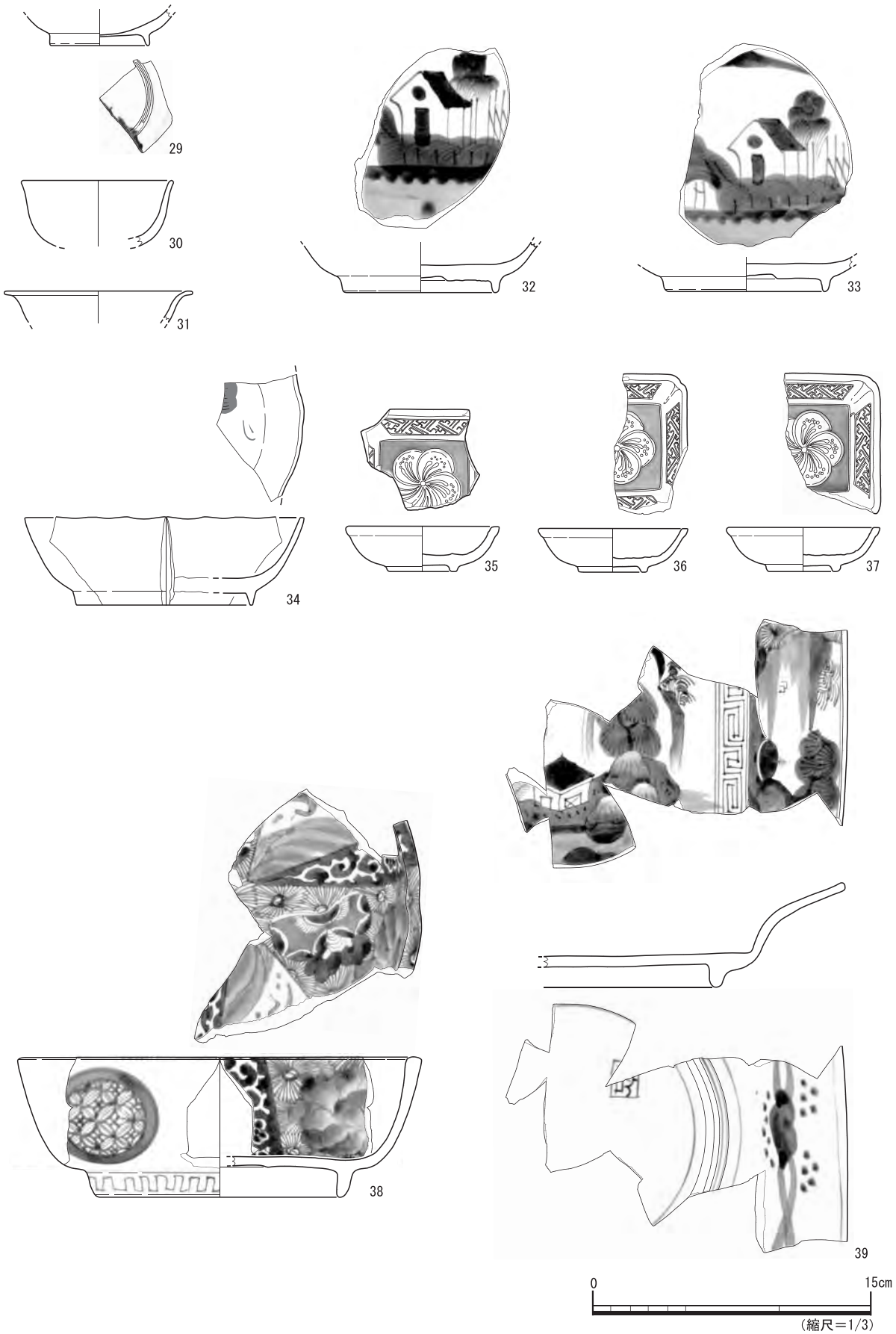


図30　調査区出土遺物（２）

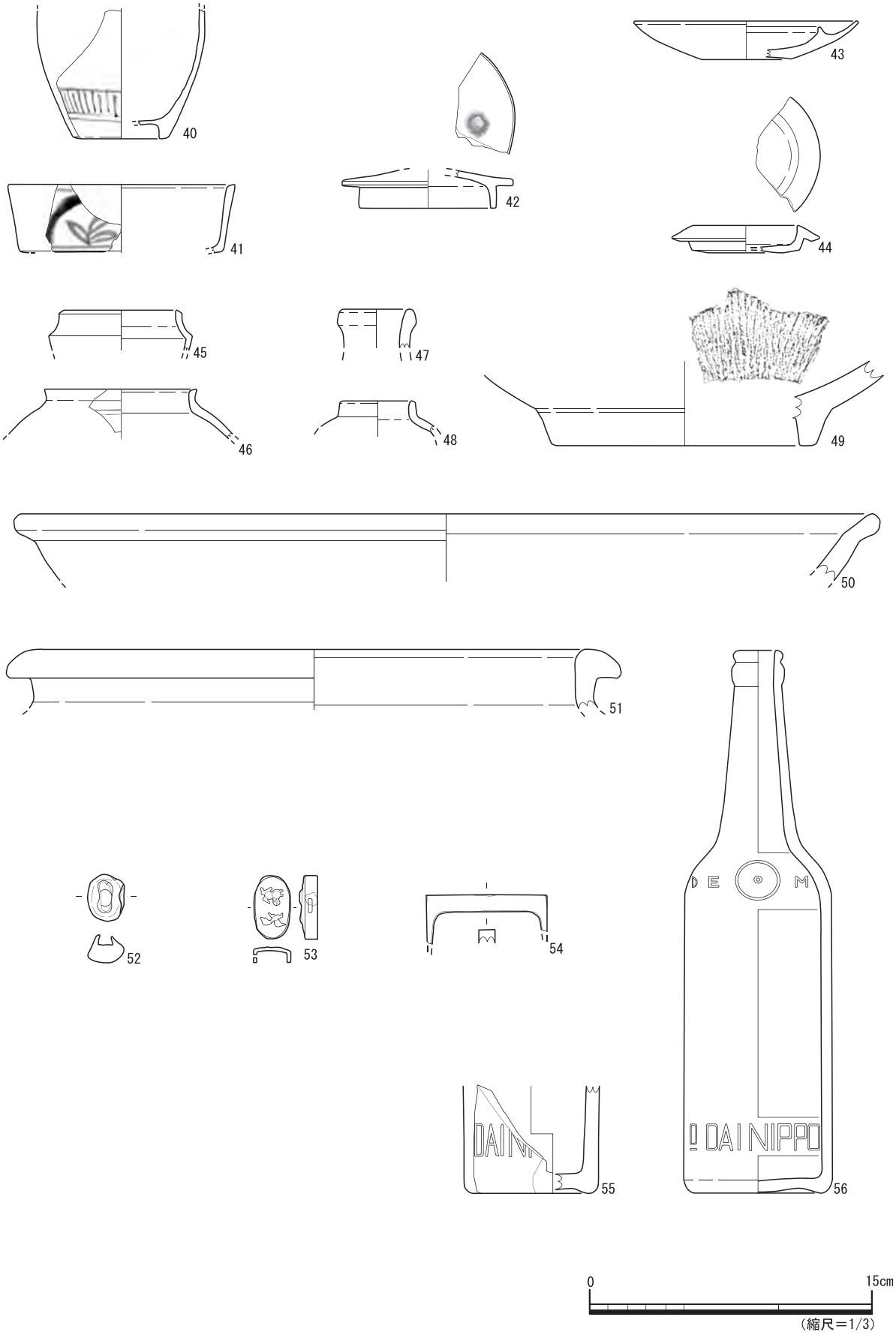


図31　調査区出土遺物（３）

表４　掲載遺物一覧（陶磁器・ガラス製品）

掲載番号	写真	調査区	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
1	25	1-3	I	磁器	碗蓋		3.2		見込みに「成化年造」字
2	25	1-3	I	磁器	碗蓋	9.0			外面花文と窓、内面檜垣文
3	25	1-3	I	磁器	碗蓋		3.0		外面草花文、見込み丸文に松竹梅
4	25	1-2,1-6	I	磁器	碗蓋				外面草花文、見込み丸文に松竹梅
5	25	1-6	I	磁器	碗蓋	8.8			外面草花文、内面鋸歯状文
6	25	1-6	I	磁器	碗蓋	8.9			外面草花文、内面鋸歯状文
7	25	1-3	I	磁器	碗蓋	9.0			外面草花文、内面連続する山形文
8	25	1-6	I	磁器	碗蓋	8.8	3.5	2.5	外面草花文、内面鋸歯状文、見込みに圏線
9	25	1-2	I	磁器	碗	8.0			外面源氏香文
10	25	1-6	I	磁器	碗	7.8			外面竪杵をもつウサギの図柄
11	25	1-2	I	磁器	碗	10.0			外面花文と波、内面雷文
12	25	1-3	I	磁器	碗	9.8			外面花文、内面雷文
13	25	1-3	I	磁器	碗	10.1			内面連弧文
14	25	1-3	I	磁器	碗	10.0			外面花文、内面檜垣文
15	25	1-3	I	磁器	碗	9.8			外面草花文、内面雷文
16	25	1-6	I	磁器	碗	10.2			外面草花文、内面鋸歯状文
17	25	1-3	I	磁器	碗	10.0			外面草花文、内面鋸歯状文
18	25	1-6	I	磁器	碗	9.9			外面草花文、内面雷文
19	26	1-3	I	磁器	碗	10.0			外面草花文、内面雷文
20	26	1-6	I	磁器	碗	11.8			外面草花文、内面雷文
21	26	1-3	I	磁器	碗	10.7			外面草花文、内面雷文

掲載番号	写真	調査区	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
22	26	1-6	I	磁器	碗	12.0			外面草花文、内面鋸歯状文
23	26	1-3	I	磁器	碗	12.0			外面縦縞と唐草文、内面連弧文
24	26	1-3	I	磁器	碗	10.0			外面微塵唐草文、内面菱形文
25	28	1-2	I	磁器	碗		3.5		外面花蔓草、高台内見込みに落款風文様
26	26	1-6	I	磁器	碗		4.1		外面松葉と亀甲内に花弁、内面に圏線２条とその間に雷文、見込みに松竹梅
27	26	1-2	I	磁器	碗				外面草花文、見込み丸文に松竹梅
28	29	1-2,1-6	I	磁器	碗		3.1		外面草花文、見込み圏線内に「大明？年成」字
29	26	1-3	I	磁器	碗		5.2		焼接痕
30	26	1-3	I	磁器	碗	8.0			
31	26	1-2	I	磁器	碗	10.0			
32	26	1-6	I	磁器	皿		8.0		見込みに山水、高台内蛇目状に露胎
33	26	1-6	I	磁器	皿	8.3			見込みに山水、高台内蛇目状に露胎
34	31	1-6	I	磁器	輪花皿	14.8			見込みに花文
35	26	1-6	I	磁器	型押皿	8.0	3.7	2.4	見込みに桜花文、内面沙綾形文
36	26	1-6	I	磁器	型押皿	7.8	3.6	2.7	見込みに桜花文、内面沙綾形文
37	30	1-6	I	磁器	型押皿	8.0	3.6	2.9	見込みに桜花文、内面沙綾形文
38	37	1-1,1-6	I	磁器	亻	21.0	13.0	7.5	外面丸窓内に七宝文、高台に櫛歯文、内面と見込み放射状区画され、花弁と松葉、波、草花文
39	38	1-1,1-2	I	磁器	皿		15.0	5.7	外面花文、高台内落款風の文様、内面と見込みは山水画、見込み周縁は雷文縁取り
40	32	1-6	I	磁器	瓶		5.0		外面下位圏線間に棒状連続文

掲載番号	写真	調査区	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
41	27	1-3	I	磁器	段重	11.9	10.7	3.5	外面草文
42	33	1-2	I	関西系陶器	土瓶蓋	9.0			
43	27	1-2	I	関西系陶器	灯明皿	11.6			
44	34	1-2	I	関西系陶器	油注蓋	5.4			内面灰釉、外面露胎
45	27	1-3	I	関西系陶器	肩付茶入	6.0			内外面鉄釉
46	27	1-3	I	関西系陶器	土瓶	8.0			
47	35	1-3	I	関西系陶器	瓶	3.8			外面長石釉
48	27	1-3	I	瓦質土器	壺	3.7			肩部に菊花文押捺
49	27	1-3	I	陶器	すり鉢		14.0		内外面鉄釉
50	27	1-6	I	陶器	すり鉢	45.0			内外面鉄釉
51	27	1-6	I	陶器	甕	29.2			内外面緑釉
55	39	1-3	I	ガラス製品	ビール瓶		6.0		「DAINIPPON BREWERY」
56	40	2-3	堀	ガラス製品	ビール瓶	1.9	6.5	29.0	「DAINIPPON BREWERY Co LTD」

表５　掲載遺物一覧（金属製品・石製品）

掲載番号	写真	調査区	層位	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
52	27	1-6	I 層	金属製品	不明	2.5	1.9	1.5	鉛製品
53	27	1-6	I 層	金属製品	柄縁金具	3.4	2.0	0.8	銅製品
54	36	1-3	I 層	石製品	硯		6.3	0.8	粘板岩

表 6　平成 22 年度出土遺物集計表

種別	器種	法量	点数
磁器			496
	碗蓋		28
	碗		115
		8 cm	10
		10cm	23
		12cm	4
		不明	78
	皿		245
	輪花皿		36
	型押皿		32
	鉢		12
	段重		3
	瓶		9
	不明		16
関西系陶器			115
	碗		3
	碗蓋		1
	土瓶		15
	土瓶蓋		1
	土鍋		1
	灯明皿		16
	油注蓋		1
	鉢		
	瓶		64
	壺		
	茶入		1
	不明		12
陶器			42
	皿		1
	鉢		5
	すり鉢		11
	瓶		3
	甕		22
	不明		
金属製品			2
	刀装具		1
	鉛製品		1
石製品			2
	硯		1
	砥石		1
近代磁器			33
	碗		14
	筒型碗		4
	皿		10
	瓶		2
	不明		3
近代陶器			5
	碗		2
	土管		3
ガラス製品			11
	ビール瓶		6
	瓶		3
	不明		2
その他			6
	自然石		3
	フレイク		3
総計			712

Ⅴ章　自然科学的分析

1. 館城跡の花粉化石

森　将志（パレオ・ラボ）

はじめに

北海道檜山郡厚沢部町に位置する館城跡において、遺跡北辺の堀・柵列の検出を目的として発掘調査が行われた。調査の結果、堀・柵列は検出されなかったが、自然の沢状地形が検出された。この沢状地形が埋め戻されたのは昭和30～50年代と推測されており、沢状地形の底面から花粉分析用の試料が採取された。以下に、この土壌試料を用いて行った花粉分析結果について記し、遺跡周辺の古植生について検討した。

（1）試料と分析方法

試料は館城跡北側の外郭線が所在すると推定される調査区から採取された２試料（試料 No. １，２）である。試料 No. １，２は黒色土壌で、細かな根状の植物遺体が散在している。試料 No. １は埋め戻しによる堆積層直下に位置し、自然堆積層と推測されている。沢状地形が埋め戻されたのは昭和30～50年代と推定されることから、試料 No. １の堆積年代は昭和30～50年代以前で館城築城時期を含むと考えられている。試料 No. ２は基本層序Ⅱ－１層相当層で、下位に位置するⅡ－２層が B-Tm（10世紀）と分析されているため、B-Tm 降灰後から館城築城期までを含む時間幅で形成されたものと考えられている。花粉分析はこれら２試料について以下のような手順に従って行った。

試料（湿重約３ g）を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、46％のフッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え15分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、図版にある分類群ごとの単体標本（PLC. 147～152）はパレオ・ラボに保管されている。

（2）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉24、草本花粉14、形態分類を含むシダ植物胞子３の総計41である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、分布図を図１に示した。なお分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また図や表においてハイフン（－）で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。バラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、試料 No. １の樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属とハンノキ属が最も多く検出され、産出率はそれぞれ20％、17％である。次いで16％でトチノキ属が多く観察される。その他ではクルミ属－サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属、トネリコ属などの落

葉広葉樹が数％の産出率を示している。草本類ではイネ科とヨモギ属が高い産出率を示し、それぞれ20％、24％である。

試料 No. 2 ではトチノキ属が最も多く産出し、産出率は28％に達している。次いでコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、クリ属が多く、それぞれ13％、12％、11％を示している。草本花粉は産出率が10％を超える種類がなく、すべて５％以下である。その他、ソバ属が少ないながら両試料で観察されている。

（３）遺跡周辺の古植生

試料 No. 2 の堆積時期は B-Tm（10世紀）降灰後から館城築城時期を含む時間幅で形成されたと推測されている。この時期は館城跡周辺丘陵部ではコナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属などが、沢状地形周辺にはトチノキ属、クルミ属－サワグルミ属などが、館城跡周辺の低地にはハンノキ属、トネリコ属、ヤナギ属の湿地林が広がる落葉広葉樹林が成立していたと推測される。試料 No. 2 における草本花粉は産出が少ないため、館城跡周辺では草地の分布範囲が狭かったと思われるが、イネ科、ヨモギ属、カラマツソウ属などの雑草が生育していたと思われる。

試料 No. 1 の堆積時期は昭和30～50年代以前で館城築城時期を含むと推測されている。この時期の館城跡周辺丘陵部ではコナラ属コナラ亜属やカバノキ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していたと推測される。また、ニヨウマツ類の二次林も一部地域に成立していたと推測される。さらに、沢状地形周辺などの地下水位の高いところにはトチノキ属、クルミ属－サワグルミ属、ウコギ科などが分布を広げ、館城跡周辺の低地にはハンノキ属、トネリコ属などが湿地林を形成していたと思われる。さらに草本植生としてはイネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などの雑草群落が館城跡周辺に形成されていたと考えられる。

今回分析した試料は明確な堆積時期が確定できないが、試料の堆積状況から、試料 No. 2 の方が古く、試料 No. 1 の方が新しいと考えられる。さらに、試料 No. 2 に比べて試料 No. 1 の方が草本花粉の産出が多く、二次林要素のニヨウマツ類、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属の産出がやや増加するということから考えると、花粉分析で得られた花粉化石群集は築城前後の時期の植生を反映しているのかもしれない。すなわち、それまで成立していた植生が築城に伴い切り開かれ、草地が広がり、沢沿いを中心に分布していたトチノキ属やヤナギ属などの代わりに、ニヨウマツ類やカバノキ属、コナラ属コナラ亜属などの陽樹が分布を広げてきたと思われる。

なお、両試料からソバ属が検出されており、試料採取地点周辺においてソバが栽培されていた可能性がある。

表 1　産出花粉化石一覧表

学名	和名	試料番号 No.1	試料番号 No.2
樹木			
Abies	モミ属	1	−
Picea	トウヒ属	1	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	9	1
Pinus(indistinct)	マツ属（不明）	2	−
Cryptomeria	スギ属	6	−
Salix	ヤナギ属	2	14
Juglans − Pterocarya	クルミ属−サワグルミ属	7	4
Carpinus − Ostrya	クマシデ属−アサダ属	4	−
Betula	カバノキ属	11	2
Alnus	ハンノキ属	34	23
Fagus	ブナ属	1	3
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	39	26
Castanea	クリ属	3	21
Ulmus − Zelkova	ニレ属−ケヤキ属	8	8
Aphananthe − Celtis	ムクノキ属−エノキ属	−	1
Phellodendron	キハダ属	1	−
Sapium	シラキ属	3	1
Rhus − Toxicodendron	ヌルデ属−ウルシ属	1	1
Acer	カエデ属	14	5
Aesculus	トチノキ属	31	76
Parthenocissus	ツタ属	−	1
Tilia	シナノキ属	9	2
Araliaceae	ウコギ科	4	−
Fraxinus	トネリコ属	9	10
草本			
Gramineae	イネ科	119	9
Cyperaceae	カヤツリグサ科	11	2
Polygonum sect. Echinocaulon − Persicaria	ウナギツカミ節−サナエタデ節	3	−
Fagopyrum	ソバ属	2	1
Chenopodiaceae − Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科	12	−
Caryophyllaceae	ナデシコ科	4	−
Thalictrum	カラマツソウ属	1	6
Brassicaceae	アブラナ科	12	−
Rosaceae	バラ科	5	11
Leguminosae	マメ科	3	2
Apiaceae	セリ科	10	−
Artemisia	ヨモギ属	141	9
Tubuliflorae	キク亜科	16	4
Liguliflorae	タンポポ亜科	30	2
シダ植物			
Osmundaceae	ゼンマイ科	1	2
Monolete type spore	単条型胞子	3	4
Trilete type spore	三条型胞子	11	−
Arboreal pollen	樹木花粉	200	200
Nonarboreal pollen	草本花粉	369	46
Spores	シダ植物胞子	15	6
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	584	252
Unknown pollen	不明花粉	28	16

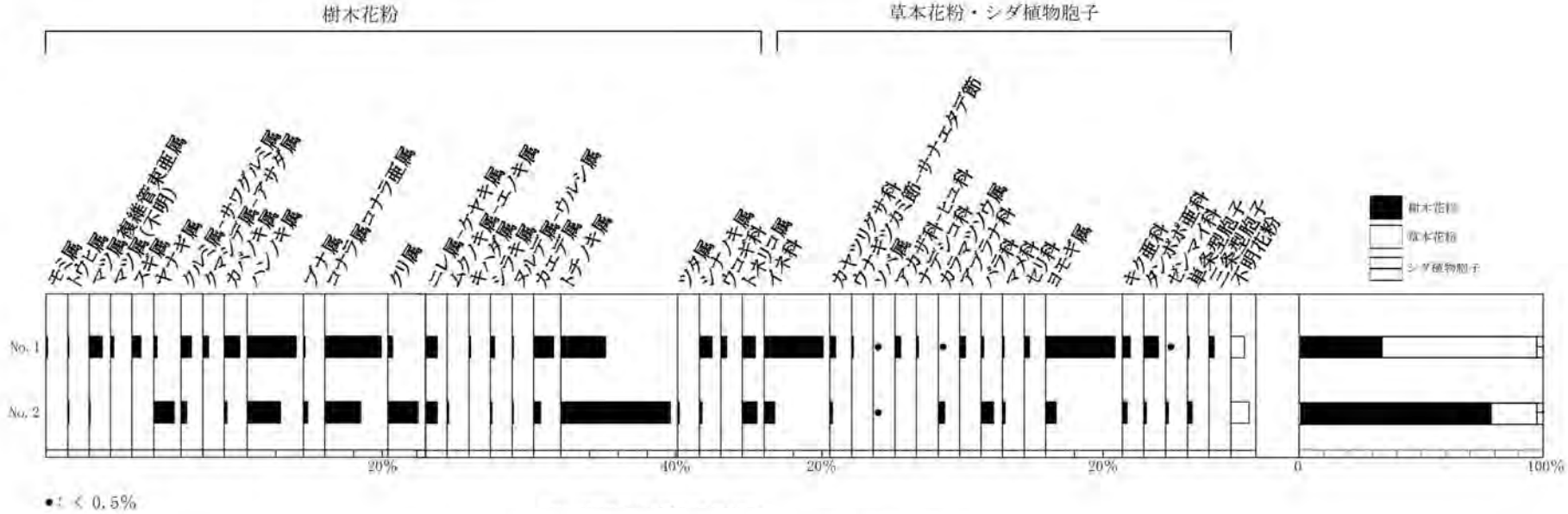
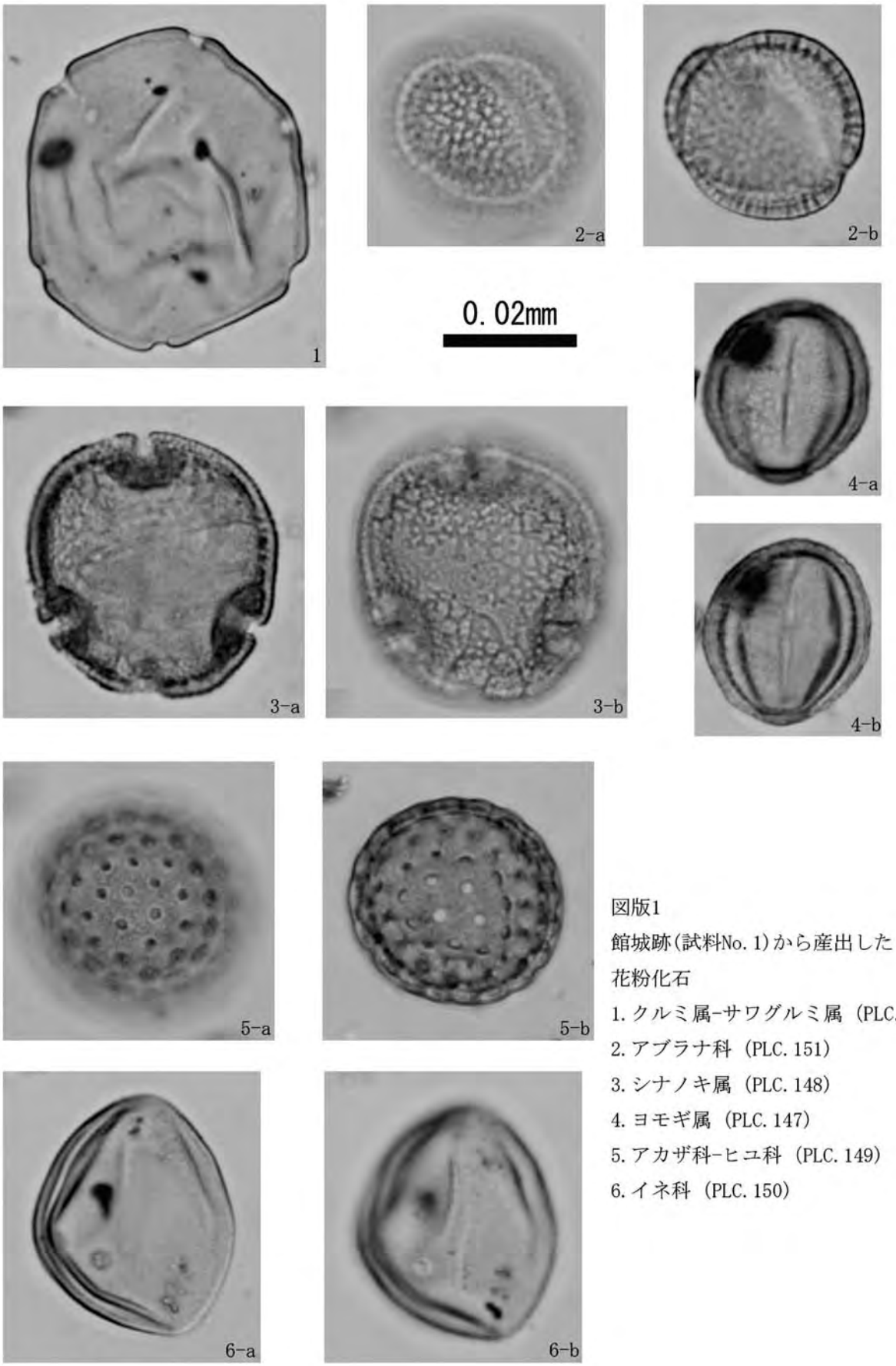


図1　館城跡における花粉ダイアグラム

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した）



図版1
館城跡(試料No. 1)から産出した
花粉化石
1. クルミ属-サワグルミ属 (PLC. 1
2. アブラナ科 (PLC. 151)
3. シナノキ属 (PLC. 148)
4. ヨモギ属 (PLC. 147)
5. アカザ科-ヒユ科 (PLC. 149)
6. イネ科 (PLC. 150)

Ⅵ章　調査のまとめ

１．館城北側の状況－第１調査区の成果－

平成21年度第３調査区で検出された「溝状遺構」の西側延長を確認するために、平成21年度第３調査区から水路を挟んで西側に調査区を設定した（第Ⅳ章図７参照）。

調査の結果、堀・柵列は検出できなかった。

館城跡では水路が郭内を縦貫しており、この水路が館城跡北側外郭線を形成していた可能性があることから、平成21年度から継続してこの区域の調査を行っている。現在のところ、これらの水路が館城跡の外郭線を形成していた積極的な証拠は確認できないが、今年度の調査においても、この区域で堀・柵列の検出が皆無であることから、消去法的に、こうした自然の水路を利用して外郭線を形成していた可能性を想定せざるを得ない状況となっている。

1－1～1－3調査区、1－4調査区では館城跡を縦貫し、西へ延びる沢状地形が検出された。これは、平成21年度第２調査区で検出した沢状地形と同じものである。また、1－6調査区では昭和39年地形測量図に描かれた沢状地形が検出された。これらの沢状地形は、館城築城期の陶磁器とともにガラス製品、ビニール製品などが出土しており、近代の農地造成にともなって埋め戻されたと考えられることから、館城築城期には存在したと考えられる。

1－2、1－3、1－6調査区で検出された沢状地形からは、館城期の陶磁器が多く出土しており、農地造成にともなって２次的に移動されているとはいえ、沢状地形周辺に散布していた陶磁器類が廃棄されたものと考えられる。したがって、遺物の出土量から考えて、少なくとも1－2、1－3、1－6調査区付近までは城内の一郭を形成していた可能性が高い。

1－2調査区（試料 No. １）及び1－6調査区（試料 No. ２）の沢状地形覆土の自然堆積層から土壌を採取し、花粉分析を行った（第Ⅳ章図11、図19）。

試料 No. １は沢状地形が近代に埋め戻される直前の自然堆積層である。館城築城期前後から近代に形成された土層と考えている。試料 No. ２は基本層序Ⅱ－１層相当である。館城築城期を確実に含むと考えられる。

花粉分析の結果、両試料ともコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、トチノキ属などの落葉広葉樹が優先し、試料 No. １の方が若干、ニヨウマツ類、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属などの二次林要素が多いことから、館城築城にともなう林の伐採によって、その後、二次林が広がった様相を示している可能性が指摘されている。

また、平成20、21年度花粉分析に続いて、今年度の試料からもソバ属が検出された。試料採取した土層の形成時期を特定しがたいことから、近代以降の所産である可能性が高いと考え、これまで、十分検討してこなかった。しかし、３ヵ年、６点の試料からソバ属が検出されたことから、館城築城以前に、遺跡周辺で何らかの耕作がなされていた可能性を検討する必要があると感じている。

館城築城以前の遺跡周辺の状況について、『報功心血』（函館市中央図書館所蔵）では、「其城塁を為すへき高原は一帯の茅茨にして、一刈以て平坦を見るの想ひあれとも、刈るに従ひ茅根に幾百の巨木僵倒し、其径概ね六七尺（後略）」（築城予定の高原一帯は茅原で、一刈りで、平坦になるかと思われたが、茅を刈ると、直径６、７尺の巨木が数百倒れていた）という状況であったと記されている。

日本列島において茅原などの草原が植生として安定することは珍しく、湿原などで他の植物の進入が難しい場合にのみ安定する。館城の立地する台地上は地下水位が高く、沢状地形周辺などで茅の繁茂し

ている様子が確認できるが、通常、安定的な環境下においては、現在の館城公園内のようにナラやカバ、ニレなどの広葉樹林が形成されると考えられる。したがって、『報功心血』に記された「一帯の茅茨」という状況は、館城築城からそれほど遠くない時期に、館城周辺の樹林が消滅し、その後、植生が回復しつつある遷移の段階において築城工事が着手されたものと考える。

館城周辺の樹林の消滅の原因を示す直接的な証拠は確認できないが、ソバ属の花粉が定量的に確認できることを積極的に評価するならば、館城築城以前に、館城周辺で「アラギ型」の焼畑が行われていた可能性が考えられる（註）。今後は近世の耕作の痕跡にも注意しながら調査を進める必要がある。

註：厚沢部町内では、戦後まで「アラギ型」の焼畑が行われており、その手法に、近世以来、大きな変化はないと考えられる。平成17年８月22日に行った昭和７年生まれの男性の聞き取りによると、まず、広葉樹林を伐採し、炭焼きを行い、その後、繁茂した笹や茅を刈り払い、火入れして畑にしたという。５町歩の広葉樹林を伐採するのに１家族で７年ほどを要したという。

２．史跡外西側の堀・柵列－第２調査区の成果－（図３２）

平成18年度の調査の結果、館城跡西辺の堀は西へ方位を変え、史跡外へ延びることが明らかになった。史跡外西側には、町道上館城ノ岱線が南北に延びており、平成21年度には、町道上館城ノ岱線を挟んで史跡指定地外西側の農地に調査区を設定したが、堀・柵列は検出できなかった。したがって、館城跡西側の堀・柵列は、町道上館城ノ岱線道路敷地内で方向を変えている可能性が高いと判断し、町道上館城ノ岱線敷地内に３箇所の調査区を設定し、調査を行った。

調査の結果、平成18年度調査区に隣接する2－3調査区において、東から延びてきた堀が、ほぼ90°に方向を変え、北へ延びることを確認した。2－3調査区から35m 離れた2－2調査区では堀が検出されず、柵列堀方とみられる幅15㎝の溝を検出した。町道上館城ノ岱線が真北に対して15°東偏するのに対し、堀はほぼ真北方向に延びることから、2－2調査区では、堀は調査区外西側に位置すると考えられる。

柵列と堀の間隔は、4.2mであることがこれまでの調査で確認されており、2－2調査区で検出した柵列の西側約４ｍには町道上館城ノ岱線の道路側溝があり、堀はこの道路側溝に破壊されているため検出できなかった可能性が高い。

また、2－3調査区では堀・柵列ともに検出されていないことから2－1調査区南側で堀・柵列は途切れるか、再度、方向を変えると推測する。

今年度の調査により推定できる堀・柵列の位置は、図32のとおりで、2－3調査区内で方向を変えた堀は、2－2調査区の位置では、調査区外を延び、堀の内側約４ｍのところに所在する柵列のみ検出できたと考える。2－2調査区から21m 北側に位置する2－1調査区では、堀・柵列ともに検出できないことから、2－1調査区南側で堀・柵列は途切れるか、再度、方向を変えると推測する。ただし、2－1調査区の東西両側ともに平成21年度に調査を行い堀・柵列が所在しないことが確かめられており、堀・柵列が屈曲する可能性は低い。

2－1調査区の遺構面は現況道路面から1.7mの深さがあり、館城築城当時は低湿地であったかもしれない。そのため、低湿地帯の手前（南）で堀・柵列の構築を止めた可能性も考えられる。

３．館城跡北側及び西側の堀・柵列（図３３、３４）

昭和23年米軍撮影の航空写真には、平成18年に検出した堀の延長上に、溝状の黒い筋が確認できる（図33）。この航空写真に今年度の発掘調査区を重ねたところ、今年度検出された堀と方位や位置が非常によく一致することが判明した（註）。この溝状の黒い筋は、2－3調査区から2－2調査区にかけての区間で

はほぼ真北方向に延び、2－2調査区付近で約30°東へ方位を変える。2－1調査区の東端をかすめて館城跡北西部の沢へと合流するようにみえる。

また、図33に示した航空写真では、1－1～1－3、1－4、1－6調査区で検出された沢状地形は全て確認できる。用水路として人為的な形状変更がなされた痕跡もなく、昭和23年の時点では、館城周辺の水系について、館城築城時から大きな改変はなされていないようである。

図34は昭和51年に国土地理院が撮影した航空写真に図33同様に今年度の調査区を重ねたものである。昭和23年撮影航空写真に見られる黒い筋の付近には、町道上館城ノ岱線の前身となる未舗装の道路が確認できるが、この道路に沿いの西側に溝が確認できる。この溝は、昭和23年撮影航空写真に見られる黒い筋とほぼ一致する位置にあるように思われ、２つの航空写真に見られる溝状の構造は、同一のものである可能性が高い。

第１調査区周辺では、昭和23年撮影航空写真では地点によってまちまちだった沢状地形の幅が均一となり、人為的な改変が加えられ、用水路化したことがうかがえる。1－6調査区で検出された沢状地形は昭和51年撮影航空写真では確認できず、埋め戻され、農地化された様子が確認できる。

註：使用した航空写真はいずれも座標が特定できないため、図面上の土地境界線と航空写真上の農地境界や道路敷地とを目視で重ね合わせている。大幅な狂いはないと思われるが、厳密なものではない。

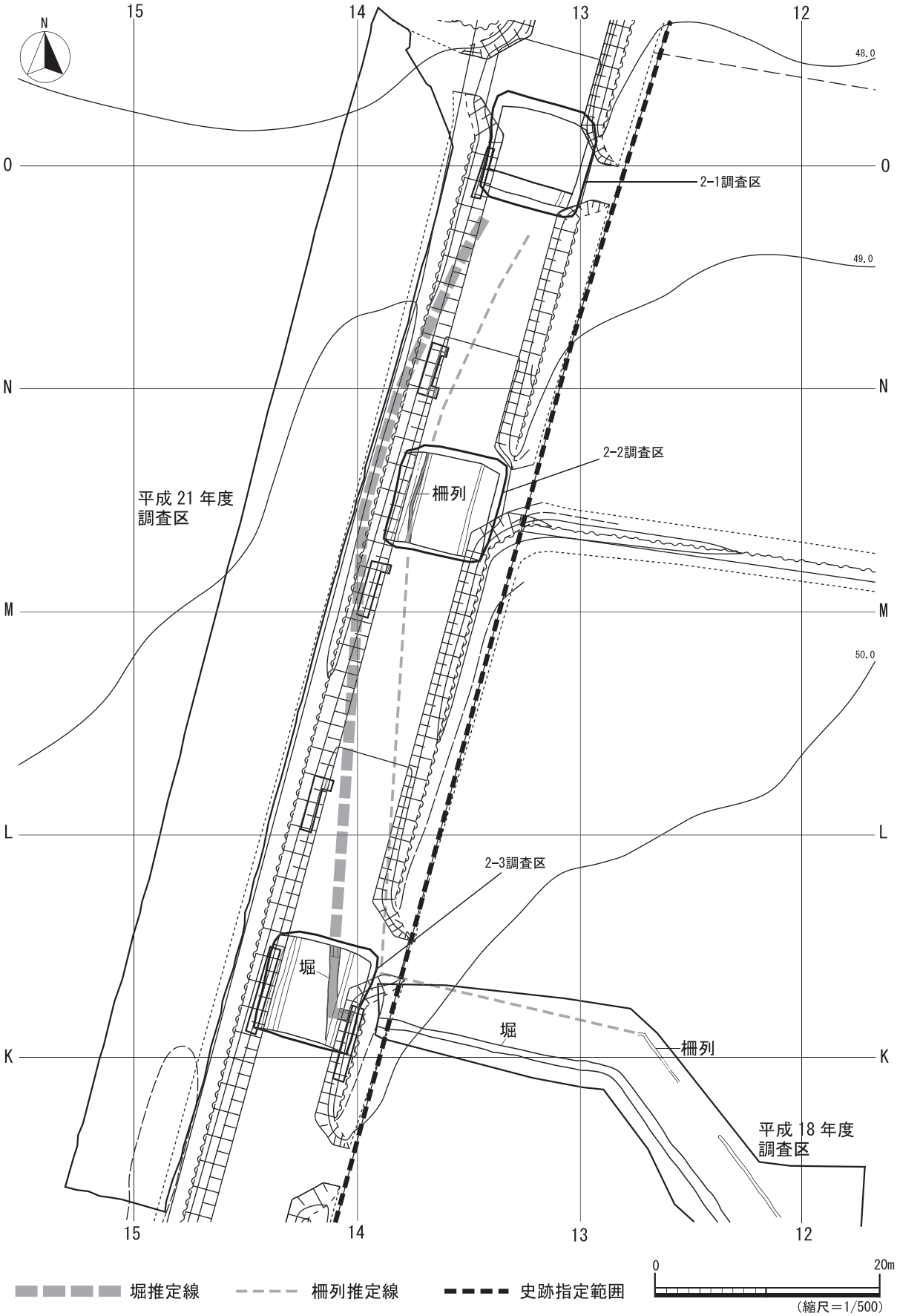


図32　第 2 調査区堀・柵列の位置推定図平面図

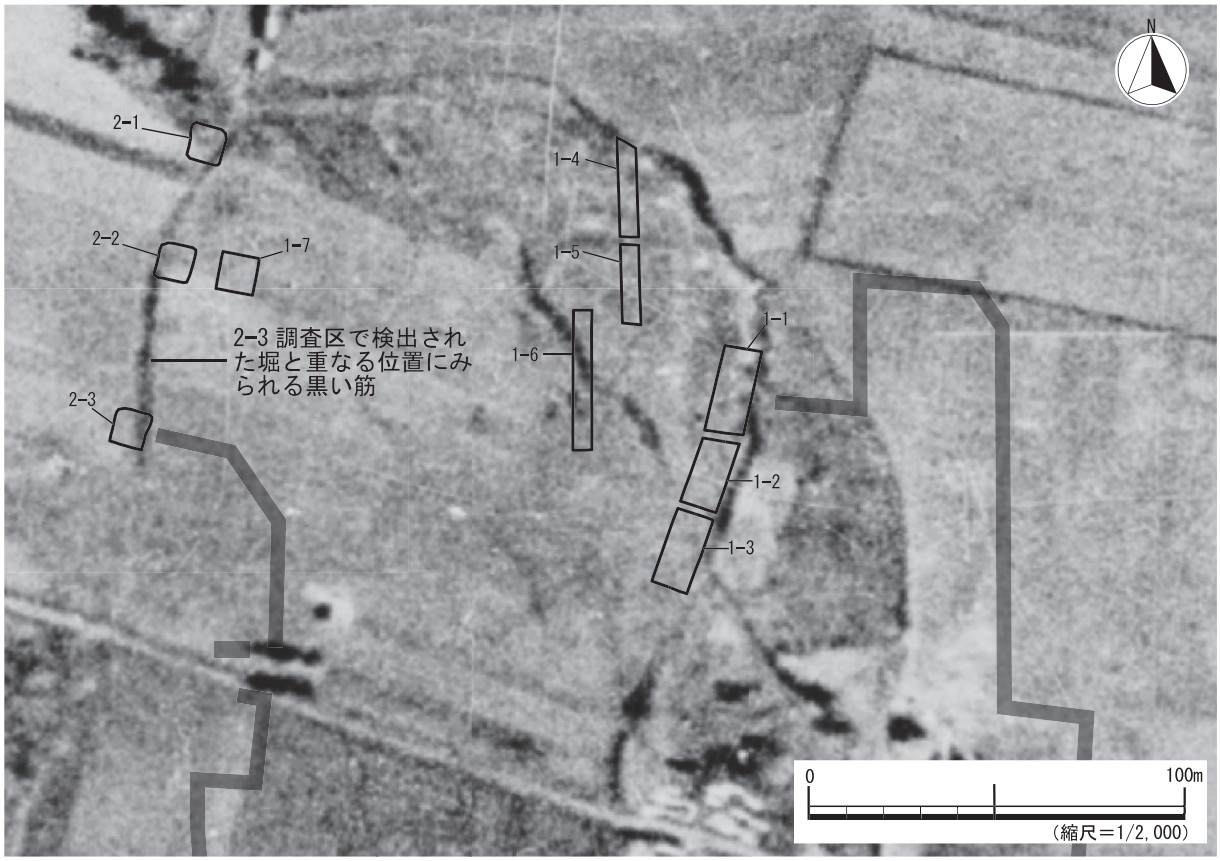


図33　昭和23年撮影航空写真と調査区の比較（昭和23年米軍撮影）

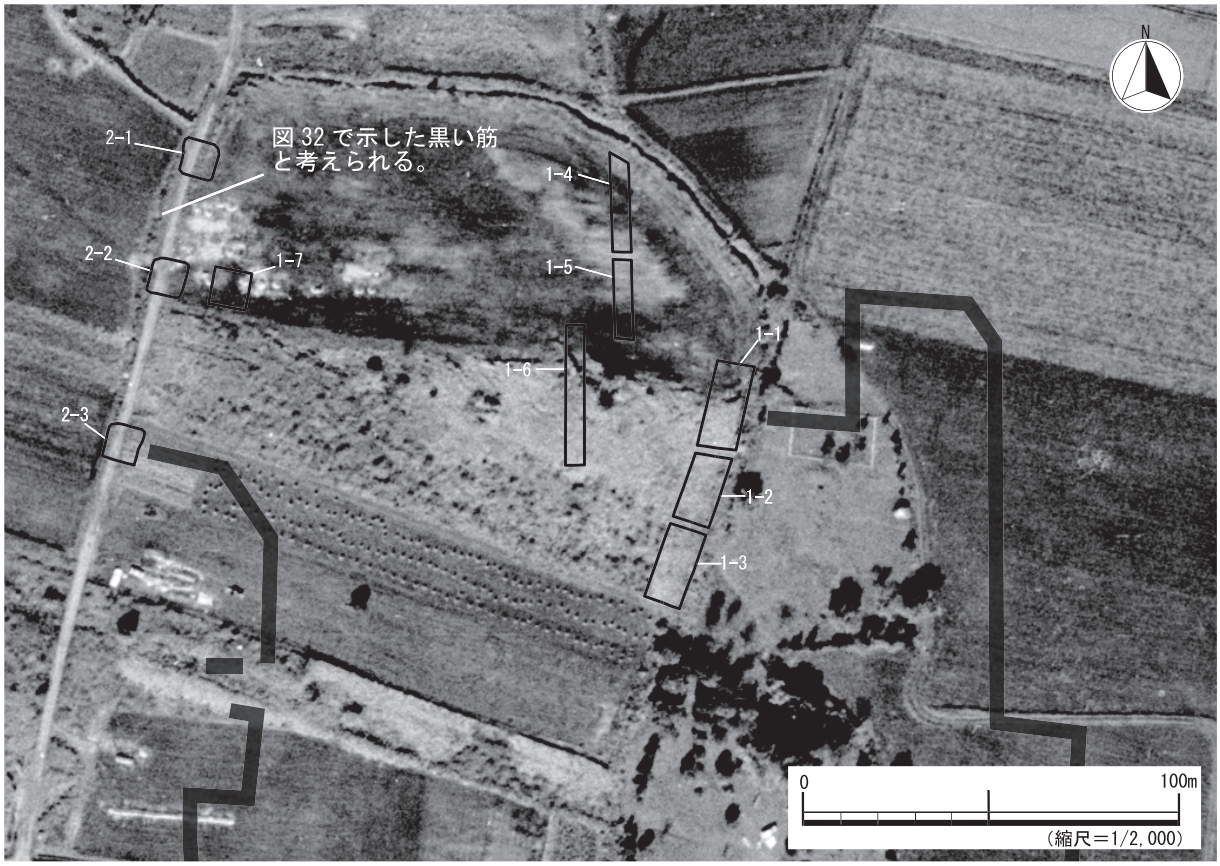


図34　昭和51年撮影航空写真と調査区の比較（昭和51年国土地理院撮影）

参考文献

＜引用文献＞

Ⅱ章

厚沢部町史編纂委員会　1969『桜鳥－厚沢部町の歩み』

厚沢部町史編集委員会　1981『桜鳥－厚沢部町の歩み』２巻

江差町史編集室　1979『江差町史』第三巻史料三　江差町

江差町史編集室　1981『江差町史』第四巻史料四（関川家文書）　江差町

江差町史編集室　1983『江差町史』第六巻通説二　江差町

菊池明　1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社

工業技術院地質調査所　1975『地域地質研究報告　館地域の地質』

永田富智　1991「北門史綱（前承－巻之四より巻之七）」『松前藩と松前－松前町史研究紀要－』松前町史編集室

永田富智　1966「工藤丹下長善履歴書（二）」『新しい道史』第４巻６号

北海道開発庁　1970『５万分の１地質図幅説明書　江差』

松前町史編集室　1974『松前町史』資料編第一巻

松前町史編集室　1988『松前町史』通説編第一巻下

Ⅴ章

＊章末に記載

＜その他の参考文献＞

厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所　1989『館城趾　遺構確認調査報告書』

厚沢部町教育委員会　1991『館城址遺構・範囲確認調査―第２・３次調査報告書―』

厚沢部町教育委員会　1991『館城址　遺構・範囲確認調査＝第2，3次発掘調査報告書＝』

厚沢部町教育委員会　2007『館城跡Ⅲ　平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

厚沢部町教育委員会　2008『館城跡Ⅳ　平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

厚沢部町教育委員会　2009『館城跡Ⅴ　平成20年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

厚沢部町教育委員会　2010『館城跡Ⅵ　平成21年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

大橋康二　1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社

大橋康二　1994『古伊万里の文様』理工学社

大橋康二　2004『世界をリードした磁器窯　肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005　新泉社

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念誌－』

九州近世陶磁学会　2009『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（関東・東北・北海道編）』第19回九州近世当時学会資料

財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター　2002『財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録　江戸時代の瀬戸窯』

財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター　2004『財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録　江戸時代の瀬戸・美濃窯』

函館市教育委員会　2006『特別史跡五稜郭跡箱館奉行所跡発掘調査報告書』

波佐見町教育委員会　1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第４集
波佐見町教育委員会　2006『大新登窯跡』波佐見町文化財調査報告書第17集
財団法人北海道埋蔵文化財センター　1984『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和58年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
北海道文化財保護協会　1985『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和59年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
北海道文化財保護協会　1986『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和60年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
松前町教育委員会　2005『東山遺跡』

写 真 図 版

写真 1　1−1〜1−6 調査区全景（南から）

写真 1　館城跡周辺航空写真（昭和23年米軍撮影）

写真 2　1－1 調査区沢状地形検出状況（南から）

写真 3　1－2 調査区沢状地形検出状況（南西から）

写真 4　1－3 調査区沢状地形検出状況（南から）

写真 5　1－1 調査区東壁断面（南西から）

写真６　１−２調査区東壁断面（南西から）

写真７　１−３調査区北壁断面（南西から）

写真 8　1−3 調査区東壁断面（南西から）

写真 9　1−4 調査区全景（南から）

写真10　1−4 調査区北端沢状地形検出状況（南東から）

写真11　1−5 調査区全景（南から）

写真12　1－6 調査区全景（南から）

写真13　1－6 調査区沢状地形掘削状況（南から）

写真14　1－6 調査区沢状地形検出状況（南から）

写真15　1－6 調査区東壁断面（南西から）

写真16　1－7 調査区全景（西から）

写真17　2－1 調査区南壁断面（北から）

写真18　2－1 調査区南壁サブトレンチ（東から）

写真19　2－2調査区全景及び北壁断面（南から）

写真20　2－2 調査区柵列検出状況（南から）

写真21　2－2 調査区柵列断面（南から）

写真22　2－3調査区全景及び北壁断面（南から）

写真23　2－3 調査区堀断面（南から）

写真24　2－3 調査区堀縦断面（東から）

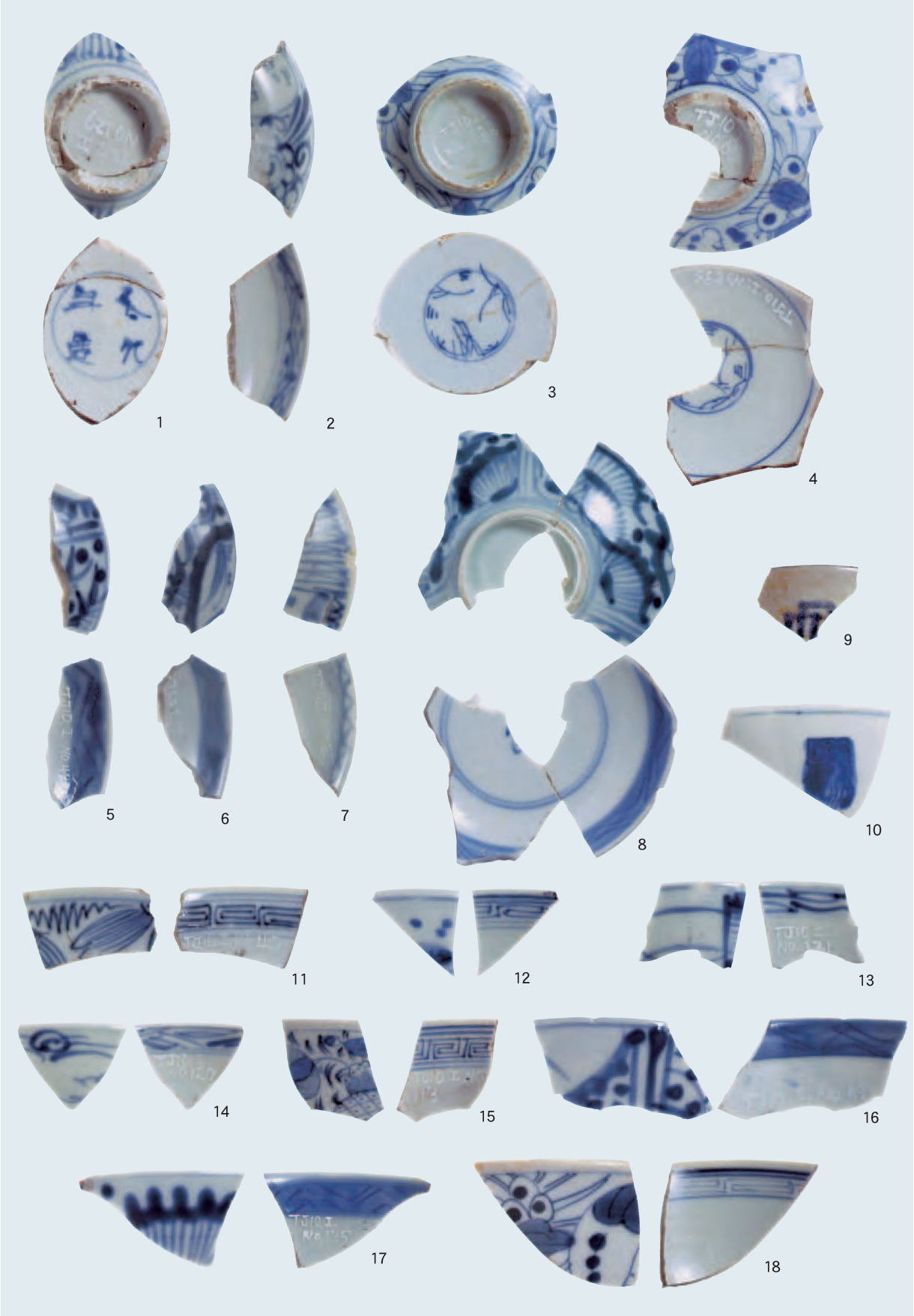


写真25　調査区出土遺物（1）

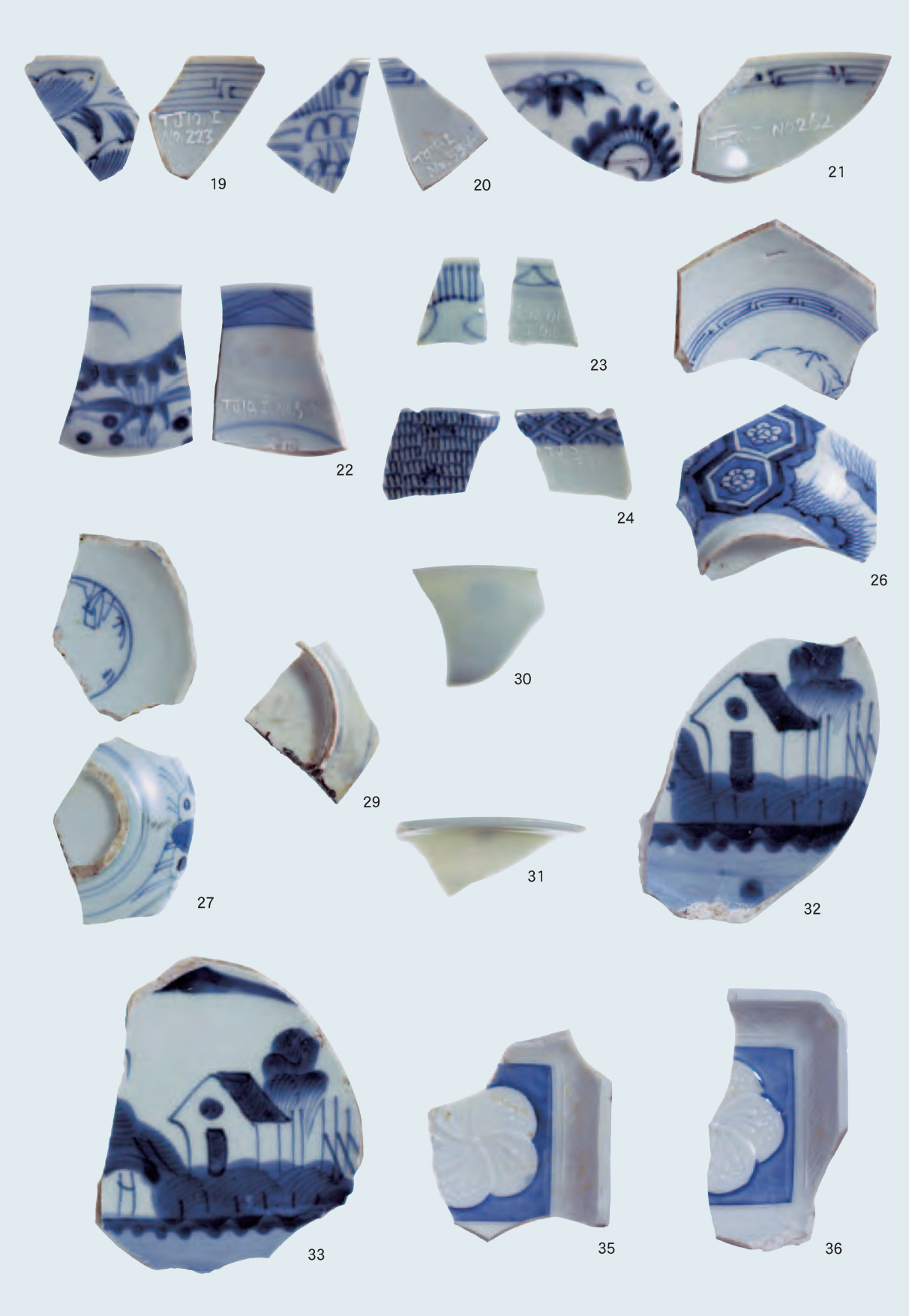


写真26　調査区出土遺物（2）

写真27　調査区出土遺物（3）

写真28　調査区出土遺物（4）

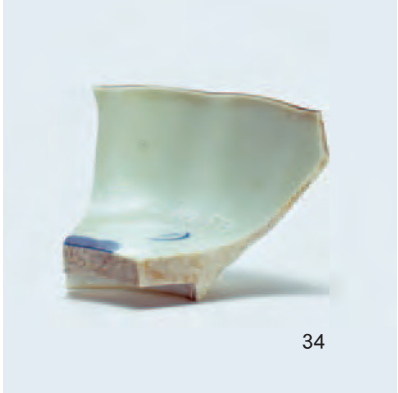


写真31　調査区出土遺物（7）

写真29　調査区出土遺物（5）

写真30　調査区出土遺物（6）

写真32　調査区出土遺物（8）

写真33　調査区出土遺物（9）

写真34　調査区出土遺物（10）

写真35　調査区出土遺物（11）

写真36　調査区出土遺物（12）

写真37　調査区出土遺物（13）

写真38　調査区出土遺物（14）

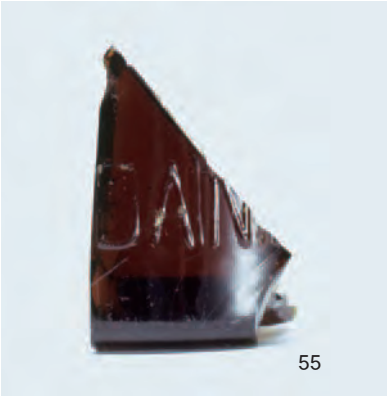


写真39　調査区出土遺物（15）

写真40　堀出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきまつまえししろあと　ふくやまじょうあと　たてじょうあと　たてじょうあと
書名	史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡　館城跡Ⅶ
副書名	平成22年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	厚沢部町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	第９集
編著者名	石井淳平
編集機関	厚沢部町教育委員会
所在地	〒043-1113　北海道檜山郡厚沢部町新町234－1
発行年月日	2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
館城跡（たてじょうあと）	北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほか（ほっかいどうひやまぐんあつさぶちょうあざしろおか）	1363	C-03-14	41° 52′36″	140° 20′46″	20100511 ～ 20090830 20101104 ～ 20111210	1,398㎡	埋蔵文化財緊急調査事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
館城跡	城跡	幕末	堀、柵列、沢状地形	陶磁器、金属製品	

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第９集
史跡松前氏城跡　福山城跡　館城跡　館城跡Ⅶ
平成22年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

平成23(2011)年３月31日
編集・発行　厚沢部町教育委員会
〒043－1113　北海道檜山郡厚沢部町新町234番地の１
ＴＥＬ（0139）64－3311
ＦＡＸ（0139）64－3822
印　　刷　（有）三和印刷
〒040－0061　北海道函館市海岸町８番11号
ＴＥＬ（0138）45－0845
ＦＡＸ（0138）43－3594